

[授業科目名] 哲学へのいざない		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけると いうことを授業の到達目標とする。			
授業の概要 古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生に にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第1回から第5回までは、哲学への導入と学習・思考など の諸問題を基本的考察とし、第6回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回 以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。 なお、初回授業時にこの科目に対する要望などを調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する 場合がある。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 哲学とは何か ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように 関わってくるのかということを考える。 「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。 第2回 考えるとはどういうことか 「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問いかけ は、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわか ったと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。 第3回 自己疎外 私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在するこ とを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面につい ても考える。 第4回 ことばの働き 私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによっ て大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまにつ いて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。 第5回 隠されたカリキュラム 学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものでもあると、イリイチ は気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾 けてほしい。 第6回 存在と価値 価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につ き動かされている私たち自身の生き方に注目する。			

第7回 実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を2つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問いに立ち向かう。

第8回 日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第9回 中国の哲学(1)

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回 中国の哲学(2)

老荘の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回 イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回 これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回 現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これからの自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回 公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。ある人類学者がかつて論じたことだが、日本人は、単独の個人としては、公共性が薄いという。本当だろうか。私たちはどう考えるだろうか。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回 試験

受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問いを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

[授業科目名] 宗教と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解できるようになることを、授業の目標とする。			
授業の概要 日常経験によって証明できない秩序に関心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。			
学生に対する評価の方法 毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本人は本当に無宗教か 宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。 なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。 第2回 古代神話のヒーローたち 古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。 第3回 イエス・キリストの7つの秘密 イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。 第4回 コーランの響き キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。 第5回 曼荼羅の神秘 仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。 第6回 一休さんの悟り方 頓知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粹な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。 第7回 浄土への祈り 浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。			

第8回 千と千尋の宗教学

宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第9回 豆腐小僧のかわいい悪戯

民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第10回 「道」の世界

剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第11回 枯山水の宇宙

わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第12回 謎の微笑

仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第13回 残照の聖ミカエル

ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第14回 花子さんはなぜ学校に現れるか。

宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第15回 現代社会と宗教

現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 倫理上に生じるアンビバレント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。			
授業の概要 倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。 問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。詳しくは第1回授業時に、また、レポートについては必要に応じて説明する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 倫理学とは何か 「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。 「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。 第2回 黄金のルール 多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。 第3回 男らしさと女らしさ さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。 第4回 総合的学習(1) 小グループによる話し合いの時間をもち、問題意識を深める。 第5回 「男と女」再考 討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エートス」（この語については、第1回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。 第6回 孤独について 「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。 第7回 「いじめ」の構造 なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、そして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。			

第8回 総合的学習(2)

小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第9回 環境問題はどこが難しいか

環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。

第10回 環境問題の現状と倫理

「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が叫ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。

第11回 生命と倫理(1)

身体性に注目し、私という存在を身体のみから考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。

第12回 生命と倫理(2)

生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、1頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。

第13回 産業社会と倫理(1)

さまざまな産業にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。

第14回 産業社会と倫理(2)

前回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。

第15回 まとめ

これまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問いを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 真田 郷史																																													
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」 現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。																																																
授業の概要 20世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった3つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。																																																
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全15回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。授業への出席・講義内容の理解(60%)・課題への積極的取り組み(40%)が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。																																																
授業計画(回数ごとの内容等) 「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の3つの領域から、それぞれ4つないし5つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は10分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。																																																
<table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>ガイダンス</td> <td>「応用倫理学」について</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>生命倫理(1)</td> <td>脳死をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>生命倫理(2)</td> <td>臓器移植をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>生命倫理(3)</td> <td>生殖医療をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>生命倫理(4)</td> <td>遺伝病をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>環境倫理(1)</td> <td>人間と自然をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>環境倫理(2)</td> <td>自然の権利をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>環境倫理(3)</td> <td>世代間倫理をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>環境倫理(4)</td> <td>地球全体主義をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>環境倫理(5)</td> <td>人口爆発をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>情報倫理(1)</td> <td>匿名性をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>情報倫理(2)</td> <td>プライバシーをめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>情報倫理(3)</td> <td>著作権をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>情報倫理(4)</td> <td>ネット社会と現実社会をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>情報倫理(5)</td> <td>言語グローバリズムをめぐる問題</td> </tr> </table>				第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について	第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題	第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題	第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題	第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題	第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題	第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題	第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題	第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題	第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題	第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題	第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題	第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題	第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題	第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題
第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について																																														
第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題																																														
第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題																																														
第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題																																														
第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題																																														
第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題																																														
第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題																																														
第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題																																														
第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題																																														
第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題																																														
第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題																																														
第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題																																														
第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題																																														
第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題																																														
第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題																																														
使用教科書 なし(必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。)																																																
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、TVのニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起きているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。																																																

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 科学的心理学の視点から、社会や人間について考察することを目標とする。また、これまでの自分の視点や世間の常識的な視点をとらえなおすことで、大学教育にふさわしい新たな枠組みを構築していく。			
授業の概要 知覚、記憶、学習、対人行動といった心理学の入門的内容を扱う。基本的な心理学の研究を紹介しながら、現実世界で遭遇する問題について考えていく。授業中簡単な実験や調査を体験することで、多様な心理学の世界を考えてみる。			
学生に対する評価の方法 再評価は行わない。授業中の小レポートと終盤に行う筆記試験で総合的に評価する。なお出席状況や授業態度が悪い場合は、減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理学と心の科学 第2回 科学的に考えるとは 第3回 無意識の世界1 無意識の世界とは 第4回 無意識の世界2 見えるものと見えないもの 第5回 無意識の世界3 記憶に残るものと残らないもの 第6回 無意識の世界4 好きになるときならないとき 第7回 マインドコントロール1 条件づけと行動変容 第8回 マインドコントロール2 説得による態度変容 第9回 マインドコントロール3 集団と権威の力 第10回 暴力的なところ1 暴力的な人の特徴 第11回 暴力的なところ2 暴力が起きやすい条件 第12回 暴力的なところ3 攻撃に関する理論 第13回 暴力的なところ4 身近な暴力・虐待 第14回 評価 第15回 調査研究の報告			
使用教科書 下野孝一著 「こころの解体新書 心理学概論への招待」ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと理解しやすい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の見点から青年期をとらえる視点を持ち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。			
授業の概要 本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割として自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。			
学生に対する評価の方法 再評価はしない。期間中課す4回のレポート(20%)と終盤に行う筆記試験(80%)から総合的に評価する。ただし出席状況や授業態度が悪いときには減点する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「青年期」の成立 第2回 成長する身体と性役割意識1-身体の成長と成熟する性 第3回 成長する身体と性役割意識2-性別と性役割意識 第4回 認知能力の発達1-抽象的な認知能力 第5回 認知能力の発達2-他者視点の取得と道徳性の発達 第6回 成長する私1-自己と自我 第7回 成長する私2-アイデンティティの確立 第8回 成長する私3-社会的比較理論と友人関係の発達 第9回 彷徨する親子関係-親子間のコミュニケーション 第10回 恋愛と性行動1-恋愛に関する理論 第11回 恋愛と性行動2-恋に落ちるとき 第12回 恋愛と性行動3-恋愛の進展 第13回 恋愛と性行動4-セクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 「青年心理学への誘い-漂流する若者たち-」 和田実・諸井克英著 ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻のみ (認定心理士資格取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の視点から青年心理学の基礎を学ぶとともに、青年期教育に関連する問題への心理学的アプローチについて理解することを目標とする。			
授業の概要 認定心理士取得を前提とする。青年心理学の基本的な問題について解説し、さらに心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究といった雑誌の関連論文の内容をしながら、最近の研究動向についても概観していく。			
学生に対する評価の方法 再評価をしない。指定論文の要約をも含めたレポートと、終盤における筆記試験によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「青年期」の成立と青年心理学の誕生 第2回 文化的規定と生物学的規定 第3回 身体の成長と瘦身願望 第4回 性の分化 第5回 性役割と現代社会 第6回 認知発達と学校教育 第7回 他者視点、共感性 第8回 アイデンティティの確立 第9回 自己の分化と自尊感情 第10回 友人とのつきあいかたと孤独感 第11回 親子のコミュニケーション 第12回 恋愛に関する理論：成人期アタッチメント 第13回 恋愛至上主義とセクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 関連する内容について、他の授業とあわせて考えると理解しやすい。また心理学の研究雑誌も目を通すようにしておくことがのぞましい。			

[授業科目名] 日本の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代日本の歴史、ことにアジア・太平洋戦争にいたる過程を、テキストに沿ってじっくり学ぶ。場合によっては当時の新聞・雑誌類を参照しながら、時代のリアリティを感じるのが大切である。諸君が時々耳にされるであろう「平成の開国」とはなにであるのか、「開国」は日本になにをもたらししてきたのかを、順を追って観ていく。			
授業の概要 松本健一の『日本の失敗』をテキストに、その内容を各章ごとに区切って講義し、時には教室で学生諸君に音読を求める。日本はなぜ戦争をし、それに負けたのかがテキストのテーマである。授業では一歩進んで、敗戦と現代の生活はどのようにつながっているのか、いま、日本はなにをしなればいけないかを考えて行こう。			
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に沿った小テストをする。出席も大切だが、各回の答案に表れる、問題をどうとらえたか、いかに真剣に答えようとしたかを重視する。毎期末、出席が足りないがどうかしてほしいという学生が出現するが、もはや取り返しのつかない事態であることを理解するべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本の歴史を学ぶ意味とは 第2回 日米の仮想敵国 第3回 発端としての「対支二十一カ条」 第4回 アジアの帝国主義 第5回 「日米衝突」のシナリオ 第6回 満州事変というファシズム 第7回 世界戦争のプロローグ 第8回 「侵略」という認識 第9回 統帥権干犯の思想 第10回 軍部の独裁化をめぐって 第11回 精神的鎖国としての国体イデオロギー 第12回 日本の「世界史」 第13回 大東亜戦争の「開戦の詔勅」をめぐって 第14回 時代思潮としての「死の哲学」 第15回 外の力 テキストは決して平易ではない。が、平易ではない書物に出会う場が、大学である。とはいえ、本には読み方がある。難しいものは、易くして理解する方法がある。だから心配することはない。いままでの自分がどうであったかは問わない。ただ、この科目を履修するには、毎回、きちんと出席することが大切である。学ぶことについて、近道の遠回りもありえる。しかし単位に関する限り、抜け道はない。各回の講義の時間内に、頭を使って課題を解決していくことが、案外、これからも、生きていく上で大切な能力だと理解されると思う。			
使用教科書 『日本の失敗』松本健一著、岩波現代文庫			
自己学習の内容等アドバイス 講義が終わったら、わからない用語を調べておくこと。前もって読んでおくつもりが出てきたら、それは大変な進歩である。松本氏の他の著作も読んでみることをすすめる。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早坂 泰行
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではドイツを中心に、ヨーロッパの近代史を取り上げる。現在私たちが自明のもののみなしている社会のしくみや制度、生活様式のうち、多くのものは近代に入ってから始めてつくり出されたものである。また近代の歴史は、現在の私たちにとってもなお重大な、多くの問題をも突きつけている。近代世界の形成過程を学ぶことをつうじて、現在の私たちの社会や生活のかたちを、複眼的に捉える姿勢を養うことを目指す。			
授業の概要 近代ヨーロッパ全体の動向を広く視野におさめながら、近現代(17世紀半ば～20世紀半ば)のドイツについて、その政治・経済・社会的な側面を取り扱う。講義においてはPowerPoint やDVDなどの視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な生活や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージを容易に捉えられるよう配慮する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 近代ヨーロッパとドイツ史に関するイントロダクション 第2回 ウェストファリア体制 第3回 啓蒙思想と近世の文化 第4回 フランス革命とナポレオンの時代 第5回 ドイツの自由主義とナショナリズム 第6回 「ドイツ」帝国の成立 第7回 第二次産業革命～大陸ヨーロッパとドイツの工業化 第8回 帝国主義の時代 第9回 世紀転換期ドイツの社会と文化 第10回 第一次世界大戦～総力戦の時代 第11回 ワイマル共和国 第12回 ナチズムと第二次世界大戦(1) 第13回 ナチズムと第二次世界大戦(2) 第14回 戦後冷戦と再統一の間のドイツ 第15回 期末試験			
使用教科書 特になし。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会や文化を捉えなおしながら、考えや論点をまとめること。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 京極 俊明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドイツの近代史を学び、基礎的な知識を身につけると同時に、ナショナリズム、帝国主義、総力戦といった近代史上の重要な概念について、理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 啓蒙専制君主の時代から、第一次世界大戦終結までのドイツの近代史について、ヨーロッパ全体の動向と結びつけて講義を行う。授業ではプリントとパワーポイントを使用する。またDVD教材「映像の世紀」を視聴する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から総合して判定する。この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 はじめに 第2回 啓蒙専制君主の時代（1） 第3回 啓蒙専制君主の時代（2） 第4回 ナポレオン戦争 第5回 ウィーン体制 第6回 1848年革命 第7回 ドイツ統一（1） 第8回 ドイツ統一（2） 第9回 ドイツ帝国の成立 第10回 ビスマルク体制 第11回 ヴィルヘルム2世の時代 第12回 第一次世界大戦（1） 第13回 第一次世界大戦（2） 第14回 まとめ 第15回 試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 参考図書として、坂井栄八朗「ドイツ史十講」（岩波書店）を挙げておく。			

[授業科目名] アジアの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鵜飼 尚代
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 最近「東アジア共同体」などという語を耳にするようになった。結束の目的は何であれ、ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われるので、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。			
授業の概要 世界史的観点からアジア史、とくに東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史の一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。			
学生に対する評価の方法 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価はa. b. c. を総合して判断することになる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業は以下の通り進める予定である。 第1回 授業についてのオリエンテーション 授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。 第2回 中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱） 第3回 中国の近代化②（日清戦争前後） 第4回 中国の近代化③（義和団事変前後） 第5回 中国の近代化④（中華民国成立前後） 第6回 中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後） 第7回 中国の近代化⑥（現代中国への道） 第8回 朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後） 第9回 朝鮮半島の近代化②（日清戦争前後） 第10回 朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後） 第11回 朝鮮半島の近代化④（南北分離前後） 第12回 朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道） 第13回 ベトナムの近代化①（独立前後） 第14回 ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道） 第15回 試験 但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。 【参考図書】 ：布目潮風、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）			
自己学習の内容等アドバイス 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がります。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1・3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校3年から6年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をNIE方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。			
授業の概要 社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方、国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料の活用することができる柔軟な探求力を養うことをねらいとしている。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(30%)、小テスト・レポート(30%)、テスト(40%)などを総合的に評価する。特に授業欠席や遅刻は減点の対象となる。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 社会科の目標及び授業全体の紹介 第2回 社会科教育の教科内容 第3回 小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)・小テスト 第4回 小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故) 第5回 小学校第4学年社会科(ごみ、水道)・レポート 第6回 小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県) 第7回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業) 第8回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)・小テスト 第9回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第10回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第11回 小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解) 第12回 具体的な人物学習の事例①近世の人物・レポート 第13回 具体的な人物学習の事例②明治維新の人物 第14回 各種統計資料の利用方法 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 東京学芸大学社会科教育学研究室編「小学校社会科教師の専門性の育成 改訂版」教育出版			
自己学習の内容等アドバイス 社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をNIEとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意しておくこと。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会科学を学習するとき、つねに歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観をつくっていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いかと思われるので、さまざまな史料等も提示して、学生が興味を持つように授業を構成する。			
授業の概要 日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から150年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(20%)、レポート(20%)、テスト(60%)などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について 第2回 近代教育制度の成立と展開 第3回 小学校の普及と子どもの生活の変化 第4回 天皇制教育体制の確立 第5回 明治期小学校教育の実態 レポート 第6回 中等教育の拡充、高等教育の拡大 第7回 大正デモクラシー期における社会と教育の再編 第8回 都市新中間層と農村・都市下層の教育 第9回 大正自由教育の高揚 第10回 貧窮する農村、変化する社会 レポート 第11回 戦時体制下の学校と子ども 第12回 敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革 第13回 新学制の展開、戦後教育の新段階 第14回 高度経済成長後の社会と教育 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 片桐芳雄・木村元編著「教育から見る日本の社会と歴史」八千代出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。特にテキストは次回の範囲を指定するので、事前によく読んで、授業に臨むこと。			

[授業科目名] 日本の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期レポート
授業の到達目標及びテーマ 智恵子抄の世界 詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、思考力と想像力を涵養する。			
授業の概要 詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ） 第2回 文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して） 第3回 『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで） 第4回 『智恵子抄』前詩「あをい雨」について 第5回 第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のころ」、詩「おそれ」とその背景 第6回 詩「或る宵」とその背景 第7回 詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景 第8回 愛の統合的定義の『智恵子抄』について 第9回 詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景 第10回 詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晚餐」とその背景 第11回 9年間の詩空白の意味と生活 第12回 第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景 第13回 第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景 第14回 テスト 第15回 『智恵子抄』その後			
使用教科書 大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社			
自己学習の内容等アドバイス 本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時に扱った詩とその背景について感想文を書く。			

[授業科目名] 英米の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河口 和子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～3年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～4年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本講座では、歴史的社会的背景を踏まえつつ、英語で書かれた文学、特にイギリス、アメリカ、アイルランド文学について概観することを到達目標とする。			
授業の概要 代表的な作家の優れた作品を選び、視聴覚機器を用いながら鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 定期試験（50%）、平常の授業態度、発言、レポート（50%）で総合的に評価を行う。 なお、授業開始から30分以上遅れてきた場合は欠席とする。遅刻3回で1回の欠席とする。 開講期間中、数回のレポート提出を課す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入（講義内容の説明、英国について） 第2回 英文学：英文学の導入 第3回 英文学：演劇と劇場 第4回 英文学：シェイクスピア1 第5回 英文学：シェイクスピア2 第6回 英文学：18世紀の小説 第7回 英文学：ジェイン・オースティン1 第8回 英文学：ジェイン・オースティン2 第9回 英文学：まとめ 第10回 アイルランド文学：アイルランド文化 第11回 アイルランド文学：神話、民話 第12回 アイルランド文学：W.B.イェイツ 第13回 米文学：演劇1 第14回 米文学：演劇2 第15回 試験日			
使用教科書 随時、資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げた作品を読んでおく。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。			
授業の概要 国の最高法規であり、国の基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 憲法とは何か 第3回 憲法とは何か（続） 第4回 社会契約説について 第5回 社会契約説について（続） 第6回 憲法の歴史 世界 第7回 憲法の歴史 世界（続） 第8回 憲法の歴史 日本 第9回 憲法の歴史 日本（続） 第10回 天皇制と戦争の放棄 第11回 三権分立について 第12回 自由と平等について 第13回 論文の書き方 第14回 社会権について 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
日本の憲法		講義	早川 秋子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前・後期	選択	前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ			
<p>周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を3本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにしたい。</p>			
授業の概要			
<p>憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下での平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。</p> <p>必要に応じてプリント配布、DVDやパワーポイントを使用する。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や他ごとをする学生を許さない。</p> <p>①受講態度 ②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうこともある）③最終評価（筆記テスト）（①20パーセント+②20パーセント+③60パーセント）</p> <p>追試・再試はレポートで行う</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回 憲法の制定・概念 憲法とは何か、どのような内容であるかを理解する</p> <p>第2回 国家について考えてみよう 個人の尊重、国民主権、平和主義</p> <p>第3回 人としての基本的な権利1 人権とは何か、幸福追求権</p> <p>第4回 人としての基本的な権利2 新しい人権・自己決定権（尊厳死法の必要性について考える）</p> <p>第5回 人としての基本的な権利3 法の下での平等（女性の再婚禁止期間・親殺し重罰規定違憲訴訟）</p> <p>第6回 人としての基本的な権利4 信教の自由（靖国神社参拝問題を考える）</p> <p>第7回 人としての基本的な権利5 表現の自由（報道の自由とプライバシー保護のバランスを考える）</p> <p>第8回 人としての基本的な権利6 生存権（朝日訴訟と社会保障制度）</p> <p>第9回 平和主義1 戦争放棄（歴史的視点から考える）</p> <p>第10回 平和主義2 自衛隊（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟）</p> <p>第11回 天皇 象徴天皇制（国事行為と女性天皇）</p> <p>第12回 民主主義の政治制度 権力分立・裁判員制度</p> <p>第13回 地方自治と 条例の制定（住民による直接請求）</p> <p>第14回 憲法の改正 改憲の可能性・問題点</p> <p>第15回 総まとめ・評価</p>			
使用教科書			
初宿正典他『いちばんやさしい憲法入門』（第4版）有斐閣 1600円			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのか、という日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。ただ、聞き流すのではなく、書き留めて改めて考え直す習慣をつけてみて下さい。</p>			

[授業科目名] 法と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。			
授業の概要 民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 法のかたち 第3回 国家法と非国家法 第4回 法と道徳 第5回 法と道徳（続） 第6回 法のちから 第7回 法による制裁 第8回 刑罰について 第9回 裁判とはいかなるものか 第10回 司法の制度 第11回 民法とはいかなる法か 第12回 損害賠償の法 第13回 財産所有の法 第14回 契約の法 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者ほどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。法や裁判に関する読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 政治と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 島田 弦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この講義は、政治と社会に関する現代の問題について民主主義という視点から考えてみることにする。「民主主義」というのは、多くの人にとってもっとも身近な政治用語でしょうし、大切なことだと思うでしょう。しかし、民主主義の内容は時代や地域により多種多様です。この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かを考えます。			
授業の概要 この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かについて多くの事例をもとにビデオ素材などをもとに考えます。講義で取り扱ったビデオの内容について、400-600字のレポートを書いてもらいます（おおむね5回から6回）。また、授業開始15分以上の入室を認めないので注意すること。			
学生に対する評価の方法 ビデオに関するレポートの評価及び期末試験（論述式）の評価を合計して算出する。したがって、一定以上の成績を取るためには、各レポートの提出が重要であることを理解して下さい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1. オリエンテーション：民主主義のイメージ 2. 民主主義のための戦争 3. 民主主義のための戦争（対テロ戦争に関するビデオ） 4. 民主主義と表現の自由 5. 民主主義と表現の自由（デンマークの事例に関するビデオ） 6. 民主主義とマスメディア 7. 民主主義とマスメディア（ベトナム戦争とマスメディアに関するビデオ） 8. 民主主義と選挙 9. 民主主義と選挙（日本の選挙に関するビデオ） 10. 民主的社會における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ前半） 11. 民主的社會における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ後半） 12. 民主主義の実験 13. 民主主義の実験（中国の学校での試みに関するビデオ） 14. 講義のまとめ 15. 期末試験 受講者数、受講者の構成によって若干変更する場合があります。 また、時事問題を取り扱うために、順番や内容を変更する場合があります。			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 各回のレポートを提出しないと、成績評価が大幅に下がり、単位認定が困難になります。短いレポートなので、欠かさずに提出するようにしてください。			

[授業科目名] 経済と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。 本講の目標は、学生諸君に、①一見、疎遠に感じられる新聞の経済欄に親しくなってもらうこと、「経済記事が読める」または経済欄の記事に「ついていける」ようになってもらうこと、②現代経済社会の諸問題について理解を深めてもらうこと、ここにある。			
授業の概要 上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道VTR）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートI）。そして、わが国の経済発展のありようについて、特にその光と影の部分について考えてみる（パートII）。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参画態度（評価ウエート20%） ②産業・経済記事のレポート……具体的に産業・経済に関する新聞記事の一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を展開したりする。）（評価ウエート40%） ③最終レポート……授業内容からのテーマについてレポートを作成提出。（評価ウエート40%） 以上3点から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（経済学の役割） 第2回 序・市場経済とは何か？ われわれが生きていく経済社会の基本メカニズムを考える。 ≪パートI 経済記事を読む上で知っておきたい経済知識≫ 第3回 円高・円安と経済生活① 外国為替の基本的メカニズムを学ぶ。 第4回 円高・円安と経済生活② 円高・円安に関する記事を読むときに必要な知識を学ぶ。 第5回 GDPとは何か？① 日本経済を大づかみに捉える（巨視的にみる）手法＝GDPについて学ぶ。 第6回 GDPとは何か？② そもそも「豊かさ」とは何か？ その指標としてのGDPの問題点を考える。 第7回 景気とは何か？① 景気循環はなぜ起るか、その原理と景気予測の手法について学ぶ。 第8回 景気とは何か？② 日本の景気循環のありようを歴史的に振り返る。 第9回 政府・財政の役割とは？① 現代経済における政府の役割について学ぶ。 第10回 政府・財政の役割とは？② 日本の財政の現状と問題点を考える。 ≪パートII 経済社会の諸問題を考える ～経済発展の光と影≫ 第11回 日本の経済社会はどのように発展してきたか、VTRを見ながらその発展の経緯をサーベイする。 第12回 われわれは経済発展で何を、何を失ってきたか？ 経済成長の影の部分（自然破壊やさまざまな社会病理現象）について考える。 第13回 世界経済の諸問題① グローバル化とは何か？ アジア地域の経済の発展の経緯を考察しつつ、その意味を考える。 第14回 世界経済の諸問題② 資源・エネルギー、環境問題など、現代世界が抱える問題について考える。 第15回 まとめと発展的学習のための主要文献解説。			
使用教科書 テーマ関連の資料・記事などを毎回配布し、それに従って授業を行う。準拠する文献は、釜賀雅史著『日本経済を読む－新聞記事で学ぶ経済学－』学文社（参考書≒教科書）。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。 ≪より深く学ぶために≫ 授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみる。			

[授業科目名] 企業と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解できること、乃至、就職活動や社会人へのパスポートとしての企業経営の知識を身につけることが目標である。			
授業の概要 企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内で網羅することは到底不可能なので、下記の4つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①会社の方向性を決める「戦略論」、②顧客のニーズを探り、売れる仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70%）、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識（15%）、受講態度・欠席回数（15%）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要と心得. 企業と社会および環境変化との関係. 経済学と経営学との違いについて. 第2回 株式会社など企業形態の諸特質について. 第3回 企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について. 第4回 企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境） 第5回 基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など） 第6回 マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて） 第7回 市場細分化およびその基準、標的市場の選定 第8回 マーケティングの基本戦略 ①製品戦略 第9回 マーケティングの基本戦略 ②価格戦略 第10回 マーケティングの基本戦略 ③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略 第11回 組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など） 第12回 会計 ①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書 第13回 会計 ②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益） 第14回 会計 ③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など） 第15回 学期末試験			
使用教科書 教科書は使用しない。随時、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復讐および専門用語の意味調べ等が必須である。			

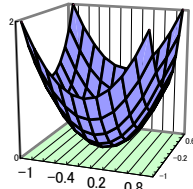
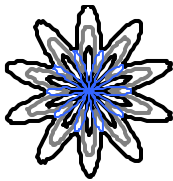
[授業科目名] 情報と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会、特に便利で効率的で合理化が叫ばれるような情報社会といわれる現代、そのメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）を認識することも重要である。さまざまな社会の病理現象を認識し、その中で如何に生きるべきかを問い直すことが目標でありテーマである。			
授業の概要 IT（情報技術）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。			
学生に対する評価の方法 学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数、欠席回数などのも考慮に入れて総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明 第2回 ①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど） 第3回 ②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、eコマース、光ファイバーケーブルなど） 第4回 情報という言葉の由来と歴史的な展開 第5回 情報の性質と種類 第6回 現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質） 第7回 情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して 第8回 ①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影） 第9回 ②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影） 第10回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について） 第11回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、eビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み） 第12回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活） 第13回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象） 第14回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題） 第15回 学期末試験			
使用教科書 『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）			
自己学習の内容等アドバイス 回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。			

[授業科目名] 社会学／家族の社会学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会学の対象と方法についての基礎知識を得ること。グローバル化という現代社会の現象が、私たちの日常生活をどのように変容させているかを知ること。毎回、小テストを実施する。インプットと同時に、アウトプットを学ぶこと。すこしでも文章を書くことが大切。			
授業の概要 指定テキストに沿って、各項目について講義する。テキストのテーマは、グローバル化時代の日常生活であり、私たちの学校生活、家庭生活、将来の職業生活がいま、どのような変化に直面しているかを学ぶ。事柄にはすべて歴史という側面がある。現在の大変さを知って、過去の教訓に学ぶのもまた重要だ。生きることに希望をもっていこう。そのための道案内が、社会学に課せられた課題でもある。			
学生に対する評価の方法 ほぼ毎回、講義内容に沿った小テストもしくはレポートを求める。これは出席と試験が一体になったもので、当然、出席は重視するが、小テストの答案が、出席していた内容を物語ることになることに注意すべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。 第1回 社会学入門、社会的相互行為、グローバル化 第2回 社会学理論と社会調査 第3回 身体社会学（健康・病気・障害） 第4回 社会成層と階級 第5回 貧困・社会的排除・福祉 第6回 人間の安全保障 第7回 人種とエスニシティ 第8回 組織社会学 第9回 戦争と現代 第10回 ライフストーリーの社会学 第11回 家族論 第12回 戦後日本の家族1 第13回 戦後日本の家族2 第14回 高度成長期の日本社会 第15回 現代をどうとらえるか テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、社会的な見方を学んでみよう。			
使用教科書 『入門 グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社			
自己学習の内容等アドバイス 予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。それも一般的な語義で十分なのか、『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る必要があるのか、それを判断するのもいい訓練になる。			

[授業科目名] アメリカの社会と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河井 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人種、階級、ジェンダーの視点から、もうひとつのアメリカをみる。マイノリティの視点から、アメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 自由の国としてのイメージをもつアメリカ。しかし、アメリカの自由は固定されたものではなく、21世紀になった今もたえず議論されているし、また変えられていくべきである。アメリカ合衆国が軍事的、経済的、文化的に世界で傑出した国でありながら、今なお戦争をしているためにその国際的影響力は弱まっている時であるからこそ、アメリカの歴史と価値を学ぶことは重要である。 本授業では、映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、「自由」の意味、その社会的条件、その境界（自由を享受する資格）という3つの視角から、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する20世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる20世紀後半をみていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度及び授業内で行うレポートによる授業の理解度（40%）、最終に実施する試験（60%）で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義の概要説明 「アメリカの世紀」 第2回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第3回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第4回 アメリカの文化の成立—その光と影（南北戦争後～1890年代） 第5回 20世紀前後のアメリカ—1890年代 第6回 革新主義の時代—1900年代～1910年代 第7回 大衆消費社会の展開—1920年代 第8回 「現代アメリカ」の危機—1930年代 第9回 アメリカの世紀へ—1940年代前半 第10回 冷戦下の「黄金時代」—1940年代後半～1950年代 第11回 激動の時代—1960年代 第12回 激動の時代—1960年代 第13回 保守の時代—1970年代～1980年代 第14回 文化戦争の世紀末—1990年代以降 第15回 試験日			
使用教科書 有賀夏紀『アメリカの20世紀』（上・下）（中公新書） 参考史料は適宜配布する。 【参考図書】 エリック・フォナー『アメリカ 自由の物語』（上・下）（岩波書店、2008年）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。			

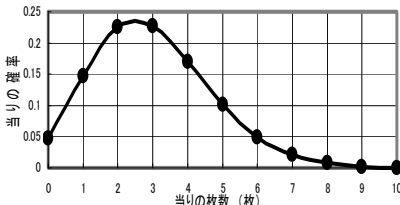
[授業科目名] 民族と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。			
授業の概要 民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50％）に、受講態度（出席、遅刻、早退、出席カードへの記入など）を加味（50％）しながら、総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。 第2回 アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。 第3回 文化人類学と民族1。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。 第4回 文化人類学と民族2。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。 第5回 自然人類学と民族1。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。 第6回 自然人類学と民族2。人種と形質、民族との関係について述べる。 第7回 自然人類学と民族3。血液型と民族の関係について述べる。 第8回 スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。 第9回 世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。 第10回 衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。 第11回 食と民族、その1。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。 第12回 食と民族、その2。食材と食に関する禁忌。 第13回 食と民族、その3。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。 第14回 住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。 第15回 評価試験。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。			

[授業科目名] 国際社会の動き		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらによって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。			
授業の概要 まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族・文化（言語・宗教）・国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、わが国と対照しつつ考察する。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 国際社会とは 第3回 アジアの国々 第4回 ヨーロッパの国々と諸民族 第5回 地理と歴史の重要性 第6回 地理と歴史の重要性（続） 第7回 民族とは何か 第8回 言語と世界 第9回 宗教と世界 第10回 宗教と世界（続） 第11回 国家と世界 第12回 アメリカと世界 第13回 アメリカと世界（続） 第14回 日本と世界 第15回 筆記試験			
使用教科書 『なるほど知図帳 2011 世界』昭文社 『世界史年表・地図』吉川弘文館			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につければ、国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫	
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部	
授業の到達目標及びテーマ 数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つのか、数式を図形化するとこんな面白い図形になるのか、ということ、パソコンを利用しつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようになることを到達目標とする。				
授業概要 高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。				
学生に対する評価の方法 出席と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、図形の自由作成と期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。				
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系 第2回 関数関係（1）：1次関数、多次関数（線、面積、体積） 第3回 パソコンによる1次、2次関数の図形化 第4回 関数関係（2）：弧度法と三角関数 第5回 直角座標と極座標 円、楕円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標 第6回 三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる図形化 第7回 図形の自由作成 第8回 関数関係（3）指数関数、対数関数 第9回 パソコンによる指数関数、対数関数等の図形化 第10回 微分概念とパソコンによる近似計算。 第11回 積分概念とパソコンによる近似計算 第12回 関数関係（4）特殊な関数、パソコンによる図形化 減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リサージュ、バラ曲線等。 第13回 ベクトル：ベクトル概念を理解し、演習を行う 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ				 <p>半径の異なる円の等高面</p>
				 <p>三角関数と極座標を用いた花模様</p>
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 石原 繁 編 「大学数学の基礎」 裳華房				
自己学習の内容等アドバイス パソコンを使って数式・数学の新しい理解に活用するため、欠席はパソコンの新しい操作の仕方を学ぶ機会を逸するため極めて好ましくない。				

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 数学に関する興味・関心を持つことと数学的素養を養うことを目的とする。数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理生を理解し、日常生活に活かし、考えることの楽しさや数学的な美しさや良さを理解することを到達目標とする。また、初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置く。			
授業の概要 この講座では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気付くとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。また、「算数的活動」、「見通し」をもち、筋道を立てて考え、表現する能力の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・レポート（約20%）、試験の結果（60%）などで総合的に評価を行う。 特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・算数を学ぶことの意義・数学的背景) 第2回 数の表し方と記数法の歴史の概観（零の発見と位取り・記数法） 第3回 数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九） 第4回 数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除） 第5回 数と計算の意味とその活用（四則演算の性質・問題作成） 第6回 日常における数学的な事象の考察 第7回 数と計算領域のまとめ及びテスト 第8回 小学校における図形の指導目標と内容 第9回 「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円） 第10回 「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形） 第11回 「図形」：対称・合同な図形がつくる美しい模様(敷き詰め) 第12回 「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図） 第13回 「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐） 第14回 図形領域のまとめ及びテスト 第15回 小学校学習指導要領の目標及び授業のまとめ （数と形についての関係及びその算数的考察）			
使用教科書 必要に応じて、そのつどレジュメを配付する。(参考書 小学校学習指導要領解説 算数編 文部科学省 東洋館出版社)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。			
授業の概要 ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。 具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。			
学生に対する評価の方法 毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（40%） 講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。（20%） 講義内容の理解度の程度を評価するテストを第8回と第14回に行う。（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 集合と数（ピタゴラスの実験、幼児の数の認識） 第2回 数の表し方と記数法の歴史（4大文明の記数法） 第3回 零の発見と位取り記数法 第4回 n進数（2進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法） 第5回 数の拡張と演算 その1 第6回 数の拡張と演算 その2 第7回 数の拡張と演算 その3 第8回 四則演算の意味（加法、減法、乗法、除法）・小テスト 第9回 数と計算の意味の活用（指数計算、複利計算、対数計算、方程式解法） 第10回 数と計算の意味の活用（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数） 第11回 図形の形と大きさ 第12回 小学校における図形の指導目標と内容 第13回 中学校における図形の指導目標と内容 第14回 三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト 第15回 日常の事象の数学的な手法での観察			
使用教科書 「入門 算数学」 日本評論社 黒木哲徳 著 ≪参考書≫：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書 文部科学省			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 本日の授業範囲を教科書で復習しておく。 関連する内容を図書・インターネット等で調べる。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者] 森 千鶴夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。 確率と統計の初歩的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。			
授業概要 確率について身の回りの出来事を例にとりて説明し、次に確率の延長としての確率分布（2項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。			
学生に対する評価の方法 出席状況と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ 第2回 確率、2項分布 第3回 パソコンによる計算と表示 第4回 データ：データの収集、整理、平均値、広がり、標準偏差 第5回 パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示 第6回 ポアソン分布、正規分布、 第7回 偏差値 第8回 パソコンによるポアソン分布、正規分布に関する計算とグラフ表現 第9回 最小2乗法：回帰直線、近似曲線 第10回 共分散、相関、相関係数 第11回 パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現 第12回 推定と検定 第13回 生活と統計 物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ			
		 <p>この図はお年玉つき年賀はがきが100枚ある場合に4等が1枚も当たらない確率は0.05（5%）であり、たとえば3枚当たる確率は0.23（23%）であることを意味する。この分布は2項分布と呼ばれる。このような計算をして図に示すことはEXCELを使えば簡単にできる。</p>	
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 室 淳子・石村貞夫著 「Excel でやさしく学ぶ統計解析」 東京図書			
自己学習の内容等アドバイス 上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めて欲しい。そのためには、アンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようなる。 ・多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。 ・統計学独特の専門用語を身につける。 			
授業の概要 <p>私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多くある。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析し、グラフ表現を行う手法を体得する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。(40%) 講義内容の理解を評価するテストを第8回と第14回に行う。(40%) 自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。(20%)</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等) <p>第1回 統計学の考え方の基礎・分析概念 第2回 確率と確率分布の特徴 第3回 母集団と標本・標本抽出 第4回 階級分けと資料の作成 第5回 標本分布の特性値 ・ 中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均) 第6回 標本分布の特性値 ・ 変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数) (テスト) 第7回 確率とは・確率を表す方法と記号 第8回 確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト 第9回 二項分布 (離散型確率分布) 第10回 ポアソン分布 (離散型確率分布) 第11回 一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布) 第12回 正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値 第13回 統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布 第14回 母平均μの推定平均・第3章と第4章のテスト (テスト) 第15回 t分布</p>			
使用教科書 <p>「はじめての統計学」 日本経済新聞社 鳥居泰彦 著</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
自然のしくみ		講義	井谷 雅治
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1・3年次前期	選択 (教職必修)	幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容、観察・実験を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解・技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説(理科編)、			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習 			

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解、技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、			
自己学習の内容等アドバイス <input type="checkbox"/> 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 <input type="checkbox"/> シラバスについての予習 <input type="checkbox"/> 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマ：「生命の科学」では、生体の基本構造である細胞を学ぶ。 到達目標：生体の基本知識の習得			
授業の概要 細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみを考える基盤を作っていきましょう。			
学生に対する評価の方法 筆記試験を行う。評価は以下の配分で行う。 出席点：全出席で10点 試験点：中間試験（40点）・期末試験（50点）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命科学とは 第2回 細胞：細胞の構成 第3回 細胞内小器官の機能 第4回 組織：上皮組織・結合組織・神経組織・筋組織 第5回 生体の構成：生命の物質的基盤 第6回 生命の設計図1 第7回 生命の設計図2 第8回 中間試験 第9回 生体内恒常性 第10回 代謝 第11回 エネルギー産生 第12回 情報伝達 第13回 食と健康 第14回 記憶 第15回 期末試験			
使用教科書 生命科学 羊土社 東京大学生命科学教科書編集委員会			
自己学習の内容等アドバイス 講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください			

[授業科目名] 人間と地球環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大矢 芳彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるためには何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。			
授業の概要 授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。			
学生に対する評価の方法 基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業計画は、第1回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。 第1回 ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など） 第2回 宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け） 第3回 星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識） 第4回 太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴） 第5回 地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る） 第6回 生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか） 第7回 生命の誕生（地球上で生命がいつに誕生したのかを探る） 第8回 生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る） 第9回 地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る） 第10回 東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握） 第11回 地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識） 第12回 エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察） 第13回 地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測） 第14回 生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較） 第15回 定期試験			
使用教科書 「はるかなる地球」 大矢芳彦著 荘人社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 科学の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松浦 俊輔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然科学や、それと密接に関係する技術が、現代の私たちの社会生活や精神活動にとってどんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。			
授業の概要 自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総合的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）は自然の統一的理解のためのアイデアや実験という面からの話題を取り上げます。			
学生に対する評価の方法 ①日常の出席状況と、毎回提出してもらった授業の感想 ②期末試験（基礎知識の確認と論述。論述はあらかじめ課題を出しておき、原稿を用意して試験に臨んでもらいます）を総合評価（①50%+②50%）しますが、出席点が6割に達していない場合は、再評価なしの不合格とします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。 第2回 科学を論じることのイメージをつかむための資料を見てもらいます。 第3回 A自然哲学の誕生 B自然哲学の誕生 第4回 A中世からルネサンスへ Bアリストテレス 第5回 A望遠鏡と顕微鏡 Bギリシアの先駆的成果 第6回 A光の速さ Bアルキメデス 第7回 A光の正体とニュートン Bギリシアからイスラムへ 第8回 A電磁波としての光 Bルネサンス 第9回 A光、時間、空間 B天体の動き 第10回 A光の二重性 Bコペルニクスの展開 第11回 A科学と芸術（色彩と空間） Bチコ・ブラーエとケプラー 第12回 A科学と芸術（抽象化への道） Bガリレオ 第13回 A予備 Bニュートンのりんご 第14回 Aまとめ B様々な統一とまとめ 第15回 試験 なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。			
使用教科書 教科書はとくに指定しません。授業時に資料を配付します。また、参考書については、授業時に提示します。			
自己学習の内容等アドバイス だんだん見えてくる(?)「科学的な扱い方」とはということかの理解をふまえて、自分の身のまわりにある素材について、科学的に考えてみることを繰り返してください。			

[授業科目名] 美術の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。			
授業の概要 主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介してゆく			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 フィクションとしての絵画 第3回 凶像とは何か 第4回 絵の中の空間 第5回 絵の中の空間 第6回 絵の中の言葉 第7回 模倣と見立て 第8回 怪物の造形 第9回 変身のイメージ 第10回 腐乱死体の美術 第11回 絵画における描かないことと見えないこと 第12回 異界へのまなざし 第13回 試験 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄木 千寿子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 西洋芸術音楽を聴く為にコンサート会場へと足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋芸術音楽はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在でもある。この授業では、こうした西洋芸術音楽の流れを歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（14%）、小テスト（26%）、最終筆記試験（60%）で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（西洋芸術音楽とは何か、講義内容の概要、参考書の紹介など） 第2回 中世音楽（グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派） 第3回 中世～ルネサンス（アルス・ノヴァ、フランドル楽派） 第4回 ルネサンス（16世紀、ジョスカン・デ・プレ他） 第5回 バロック①（マドリガーレ、オペラの誕生） 第6回 バロック②（協奏曲、バッハ、ヘンデル他） 第7回 ウィーン古典派①（前古典派、古典派の作曲技法） 第8回 ウィーン古典派②（ソナタ形式、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン） 第9回 ロマン派①（ロマン派の作曲技法、ショパン、シューマン他） 第10回 ロマン派②（ロマン派オペラ、ワーグナー、ブラームス他） 第11回 ロマン派③（民族主義の音楽） 第12回 世紀転換期から第1次世界大戦へ 第13回 20世紀①（ストラヴィンスキー、シェーンベルク他） 第14回 20世紀②（1945年以降） 第15回 最終筆記試験			
使用教科書 岡田暁生著『西洋音楽史』中公新書1816（中央公論新社）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習することが望ましい。授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。 ・「西洋音楽とは何か」「邦楽とは何か」を理解、探求する。 ・教養としての「音楽」を習得する。 			
授業の概要 「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。			
学生に対する評価の方法 「授業ごとの参加度」(30%)－毎回のコメントにて確認、「期末レポート」(70%)－講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「音楽」とは何か？－オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽 第2回 日本の音楽（1）－邦楽は西洋音楽だった（奈良時代、音楽の伝来、邦楽） 第3回 日本の音楽（2）－舶来品の西洋音楽（明治時代、西洋音楽と邦楽） 第4回 テキストと音楽（1）－歌い方には4通りもある（テキストと音楽との関係、西洋詩学） 第5回 テキストと音楽（2）－和風ラップに至る道（日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽） 第6回 宗教と音楽－感動『戦場のピアニスト』に隠された秘密（宗教、民族と音楽） 第7回 ポピュラー音楽－Mozartの時代にもポピュラー音楽はあった（大衆芸能と芸術の差異） 第8回 日本音楽の受容－エッフェル塔と三味線（パリ万博、異国趣味、印象派の音楽） 第9回 音律－ドレミは対数？（音響学基礎、音律、世界の音階） 第10回 『第9』とは－なぜ『第9』は年末恒例？（戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退） 第11回 著作権－自分の曲でも使用料払うの！？（音楽における国内、海外の著作権法の概説） 第12回 オペラ－愛の結末は・・・（古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇） 第13回 電子音楽－電子立国ニッポンはすごい！（発振の原理、発展史、日本の技術とアーティスト） 第14回 民族音楽－音楽は世界非共通（民族音楽とその関連、民族音楽からの享受） 第15回 現代の音楽－音楽、なう！（20世紀後半からの現代音楽、音楽と社会）			
使用教科書 指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目についても幅広く調べること。			

[授業科目名] 文芸の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 短編小説の魅力 小説とは何か。短編小説の方法とその魅力について知る。 小説の方程式を知れば誰でも1編の小説は書けることを知る。 ☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習Ⅰ（短編小説を書く）」を受講してください。			
授業の概要 文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・随筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いてもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられることを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法） 第2回 文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて） 第3回 志賀直哉の「山鳩」と小説の三要素について 第4回 小説の三要素と有史以来の作品について 例えば「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」など 第5回 小説の構造1 例えば志賀直哉「出来事」 第6回 小説の構造2 例えば芥川龍之介「蜜柑」 第7回 小説のジャンルについて1 例えば川端康成「合掌」 第8回 小説のジャンルについて2 例えば内田百閒「風の神」・「山東京伝」 第9回 小説のジャンルについて3 例えばヘミングウェイ「老人と海」 第10回 模倣ということ 例えばレイモンド・チャンドラーと村上春樹など 第11回 模倣からオリジナルへ1 例えば芥川龍之介『今昔』から「鼻」へ 第12回 模倣からオリジナルへ2 例えば芥川龍之介『今昔』から「運」へ 第13回 人称（視点）の問題について 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ なお、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかになっていく。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習・事前に配布する短編小説を分析しながら読んでくる。復習・本時にあつかった作品の鑑賞文を書く。			

[授業科目名] 演劇の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田尻 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ テーマ「浄瑠璃の成立と展開」 「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、演劇を通して日本の古典芸能や日本文化について学ぶことを目標とする。			
授業の概要 浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』（平曲）にまで遡る。本講義では、浄瑠璃の歴史的展開をたどりながら、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。			
学生に対する評価の方法 学期末試験の成績や作品鑑賞時のレポートによって評価する。 授業への出席状況も反映されますので、欠席や遅刻には十分注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・芸能の起源 第2回 時代の特色——中世—— 第3回 『平家物語』と「語り」の成立 第4回 平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行 第5回 浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立 第6回 時代の特色——近世—— 第7回 古浄瑠璃時代 第8回 近松門左衛門と世話物——『曾根崎心中』と『冥途の飛脚』—— 第9回 作品鑑賞① 第10回 合作時代における時代物 第11回 時代物三大名作② 第12回 作品鑑賞 第13回 時代物三大名作③ 第14回 定期試験 第15回 作品鑑賞			
使用教科書 必要に応じて資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 作品鑑賞に際しては、鑑賞のための資料をあらかじめ配付するので、事前に梗概や特色などについて予習しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ I 自然に興味を持たせ、自然に上達させること II 各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく III バドミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること			
授業の概要 スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要な不可欠なものである。本授業では、バドミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果 (60%)、受講態度 (40%) など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 実習 初歩的技能の習得 1. バドミントンの歴史 2. シャトルあそび 3. グリップ 2回 実習 初歩的技能の習得 ○運動特性、技術、用具などに関する知識の習得 1. ハイサービス 2. ストローク 3. 簡易ゲーム 3回 実習 初歩的技能の習得 ○各種グリップの理解 1. ショット ・ドライブ ・スマッシュ ・ヘヤピン ・ドロップ ・クリヤー ・ロブ 2. 簡易ゲーム (ハーフコートダブルスゲーム) の実践 4回 実習 初歩的技能の習得 ○ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得 1. いろいろなサービス ・ショートサービス ・ドライブサービス ・クリックサービス 2. 簡易ゲーム (オールコート3対3のゲーム) の実践 5回 実習 基本的技能の習得 1. 高度なストローク 2. フットワーク 3. 基本フラインの組み合わせ練習 6回 実習 基本的技能の習得 ○ダブルスゲームの進め方の理解 1. ダブルスゲーム ・ダブルスのルール ・フォーメーション ・審判法 ・ゲームの実践 7回 講義 VTR (全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部) を見る 1. トップアンドバック、サイドバイサイド 2. 入れ替わり (攻守) のタイミング 3. VTRを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する 8回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○サービス中のフォルトの理解 9回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○ラリー中のフォルトの理解 10回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○セッティングの理解 11回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅰ 12回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅱ 13回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅲ 14回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅳ 15回 個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する ☆課題とは毎時間実施する 20 分間の有酸素運動 (ウォーキング、ジョギング、ランニング) のこと } ○初歩的技術練習や基本的技能練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する } ○ゲームの内容を検討し、意見交換を行いながら内容の向上を図る			
使用教科書 (参考図書) 大体連研修部作成教材 バドミントン (平成 20 年度作成 DVD 教材シリーズ)			
自己学習の内容等アドバイス バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1～4年次前・後期	選択	メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ I テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。 II 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。 III テニスを通してスポーツマンシップを涵養する。			
授業の概要 最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段をテニスを実践的に学習する中で獲得する。 テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるので生涯スポーツに適している。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果(60%)、受講態度(40%)など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 1. ガイダンス 大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。 2. スポーツのスキル 第2回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ラケットワーク 2. グランドストローク 第3回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ボレー 2. サービス 第4回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. スマッシュ 第5回 講義 テニスの技術論 1. 技術構造及び基本技術について解説する。 2. 一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。 3. 打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。 第6回 実習 テニスの基礎 II 総合練習 第7回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの基本戦術 1. フォーメーション 2. 連続プレイの組み立て 3. コンビネーションの理解と実践 第8回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの応用戦術 1. フォーメーション 2. コンビネーション 3. コンビネーションの実践 第9回 実習 ルールとマナー 1. 試合の進行 2. 審判法 3. ルール 4. マナー 第10回 実習 テニスの基礎 II 基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用 第11回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦1 第12回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦2 第13回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦3 第14回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦1 第15回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦2 ◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたはサブアリーナで実施する。			
使用教科書 (参考図書) VTR 神和住 純 監修 「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」 ポニーキャニオン VTR BBC 制作 「テニス教室決定版」 ポニーキャニオン			
自己学習の内容等アドバイス テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 笹川 慶
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学科 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ フライングディスク フライングディスク(frisbee)を用いた競技は近年注目されており、性別・年齢に関わらず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しめるニュースポーツである。このようなフライングディスクの特性を理解しながら、身体を動かす喜びやゲームの楽しさや、異なる個性との関わりを通じて、互いに学び合い、助け合い、励ましあい、チームとしての強調性などを習得し、生涯を通してスポーツに親しむ習慣を養う。そこで、本講義ではチームスポーツを中心としたフライングディスク競技を可能な限り紹介、実践することを目的とする。			
授業の概要 心身の健康は万人共通の願いであり、健康の上こそ大なる個性の発展が期待できる。しかし、近年における機械文明の急速な発展に伴って心理的なストレスや運動不足が増すと共に、豊饒な食生活とも相俟って健康を損ねる機会が多発している。そこで本講義では、実際にスポーツ活動を行うことによって、心身の健康を維持増進させる方法のひとつである生涯スポーツへ自ら積極的に親しむ姿勢を養うことを目標とする。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する ・出席が3分の2に満たないものは単位習得なしとする。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 基本的技能Ⅰ（グリップ、スローイング、キャッチング） 第3回 基本的技能Ⅱ（バックハンドスロー、サイドアームスロー、ハンマー、など） 第4回 ドッチビー 第5回 他競技スポーツ 第6回 アルティメットについて（講義、班編制およびルール）スポーツ 第7回 ポートアルティメットⅠ 第8回 ポートアルティメットⅡ 第9回 基本練習とミニゲーム 第10回 他競技スポーツ 第11回 アルティメットの練習法（基本動作とフォーメーション、ルール） 第12回 リーグ戦Ⅰ 第13回 リーグ戦Ⅱ 第14回 リーグ戦Ⅲ 第15回 トーナメント（リーグ戦Ⅲの結果をもとに）			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 反復練習あるのみ。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 1) 卓球、バレーボール、バドミントン及び身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要 本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受する。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物 (50%)、授業態度 (35%)、学習成果及びレポート (15%) を総合的に判断して評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明 第 2 回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。) 第 3 回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践 第 4 回 卓球③ ゲーム内容の発展 第 5 回 スポーツの理論と実践法 バレーボール① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 6 回 バレーボール② 応用技能の習得とゲームの実践 第 7 回 バレーボール③ ゲーム内容の発展 第 8 回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバドミンントンの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 9 回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践 第 10 回 バドミントン③ ゲーム内容の発展 第 11 回 健康的な身体育成法の実践 第 12 回 表現的な身体育成法の実践 第 13 回 リズミカルな身体育成法の実践 第 14 回 歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。 第 15 回 総括 <注意事項> 第 1 回の授業は、NIAS ホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第 2 回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ (室内用) を着用すること。			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 卓球、バレーボール、バドミンントンのルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 高橋 篤史
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 口論義運動公園のプールを利用
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。 ・水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。 			
授業概要 <p>生命の源“水”。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといっても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。</p> <p>授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>出席状況（60%）、授業態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。</p> <p>実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。</p> <p>本授業では再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義 第2回 水中ウォーキング、正しい姿勢の習得、クロール（キック・プル） 第3回 水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック） 第4回 クロール、背泳、平泳（キック） 第5回 クロール、背泳、平泳 第6回 クロール、バタフライ 第7回 4泳法のテスト、アクアエクササイズ ※ 第1回は教室での授業とし、第2回よりプールへ移動する。 ※ 第2回からは口論義運動公園まで、往復徒歩で移動する。（片道徒歩約30分・雨天時） ※ 授業は二時間続きで行い、移動の時間もウォーキング運動ととらえる。 ※ 移動時のウォーキングには適した服装（ジャージ、夏場はハーフパンツ等）と運動靴を用意すること。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス <p>実習期間中は春から夏にかけているため気温の変化が大きいことが考えられる。日頃から体調管理を行い、実習に取り組むことを心がけてほしい。</p> <p>実習の回数は限られていることから、実習以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。</p>			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 全学部対象、現地実習（3泊4日）

授業の到達目標及びテーマ

冬季スポーツ種目として、スノーボードを実施する。
授業の目的は、冬の自然環境の中に身を置き、各種目と自然との対話を通して、人類のみが有する運動文化としての価値を認識する。また、自然環境と人間との関わり方（自然との交流）、スノーフィールドを仲間と一緒に楽しむ基本的な技術やマナーを体験を通して学ぶ。

授業の概要

授業は、学内授業および、現地授業（実習）より構成する。学内授業はスノーフィールドでの現地実習がより円滑に効率よく進められるようにするために行う。現地実習は、各自の技能段階に応じ、初心、初級の班別に細分して実施する。日程は、午前および午後にスキー場またはスノーフィールドにて実習を行い、夕食後は、講義、全体会等を通して一層の理解を深める。

学生に対する評価の方法

技術能力（30%）、受講態度（50%）、レポート等（20%）を参考に総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

- 1回 [学内授業]
1. 歴史、魅力と概念
2. 基礎技術のVTRを教材に運動メカニズム等基礎知識の説明
- 2回 [学内授業]
1. 現地授業における生活上の諸注意を行う
2. 安全指導
3. 基礎体力トレーニングプログラムの実施について
- 3回～15回 [現地授業]
スケジュール

1日目	2日目	3日目	4日目
8:15 大学発 8:30 上社発	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習 <バジジテスト> 閉講式
昼食 12:00 研修所着 12:30 集合・移動 13:00 開講式 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:00 集合・移動 14:00 研修所出発
16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「滑走理論」 (20:30迄)	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「安全なスノーボード を楽しむために」 (20:30迄)	
22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	

使用教科書

教科書は使用しないが、資料を作成し配布する
(参考図書) 日本スノーボード協会著作・編集 「J S B Aスノーボード教程」 山と溪谷社

自己学習の内容等アドバイス

とにかく基礎体力を実習前に養っておくこと。

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考えてみる。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。			
授業の概要 本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。			
学生に対する評価の方法 期末試験（50%）、課題の提出（10%）、受講態度（40%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 I-1. 身体は細胞のすみか、そして主は私 1) 自分を見る目をつくる 2回 2) 身体運動の意味 3回 3) 地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる 4回 2. 宇宙空間における生体変化 5回 3. 運動しているとき、身体の中で何がおこっているのか - ヒトは動くようにできている- 6回 II-1. 生涯発達と健康 1) 発達と健康科学 7回 2) 身体能力の年齢的变化(ライフステージ)に応じた健康スポーツ 8回 III-歩行の生涯健康 1. DNAの持つはるかな記憶 2. ヒトがサルと別れた日 9回 3. 歩行の定義 10回 4. 歩行の運動学的意義 1) 歩く(ウォーキング)速さと歩幅 2) 歩く速さとエネルギー消費量 11回 3) 歩行 -健康に良い有酸素性運動- 12回 4) 歩行と健康 5) 歩行と脳 13回 IV-運動とからだの健康 1. 運動不足と健康障害 2. 肥満の予防・解消 -基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング 14回 3. 健康的に痩せるとはどういうことか V-運動の功罪 15回 期末試験			
使用教科書 生涯発達の健康科学 藤井勝紀共著 (杏林書院)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康科学		講義	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	選択	ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 1) 健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。 2) 生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。			
授業の概要 本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（30%）、レポート（20%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、参考図書の紹介、授業日程の説明 第2回 スポーツ・運動の意義と健康との関わり 第3回 生活習慣病予防のための運動の理論と実践法 第4回 定期的な運動実践の効果及び運動例 体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性 第5回 歩数による日常生活の運動量の把握 生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検 第6回 健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した運動プログラムについて 生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。 第7回 運動施設の整備・拡充について 第8回 運動クラブの育成・援助について 第9回 運動プログラム・行事の設定・提供について 第10回 運動生活の類型、構造及び運動者行動 第11回 運動と体力及びトレーニングの原則について 第12回 運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法 第13回 健康のための生涯スポーツの理論と実践法 第14回 課題のまとめ 第15回 総括			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。 参考図書（購入は自由）：「健康とスポーツ概論 ― 運動と健康の理論 ―」 芝山正治他著 圭文社			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語について復習しておくこと。			

[授業科目名] 英語コミュニケーション I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・スコット・シキ ポージン・ポーター・モヤ ポッティンジャー・マクドナルド
[単位数] 1	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語ネイティブスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。			
授業の概要 自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況 30%、授業参加貢献度 30%、最終オーラルテスト 40% の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の 3 分の 1 以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 01 回 Introducing Self and Others. (自己や周りの人の紹介) 第 02 回 Talking about Daily Routine. (日常生活について語る) 第 03 回 Asking to do Something. (してもらいたいことをお願いする) 第 04 回 Talking about Likes / Dislikes. (好き・嫌いについて語る) 第 05 回 Talking about Experiences. (自分の経験談を語る) 第 06 回 Exchanging Personal Information. (個人のアピールを試みる) 第 07 回 Talking about Frequency of Activities. (クラブやサークルについて語る) 第 08 回 Talking about Past Schedule. (今までのスケジュールを紹介する) 第 09 回 Describing Locations of Places. (場所の具体的な位置を述べる) 第 10 回 Talking numbers: Time, schedule, and prices. (数表現についての練習：時間、計画、値段など) 第 11 回 Checking / Confirming Information. (情報の精査と確認) 第 12 回 Positive / Negative Tag Questions. (肯定形・否定形の付加疑問文の練習) 第 13 回 Talking about Future Plans. (先々の計画について語る) 第 14 回 Review Activities / Prep for final oral Test. (総復習・最終オーラルテストの準備) 第 15 回 Final oral Test in small groups. (小グループごとの最終オーラルテストを実施)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤・ファルク・スコット・シキ ボージン・ポーター・モヤ マクドナルド・ポッティンジャー
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語コミュニケーションⅠに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるようよう訓練する。			
授業の概要 徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションⅠと同様、小人数クラスで行う。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation. (質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。) 第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions. (意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。) 第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation. (意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。) 第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting. (指示を与える。助けを求める。感想を述べる。) 第05回 Inquiring and giving information about times and prices. (時間と値段について尋ねたり情報を与えたりする。) 第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment. (注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。) 第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends. (助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。) 第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation. (休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。) 第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities. (新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。) 第10回 Responding to happy/unhappy news. (幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。) 第11回 Asking people to do things formally and informally. (人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。) 第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement. (薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。) 第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad. (海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語) 第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks. (感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。) 第15回 Final Oral test in small groups. (小グループでの最終会話テスト)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] S.ポージン
[単位数] 1	[開講期] 2年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ※ヒューマンケア学部 08 生のみ 開講期：4年次前期／単位：2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ <u>This class has 3 goals</u> 1. Learn vocabulary 2. Practice speaking 3. Use English in a game or activity</p>			
<p>授業の概要 Most of the lessons will begin by a short free talk between the teacher and the course participants individually or a game between the teacher and the whole class. Below is a tentative study plan for 15 lessons comprising communication skills and areas. However, there will be some changes in the order and the contents according to the member' interests, learning needs, and spoken abilities.</p>			
<p>学生に対する評価の方法 Grading is based on the following 1. being active in class 50 2. group activities 30 3. speaking/interview test 20 Total 100</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introduction to this class. 第02回 Speaking about yourself. 第03回 Speaking about daily life 第04回 Describing people 第05回 Group Activity Preparation 第06回 Group Activity 第07回 Speaking about past activities 第08回 Speaking about plans 第09回 Giving instructions 第10回 Group Activity Preparation 第11回 Group Activity 第12回 Inviting, accepting and rejecting invitations 第13回 Review for test 第14回 Vocabulary/interview test 第15回 Last class. Speaking about your future</p>			
<p>使用教科書 No textbook is required for this class. The teacher will provide all materials for this class..</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス Students are recommended to review contents they have studied in the Eigo Communication I and II, and / or listen to English conversation programs available on radio, TV and the Internet before taking the Eigo Communication III course.</p>			

[授業科目名] 総合英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。			
授業の概要 語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。 第2回 演習 英文和訳① 英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 英文和訳② 第2回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 英文和訳③ 第3回で行った和訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 英文和訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 英文和訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。 第8回 演習 英文和訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第9回 演習 英文和訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第10回 演習 英文和訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第11回 演習 英文和訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第12回 演習 英文和訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの英文和訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題訳提出 担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語 I (前期) では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。			

[授業科目名] 総合英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 総合英語Ⅰで習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。			
授業の概要 本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身近な話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する 第2回 演習 和文英訳① 和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 和文英訳② 第2回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 和文英訳③ 第3回で行った英訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 和文英訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 和文英訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。 第8回 演習 和文英訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第9回 演習 和文英訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第10回 演習 和文英訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第11回 演習 和文英訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第12回 演習 和文英訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの和訳英訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題形式英作文提出 担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語Ⅱ(後期)では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現してみる。(初段階では翻訳ソフトを使ってもらわない。但し、翻訳ソフトの訳は間違いが多々あるので、のち修正する必要がある。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。英会話で雑談する教材も用意。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 専門科目からの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 専門科目からの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。			
上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部 ※08生のみ：4年次前期
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 ネットからの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 ネットからの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 英語検定2級に合格するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 異国語としての英語学習を通して、自国語と比較しながら、英語国の文化・歴史・習慣などを学びたい。英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点に置きながら、家族的雰囲気の中で、みんなと一緒に楽しく、英語に慣れるような授業をめざす。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50％）と14回目の授業で実施する試験結果（50％）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を利用して基礎力養成。 第2回 英検2級問題の出題形式を解説。 第3回 文法問題を中心に解く。 第4回 同上 第5回 比較的短い英文を解釈する。 第6回 同上 第7回 Eメールの英文を解説する。 第8回 同上 復習の単語小テスト 第9回 やや長い英文を速読して、大意を把握する訓練。 第10回 同上 第11回 リスニングテストの実施。 第12回 長文英語の内容理解の方法を説明する。 第13回 同上 第14回 定期試験 第15回 二次面接試験の解説と実施。 上記の授業計画は、学生の反応・関心と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変更したりすることもあります。			
使用教科書 「7日間完成英検2級予想問題ドリル（旺文社）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検2級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要は全くない。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という準備の有無が合格への大きな決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、「合格のための自分の指針を知る事」が授業のテーマになる。			
授業の概要 15回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検2級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験（英語面接）の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間がある。 時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料（映画、TVドラマ、インターネット）を提供する予定。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業はComputer LABにて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会にもなる。授業への要望などは、積極的に受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検2級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み（30%）、課題提出（30%）、および確認テスト（3回）での得点（40%）を考慮して評価する。なお、課題については、問題を解答し、電子メールにて答案内容を提出すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回目は、授業内容の説明および自分の長所短所を知るための模擬試験の場である。 第2回～第6回までは、英検2級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・（読解練習）」の問題演習と攻略を行う。第7回～第11回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第13回と第14回では、2次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。 第1回 授業および英検2級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。 第2回 語い問題 (part1) 第3回 語い問題 (part2) 第4回 語法問題 (part1) 第5回 語法問題 (part2) 第6回 語順整序 (part1) + 復習 第7回 第1回確認テスト 第8回 リスニング演習 (part1) 第9回 リスニング演習 (part2) 第10回 リスニング演習 (part3) 第11回 リスニング演習 (復習) 第12回 第2回確認テスト 第13回 2次試験対策 (英語面接) (part1) 第14回 2次試験対策 (英語面接) (part2) 第15回 第3回確認テストおよび総括第1回			
使用教科書 英検2級 頻出度別問題集 (CD付き) (高橋書店)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ TOEICテストで、目的に応じた高得点を獲得するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 出題形式を分かりやすく解説する。過去の問題を参考にして、問題形式に慣れるように、練習を繰り返す。英語学習を通して、英語国の文化・歴史・習慣なども、詳しく面白く説明していく。もちろん、英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点において、授業を進める。家族的雰囲気の中で、みんなで楽しく、英語に触れて、親しめる工夫をしたい。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を参考に、出題形式を解説。 第2回 写真描写問題を解説。 第3回 応答問題を解説。 第4回 会話問題を解説。 第5回 説明文問題を解説。 第6回 短文穴埋め問題を解説。 第7回 長文穴埋め問題を解説。 第8回 読解問題を解説。 第9回 復習単語小テスト。 第10回 弱点の補強。 第11回 同上 第12回 応用問題。 第13回 定期試験の傾向と対策 第14回 定期試験 第15回 全体的総復習&まとめ 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 「TOEICテスト対策実況中継（コスモピア）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC 試験の対策を目的としている。目標を履歴書に書ける点数である“500 点”達成と定めるが、内容は決して容易な問題ばかりではない。当然ながら教員は授業に投入するが、履修生の頑張りをも期待する。TOEIC という試験の「Listening」、および「Reading」の 2 セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。			
授業の概要 <u>TOEIC の問題形式はかなり固定されているが、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。</u> ただ、そのためには、普段の取り組みの中でポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく取り入れて進む予定であるが、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。また、授業への受講生からの要望などを取り入れていく予定である。積極的に要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを各々に備えた教室での授業となる。			
学生に対する評価の方法 出席 (20%)、授業態度 (20%)、課題 (20%) に加え、2 回の確認テストでの得点(40%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。 ①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類) (1) 写真問題(10 問) (2) 質問と返答の問題(30 問) (3) 会話文問題(30 問) (4) モノログ(一人語り)の問題(30 問) ②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類) (1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3) 短文読解問題(48 問) 使用するテキストは上記の 7 つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。 (〔 〕の中は発音と構文のテーマ)			
第 1 回 授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。 第 2 回 テキスト Lesson1 (旅行) [接尾辞による品詞の見極め] 第 3 回 テキスト Lesson2 (日常生活) [注意すべき主語と動詞の一致] 第 4 回 テキスト Lesson3 (健康) [動詞の後の動名詞・不定詞の選択] 第 5 回 テキスト Lesson4 (外食) [分詞の叙述用法と限定用法] 第 6 回 テキスト Lesson5 (出来事) [関係詞の制限用法と非制限用法] 第 7 回 第 1 回確認テスト 第 8 回 テキスト Lesson6 (遊び) [注意すべき受動態] 第 9 回 テキスト Lesson7 (メディア) [同形の単語の品詞の見極め] 第 10 回 テキスト Lesson8 (オフィス) [3 つの完了形の違い] 第 11 回 テキスト Lesson9 (人材) [比較を使った慣用表現] 第 12 回 テキスト Lesson10 (金融) [置詞・接続詞いずれにも使える語] 第 13 回 テキスト Lesson 11 (昇進) [従属節における主語の省略] 第 14 回 テキスト Lesson12 (購買) [代名詞の特殊な用法] 第 15 回 全体総括と今後の指針の指示。第 2 回確認テスト ※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。			
使用教科書 THE NEXT STAGE TO THE TOEIC TEST Pre-intermediate 金星堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M.ファルク
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ファッション造形学科
授業の到達目標及びテーマ 今日広く社会で評価されている英語力試験である TOEIC 450-500 点以上達成を目標とし、文法、リスニング、リーディングを中心とする試験対策と問題練習のための演習である。目的達成のための (Task-based) リスニング、英文法および語法に関する CR (Conscious Raising)、英文による情報の要点理解等具体的な実践を通し、試験対策を合理的かつ実効性のあるものにする。			
授業の概要 Most of the TOEIC study areas below are taught through quizzes, and simulation activities. At the beginning, the students will take an original and complete TOEIC test with no preparation. Later, they learn and practice the required TOEIC test taking /learning skills in pairs, groups and with the whole-class; and then take the original complete TOEIC test again. During the study, the students will work with the teacher individually to get confidence in understanding the TOEIC strategies according to their own abilities. . Below is a tentative study plan for 15 lessons. However, there will be some changes in the order and the contents according to the students' interests, and learning needs.			
学生に対する評価の方法 学期中のテストは実施しません。成績評価は、平常の課題作成 (50%)、授業内における授業に関する討論への参加度 (50%) で決まる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業目的と実践テスト1ー宿題。 第2回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合い。 第3回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合いおよび実践テスト2ー宿題。 第4回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第5回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第6回 聴解テスト パート3：簡単な英会話、実践テスト2についての話し合いおよび実践テスト3ー宿題。 第7回 聴解テスト パート3：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第8回 聴解テスト パート4：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第9回 聴解テスト パート4：簡単な英会話、実践テスト3についての話し合いおよび実践テスト4ー宿題。 第10回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第11回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第12回 読解テスト パート6：読解、モデルテスト4についての話し合いおよび実践テスト5ー宿題。 第13回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第14回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第15回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。			
使用教科書 教科書: Anne Tayer. <i>Target TOEIC</i> (2 nd Edition). Compass Publishing.2006. (about 3,000 yen) TOEIC 情報: http://myhome.shinbiro.com/~jinkag/toEIC.htm			
自己学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てほしい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 実践英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目標としている。将来、英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生に向けて、学術的な英語力をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)			
授業の概要 現在の TOEFL は、Listening、Reading、Writing、Speaking の 4 セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内の TOEFL では、Listening、Grammar、Reading の 3 セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短時間で結果が出やすい Listening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料 (映画、音楽、インターネットなど) を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。大学での外国留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み (30%)、課題提出 (30%)、および模擬テスト 2 回 (40%) での得点を考慮して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <ul style="list-style-type: none"> ・ TOEFL への準備段階として、第 2 回～第 7 回までは一文ずつに区切った形で TOEFL の英文に取り組み、さらに学術的な語いに触れていくための内容を行う。 ・ スコアアップへの実践力を高めるため、第 9 回からは TOEFL の実際の問題に似た形の英文を対象にしつつ授業内容を進めていく。 ・ 時間が許す限り、毎回の授業で Grammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。 第 1 回 講義に関する Introduction、および TOEFL についての説明。受講生の TOEFL へのニーズ調査。受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない) 第 2 回 問題演習: Listening (4～5 語のディクテーション / 5～6 語のディクテーション) + α ① 第 3 回 問題演習: Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(not の短縮形)) + α ② 第 4 回 問題演習: Listening (ディクテーション l と r / 発音とスペル) + α ③ 第 5 回 問題演習: Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④ 第 6 回 問題演習: Listening (慣用表現 / 7～8 語のディクテーション) + α ⑤ 第 7 回 問題演習: Listening (第 2 回から第 7 回までの復習) + α ⑥ 第 8 回 第 1 回模擬試験実施 (授業内) および既習事項確認 第 9 回 問題演習: Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar & Speaking 第 10 回 問題演習: Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar & Speaking 第 11 回 問題演習: Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar & Speaking 第 12 回 問題演習: Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar & Writing 第 13 回 問題演習: Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar & Writing 第 14 回 問題演習: Listening (第 9 回から第 13 回までの復習) + Grammar & Writing 第 15 回 第 2 回模擬試験実施 (授業内) および総括			
使用教科書 TOEFL テストリスニング問題 350 喜田慶文 著 (旺文社)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] フランス語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の5級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせ60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業について説明、第0課（アルファベと基本表現） 第2回 第0課の復習、第1課（国籍を言う） 第3回 第0課のテスト、第1課復習、第2課（名前・職業を言う） 第4回 第1課のテスト、第2課復習、フランス語の発音と綴りの読み方 第5回 第2課のテスト、第3課（もちものをたずねる） 第6回 第3課復習、第4課（趣味を語る） 第7回 第3課のテスト、第4課復習、第1～第4課復習の練習問題 第8回 第4課のテスト、第5課（誰か尋ねる） 第9回 第5課復習、第6課（したいことを尋ねる） 第10回 第5課テスト、第6課復習、第7課（住んでいるところを言う） 第11回 第6課テスト、第7課復習、第8課（何をしているか尋ねる） 第12回 第7課テスト、第8課復習、第5～第8課の練習問題 第13回 第8課テスト、第9課（家族を語る） 第14回 第9課復習、第10課（年齢を言う） 第15回 第9課テスト、第10課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 復習してテストに備えること			

[授業科目名] フランス語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ フランス語Ⅰに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。 また、フランスの文化についての理解も深める。 フランス語検定試験の4級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。はじめの数回はフランス語のⅠで学習した内容を復習し、その後は各課の「会話」を通じて、重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを合計して60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせて60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フランス語Ⅰで学んだ内容の復習（第0課～第3課） 第2回 同上（第4課～第6課） 第3回 同上（第7課～第9課） 第4回 第10課（年齢を言う） 第5回 第10課復習、第11課（時刻を言う） 第6回 第10課テスト、第11課復習、第9～第11課の練習問題 第7回 第11課テスト、第12課（紹介する） 第8回 第12課復習、第13課（日課を説明する） 第9回 第12課テスト、第13課復習、第14課（量を表す） 第10回 第13課テスト、第14課復習、第15課（天候を言う） 第11回 第14課テスト、第15課復習、第12～第15課の練習問題 第12回 第15課テスト、第16課（比較する） 第13回 第16課復習、第17課（過去のことを語る） 第14回 第16課テスト、第17課復習、第18課（未来のことを語る） 第15回 第17課テスト、第18課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 必ず復習し、テストのために準備して下さい。			

[授業科目名] 中国語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初歩的な会話を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかりと教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第1課 中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。 第3回 第2課 母音・子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。 第4回 第3課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文の学習。 第5回 第3課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第4課 「これは誰のですか?」。指示代名詞、疑問詞、副詞と疑問文の学習。 第7回 第4課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第5課 「あなたはどこに行きますか?」。動詞の学習。 第9回 第5課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第6課 中国語と中国事情 第11回 第7課 「これはどうですか?」。形容詞の学習。 第12回 第7課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プレントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 中国語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。			
授業の概要 この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」につづいてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わったごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第8課 「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。 第3回 第9課 「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。 第4回 第10課 「あなたは食事をしましたか?」。過去形、完了文を学習する。 第5回 第10課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第11課 「彼はいつ用事がありますか?」。時間の表現を学習する。 第7回 第11課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第12課 「あなたの家は遠いです遠くないか?」。介詞、反復疑問文を学習する。 第9回 第12課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第13課 中国語と中国事情 第11回 第14課 「あなたは何時から始まりますか」。助動詞を学習する。 第12回 第14課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ） 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンに「接続語」はいらない。 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 互
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説と作文 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンと作文 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 総合講座 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高齢化および少子化という日本社会の現状に関して偏らない理解を持ち、将来の生活を考えるための視点を持てるようにすることを授業の目標とする。			
授業の概要 少子化・高齢化が急速に進行する社会の状況を正確に認識することは大切である。そして、それとともに、老年期は「余生」ではなく、「人生の収穫の時期であり、生の味わいを真に見つめる時期である」と捉えることも同様に大切である。そのためには何が必要か。自らの生をどのように生き、他者の生をどのように支援することができるか。以上のような問題を多面的に検討する。			
学生に対する評価の方法 総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 科目の位置づけや問題のありかについて解説をする。 併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法についても説明する。 《医学の立場から》 第2回 高齢化社会の姿 長寿世界一となった日本は、諸外国の模倣ではなく自らの手で未来長寿社会を築く責務を担うに至った。その高齢化社会の本質とは何か解説する。 第3回 介護保険 平成12年に導入した介護保険について、その特徴、導入の経緯、導入後5年の現状や見直しについて解説する。 第4回 高齢社会の健康科学 遺伝的因子より環境的因子が人間の寿命に影響を与えると認識され始めている。長寿と生活習慣との関係について解説する。 第5回 ターミナルケア 高齢社会を迎え「ターミナルケア」の必要性が高まってきている。「ターミナルケア」の役割、その重要性について解説する。 第6回 高齢社会の生と死 成熟した高齢社会では死の問題は避けて通れない。高齢者の死生観、生き甲斐、生きる幸せ、終末期のあり方について高齢者の立場から考えてみる。			

《社会科学の立場から》

第7回 高齢社会と経済成長

高齢者の増加は日本経済にとって経済成長を鈍化させるのか、あるいは、労働生産性や労働力はどうなっていくのかなど、経済的視点から高齢社会を論じる。

第8回 高齢社会と財政負担

高齢社会による財政負担および社会保障給付の問題を扱う。未曾有の高齢社会において、大きな支出項目となる財政負担、あるいは年金、医療費、福祉など、さまざまな面から功罪両面を論じる。

第9回 高齢社会による期待成長産業

シルバー産業、生活支援産業、ビジネス支援産業など、高齢化によって成長が期待される産業と産業構造の変化などについて論じる。

第10回 マーケティング論の立場から高齢社会を考える。

マーケティングの発想—消費者行動論の立場から、今後の高齢社会のあり様を考える。

《総合的学習》

第11回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。プレゼンテーションも試みる。

《人文科学の立場から》

第12回 「ふるさと学」

私たちはどのように「ふるさと」を持つのだろうか。必要とするのだろうか。どのようにして充実した環境を得て、如何に質の高い生活を得るかという問題を、少子高齢社会の「ふるさと」の姿という観点から論じる。

第13回 「老」の価値

「老」の文化論をともに考えてみたい。私たちの祖先は、「生老病死」をどのように受け止めてきたのだろうか。今ここにいる私たちには、「生老病死」をどのように見つめることができるだろうか。

第14回 ライフ・サイクル

「ライフ・サイクル」論について基本的な解説をする。併せて、諸民族のライフ・スタイルと、彼らが加齢 (aging) をどのように受け止めているか、いくつかの具体例をも紹介し、その智慧に学ぼうとする。

《まとめ》

第15回 まとめ

レポートの書き方について説明し、全体的なまとめを行う。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 総合講座Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目は、「あなた（学生）にとって、環境問題とは何か」という問いかけを一貫した柱とするものである。地球環境の諸問題を理解し、率先して行動しようとする意識を持つことができるようになることを、授業の目標とする。</p>			
授業の概要 <p>環境に関わる危機的な兆候や状況が繰り返し問題にされているが、それらに関する情報は、未だ十分に公開されているとはいえない。このような中で、私たちはどのように行動することができるのか、必要なのかということ、さまざまな角度から解説する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 「環境問題」について、現代文明のあり方の問題として捉えることから始める。併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法を説明する。 《自然科学の立場から》以下3回は、外部講師が参加する。 第2回 自然科学の立場から見た地球環境 地球の歴史から人類の誕生、そして文明の起源を解説することから始める。文明の歴史は、環境への適応と、そして同時に環境への負荷の歴史でもある。 第3回 水とゴミ(1) 水などの資源に始まり、廃棄物の問題にいたるまで、第一線の研究者としてだけでなく、現場の陣頭指揮に当たった立場から、ありのままをわかりやすく紹介する。 第4回 水とゴミ(2) 環境の浄化やリサイクルの問題などを取りあげる。 《医学その他の立場から》 第5回 水俣病問題を考える 公害の原点とされている水俣病は50年前に水俣市の化学工場（当時新日本窒素、現在チッソ）から排出されたメチル水銀が魚類に蓄積し、それを多食した住民が罹患した。長く鹿児島で過ごし、この問題に深く関与してきた。その経緯を述べ、公害問題をともに考えてみたい。 第6回 屋久島の事例から考えること 富士山が世界遺産への登録を拒否されたことを知っているだろうか。その理由は散乱するゴミである。一方、屋久島は1993年に世界遺産に登録された。私たちの生活と環境との関わりをみつめるうえで、極めて貴重な事例となっている。長くその現場に取り組んできた立場から解説する。 第7回 放射能について 核兵器の脅威、放射能の害などについて解説する。原爆による被害の状況などを具に証言するゲスト・スピーカーが参加する予定である。			

《生物学の立場から》以下2回は外部講師が参加する。

第8回 環境問題と生物(1)

生態系はどのように連鎖しているか。そこで環境破壊が行なわれると、生命はどのような影響を受けるか。長く現場で取り組んできたこの分野の専門の講師を迎えて実施する。

第9回 環境問題と生物(2)

生物の棲息環境の保護について、具体的な取り組みの事例を紹介しながら、そのさまざまな問題点を考えていく。

《総合的学習》

第10回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。

《社会科学の立場から》

第11回 経済成長と環境

高度経済成長期から、安定成長期、グローバル化が進展した時期、バブル崩壊後といった、それぞれの局面の経済活動と、それに派生した環境問題を取り上げる。

第12回 環境ビジネス企業の最前線

環境を悪化させない社会経済システムの構築に向けた取り組みについて論じる。また、環境ビジネス企業最前線の取り組みも解説する。

《人文科学の立場から》

第13回 環境に関する教育・思想の潮流と具体的な取り組み

「環境」は今、どのように論じられているか。それらのいくつかを解説し、身近な取り組みについても紹介する。

第14回 リングの教え・海の教え

環境の問題に取り組んだ人々の事例と、そこから学ぶことのできる教訓について解説する。

第15回 環境人類学の黎明

世界の諸国・諸民族は、環境の問題にどのように直面してきたか、また取り組んできたか。それらの事例から、今後の人類のあるべき姿についても考えたい。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 教養総合演習 I (短編小説を書く)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 小説作法を実践的に学び、1 編の短編小説を書き上げる。			
授業の概要 近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の 1 つのプロセスを学び、1 編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は、受講態度、予習、復習、提出作品など、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する） 第 2 回 あるテーマとその描き方について学ぶ。 第 3 回 テーマの見つけ方・各自 10 のテーマを設定する。 第 4 回 初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10 のテーマのうち、5 つのストーリーを書く。 第 5 回 小説にプロットは欠かせない。5 つのうち、3 つの設計図（小説の姿）を書く。 第 6 回 3 つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。 第 7 回 場面と 3 つの作品の参考資料の収集。 第 8 回 3 つの設計図から 1 編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。 第 9 回 1 編の小説を書き始める。 第 10 回 1 編の小説を書き終わる。 第 11 回 第 1 回改訂作業（登場人物は機能しているか） 第 12 回 第 2 回改訂作業（導入部は読者の心を掴むか・障害物は適切か） 第 13 回 第 3 回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か） 第 14 回 各自朗読と批評 1 第 15 回 各自朗読と批評 2			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (『アジアの歴史』を読む)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 松田壽男博士の名著『アジアの歴史』を講読する。 本書は、アジアの地理、風土、歴史を、世界史的視野において分析・通観したもので、出色の概説書である。これを学ぶことによって、近隣アジアの基礎知識を身につけつつ、社会人としての力量向上をめざす。			
授業の概要 従来型の「世界史」に対する批判の書であり、また一方で平易な入門書でもある本書を、丹念に読み、これを報告発表することによって、地理的・歴史的知識、あるいは専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。			
学生に対する評価の方法 試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告・発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 報告分担 第3回 「世界史とアジア」「歴史と風土」 第4回 「アジア史の基礎」 第5回 「黄土の文化」「中国の北と南」 第6回 「インド文化のひろがり」 第7回 「海洋に生きる人たち」 第8回 「地中海という世界」 第9回 「イラン文化のかがやき」 第10回 「アジアの十字路」「西域の文化」 第11回 「漢民族の栄光」 第12回 「絹馬の交易」「ステップの道」 第13回 「トルコ＝イスラーム」 第14回 「世界史の転換」 第15回 総括			
使用教科書 松田壽男『アジアの歴史』（岩波現代文庫） 『世界史年表・地図』（吉川弘文館） 『なるほど知図帳 2011 世界』（昭文社）			
自己学習の内容等アドバイス テキストを読む際に、地名は歴史地図・現代地図で、歴史上の事柄は年表で確認しておくこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (マーケティング)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ※募集人数は 15 名前後
授業の到達目標及びテーマ マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。			
授業の概要 マーケティングは、企業の経営戦略の考え方を学ぶためにも、賢い消費者になるためにも必要である。幸い、本学では管理栄養学科—食品流通、食品マーケティング、映像メディア学科—メディアを介したマーケティング活動、デザイン学科—普及活動や広告デザインとしての広告論、ファッション学科—流行理論や販売促進のためのプロモーション戦略、ヒューマンケア学部—各種子どもの市場調査とマーケティングの模索などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度ならびにレポート等で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 サブゼミ (演習) の概要とマーケティングとは何かを説明する。 第 2 回 マーケティングの歴史と理論 (平易に解説) 第 3 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 1 章—製品戦略に関する解説・説明 第 4 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 2 章—価格戦略に関する解説・説明 第 5 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 3 章—プロモーション (広告等) に関する解説・説明 第 6 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 4 章—流通チャネルに関する説明・解説 第 7 回 マーケティングの最近の手法 (気付かないで多用している身近な話題) 第 8 回 マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。 第 9 回 消費者行動論 第 10 回 市場調査、マーケティング・リサーチ 第 11 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 12 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 13 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 14 回 総括 第 15 回 レポート等の提出と半期を振り返って。			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 基本となるマーケティングの理論を短期間でマスターすること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (健やかにダイエット)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照
授業の到達目標及びテーマ ・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。 ・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる “健やかにダイエット” 」 <受講の要件> ①体格指数(BMI)25 以上 ②体脂肪率 男子 25%以上、女子 30%以上 ③腹囲 男子 85cm、女子 80cm 以上 ①②③のいずれか一つ以上、該当する学生が対象			
授業の概要 本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。			
学生に対する評価の方法 受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。 なお、期末試験および再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 1 第 2 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 2 第 3 回 身体運動の展開 (栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する) ○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定 ○ ライフコーダ (生活習慣記録機) の使用説明 第 4 回 身体運動の展開 1 ○ ライフコーダによる 1 週間分のデータを分析する ○ コンバインドトレーニングの実施 (レジスタンストレーニング、エアロビクス) 第 5 回 身体運動の展開 2 第 6 回 身体運動の展開 3 第 7 回 身体運動の展開 4 第 8 回 身体運動の展開 5 第 9 回 身体運動の展開 6 第 10 回 身体運動の展開 7 第 11 回 身体運動の展開 8 第 12 回 身体運動の展開 9 第 13 回 身体運動の展開 10 ○ コンバインドトレーニングの実施 ○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定 第 14 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成) 第 15 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成)			
使用教科書 必要に応じて、資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス ・運動している自分自身を科学する。 「やってみるごと」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」 ・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. ファルク
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ この授業の目的は、1) 各学生の専門分野(管理栄養など)に関連する話題のプレゼンを行う 2) プレゼンに際して、学生間で英語で相互に意見交換する、などの基礎的技術を養う。個人個人の学習を把握するため、受講人数は10～15人くらいを予定している。 英語でプレゼンテーション・この授業を受けるにあたり、文法や語彙などの英語基礎学力は問わない。どのようにして面白いプレゼンができるかということを目指し、いかなる学生も受講できる。			
授業の概要 下記に挙げたほとんどの学習材料は、実生活、クイズ、疑似活動などを取り上げたもので、先ず初めは学生たちが事前準備なしで口頭によるプレゼンを行なう。後に計画を練ったり、準備したりして、更にプレゼンを進めて行く。学習期間中、学生は自信を持って計画を立案したり、自分のプレゼンを作成していくために、個々に教員と共に勉強して行く			
学生に対する評価の方法 成績評価の内訳は次の通り；レポート提出(50%)、オーラルテストとしてのパワーポイントを使った自身の専門に関するプレゼン発表(50%)。原則として、再評価は行わない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回～第5回 基礎英語コミュニケーションスキル(実践/復習) 第6回～第7回プレゼン一般を立案するための基礎技術 第8回～第9回一般的なプレゼンを構築するための基礎技術 第10回～第14回自己の専門分野に関連した内容のプレゼン実習 第15回最終オーラル試験として、自分の専門分野に関する内容のプレゼンを準備・実践する			
使用教科書 ・Jones, L. and Alexander, R. 2000. <i>New International Business English</i> . CPU. 学生は教科書購入の必要なし。上記の参考文献からのプリント類が準備される。ネット上からも教材を得る。			
準備学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てもらいたい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 直
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ 基本的な英文を文法・語彙選択などを間違わずに作成する。英訳だけでなく、英作方法を修得する。 註) 「基礎英語学力向上のための Web 授業」がネット上に公開されているので、学内での空き時間ならびに自宅など学外での余暇の時間に各自が自由に学習できる。(学外から当該サイトへのアクセスには、大学ネットワークにログインする各自の ID・パスワードが必要) URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/			
授業の概要 各自が英語を母国語とする国をひとつ選び、その文化、歴史、政治、法律、習慣、日常生活などをインターネットや文献で調べ上げ、自分の意見や感想、コメントを加えた報告レポートを英語で書く。1,500～2,000 語を目標とする。個人の学習内容や進捗度合いを見極めるために、10～15人を予定。使用教室は、E-31 (東館3階同時通訳演習室)を予定している。(空きがない場合は小教室)			
学生に対する評価の方法 レポート内容70%、授業貢献度20%、授業受講態度・姿勢10%で評価する。 原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 講義 授業計画・評価方法についての説明、およびレポートの書き方を教授 第02回～04回 演習 諸外国の情報を入手し、日本語でまとめ上げる。 第05回～08回 演習 日本語での情報内容を英語に訳し、自分のコメントも加える。 第09回～13回 演習 各自が訳した英文を担当教員がチェックし、修正しながら指導する。 第14回 演習 レポート提出 (個々にチェックを行い、修正箇所がある場合は次週に再提出) 第15回 演習 レポート最終提出 (完成版)			
使用教科書 原則として教科書は使わない。インターネットや雑誌などから情報を入手する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業受講前に各自が雑誌やインターネットで必要な情報を入手し、学習材料として準備する。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (オペレーションズ・リサーチ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人が生活していくと、その身の回りには多くの課題や問題が発生する。我々は、それら問題を解決するために多くの判断を下していかなければならない。一般にそれら判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実に効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ (OR) である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。			
授業の概要 本授業では、まず OR でよく出現する実社会における幾つかの問題に対する数理的な解決方法を、EXCEL を使った演習を通じて学ぶ。その後、各自が自分で問題を設定し同様に解決を試みる。最後にこれら演習をレポートとしてまとめる。 なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理1）、表計算演習（または情報処理2）を事前に修得しているか、もしくはこれらに対して同等以上のスキルを有することが望まれる。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題（EXCEL のワークシート）などから総合的に評価する。なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（書注意、講義内容、成績評価方法など） 第2回 簡単な生産計画問題を使い線形計画法の基本を学習する。 第3回 EXCEL のソルバー機能を使って実際に解く。 第4回 自分の身近な問題へ適用してみる。 第5回 シミュレーションによる問題解決方法を学習する。 第6回 EXCEL を用いて、金利返済やバスの乗車など身近な問題をシミュレーションで解いてみる。 第7回 実際の自分の問題へ適用してみる。 第8回 PERT/C PMを用いた工程管理を学習する。 第9回 EXCEL を用いて、工程管理を行う 第10回 卒業研究や卒業作品作成のスケジュール管理などに適用してみる 第11回 AHP による意志決定手法を学習する。 第12回 EXCEL を用いた演習を行う。 第13回 その結果を自分の就職活動の意志決定に適用してみる。 第14回 今までの学習結果を整理し、レポートとしてまとめる。 第15回 同上			
使用教科書 なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）			
準備学習の内容等アドバイス 時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちな場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (宗教心理学)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15 名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 宗教が、その周辺の諸文化と密接に結びつき、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて宗教心理学という新しい視点から考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。			
授業の概要 研究のための視点として宗教心理学を講じると共に、それに並行してさまざまな宗教文化についても解説し、心理学的な分析をする。 受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。 「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 宗教心理学とは何か 心理という人間一般の地平で宗教を眺めようとすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとすることを意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。 第 2 回 心の深層と象徴 宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100 万回生きたねこ』などを題材に解説する。 第 3 回 元型(1) ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。 第 4 回 元型(2) 「マンダラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーターパン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。 第 5 回 神話に学ぶ愛のかたち 神話やさまざまな物語の中には、さまざまな愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン (アーサー王伝説)・かぐや姫などを題材とする。 第 6 回 変容 一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常生活の中にも存在し得る。錬金術・茶道・キャンプファイアー・箱庭などを題材に解説する。 第 7 回 「身体」の宗教心理学 「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教という文化やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得るものであることについては、第 6 回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探究する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。			

第8回 「回心」の研究

「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第9回 宇宙飛行士の悟り

「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第10回 生と死の心理

前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第11回 芸術と宗教

芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第12回 教育と宗教

西洋でも東洋でも、教育という営みに宗教は深く関わる。それは何故か。教育史を概観しながら解説する。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 教養総合演習Ⅱ（人間性研究）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 「人と思想」をテーマとする。 学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触れることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、思想的遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要 「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面を切り口として、その人間性を研究する。 「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも1科目の単位の取得者が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「人間性」とは何か なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。 第2回 人間性研究の方法論 研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社会的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。 第3回 資料について 資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。 第4回 日記・手記・伝記・評伝 日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。 第5回 人物の背景 歴史的社会的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。 第6回 ライフ・サイクル ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個人的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。 第7回 契機 個人的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。			

第8回 評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第9回 歴史的影響(1)

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回 歴史的影響(2)

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回 「人間性研究」のまとめ(1)

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかななくても、それに近い考察の仕方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。

第12回 「人間性研究」のまとめ(2)

前回の解説を振り返りながら、各自のまとめの作業に入る。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 情報基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. コンピュータの基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンの基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア／ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 コンピュータの特徴（世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴） 第3回 ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置 （ハード／ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、CPU） 第4回 デジタルとアナログ（デジタル／アナログの定義、デジタルの利点、デジタル化の方式） 第5回 基数変換（2進数、16進数、基数変換） 第6回 数値表現①（固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差） 第7回 数値表現②（ゾーン10進数、パック10進数） 第8回 文字表現（1バイト系コード、2バイト系コード） 第9回 命令とプログラム （命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ） 第10回 補助記憶装置（ハードディスク、フロッピーディスク、CD） 第11回 補助記憶装置（DVD、光磁気ディスク、半導体ディスク） 第12回 入出力インタフェース（シリアルインタフェース、パラレルインタフェース） 第13回 入出力装置（入力装置、出力装置） 第14回 ソフトウェア（オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 情報倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。			
授業の概要 インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70点）、単元ごとの達成度小テスト（5回分合計30点）、出席回数等を考慮して、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など） 第2回 情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性） 第3回 個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権） ※第1回達成度小テスト 第4回 社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化） 第5回 身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響） ※第2回達成度小テスト 第6回 電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト） 第7回 Webページによる情報の受信・発信（Webページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション） 第8回 情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ） ※第3回達成度小テスト 第9回 コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウイルス、スパムメール・チェーンメール） 第10回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為） ※第4回達成度小テスト 第11回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為） 第12回 ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル） 第13回 まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面 ※第5回達成度小テスト 第14回 まとめ：健全な情報社会のあり方を考える 第15回 学期末試験			
使用教科書 『情報倫理』 情報倫理教育研究グループ著（実教出版）420円			
自己学習の内容等アドバイス 簡単な「達成度小テスト」のためにも、復讐あるいはテキストの準備は不可欠である。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。参考図書は必要に応じ紹介する。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典・内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理Ⅱ（表計算）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ <p>学校あるいは企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が保健あるいは心理アンケート等を行い、収集したデータを計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、性質の異なったデータに対して、適切な機能を選択し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15 点程度）、授業内で提出する課題（85 点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が 50 点満点であり、残りは、収集したデータを計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて 35 点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1 回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第 2 回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第 3 回 計算機能についての学習 第 4 回 グラフ機能についての学習 第 5 回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第 6 回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF 関数の基本 第 7 回 IF 関数の入れ子 第 8 回 IF 関数と論理積・論理和 第 9 回 日付処理の方法 第 10 回 検索行列関数の使い方 第 11 回 カレンダーを作る 第 12 回 保健あるいは心理アンケートの作成と実施 表集計ソフトを利用して、アンケート用紙を作成する。 第 13 回 アンケートから得たデータの打ち込みと分析その 1 第 14 回 データの分析その 2 と解釈 第 15 回 計算表と作図を含めたレポート作成（提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。参考図書は必要に応じ紹介する。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報処理Ⅱ（表計算）		演習	堀尾 正典
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次後期	選択	幼児保育対象
授業の到達目標及びテーマ <p>企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） <p>表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。</p> 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ <p>企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールと並び、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイデアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 古藤 真
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS) Excel2007 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やABC分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。			
授業の概要 表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(20%)、実技試験(60%)、情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト(20%)などで総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンスおよび基本操作 受講する上での諸注意や演習の概要、成績の評価方法など 第2回 Excel の基礎知識 データ入力 第3回 Excel 入門 簡単な表の作成 ファイル操作 プリンタの操作 演習室利用の際の諸注意 第4回 ワークシートの活用1 第5回 ワークシートの活用2 第6回 ワークシートの活用3 第7回 グラフ1 第8回 グラフ2 第9回 データベース1 第10回 データベース2 第11回 データベース3 第12回 Excel の応用1 第13回 Excel の応用2 第14回 実技試験1 第15回 実技試験2			
使用教科書 Windows Vista 対応 30時間でマスター Excel 2007 実況出版編集部編 (実教出版)			
自己学習の内容等アドバイス ソフトウェアの修得には、短期間で集中して演習することも必要です。時間があれば教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡します。随時実施すること。			

[授業科目名] ネットワーク論 ／情報処理Ⅲ（ネットワーク論）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. ネットワークに関する基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンをLANやインターネットに接続する時の基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 今日のこのようなネットワーク社会においては、コンピュータはLANやインターネットなどに接続されていることは必須となっており、ネットワークに関する幅広い知識や技術が要求されている。本講義では、LANとインターネットを中心としたこれらの基礎知識について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 ネットワークの概要 （LANとWAN、ネットワークを構築するハードウェア、クライアント／サーバ・システム） 第3回 OSI参照モデル（OSI参照モデルの概要） 第4回 TCP/IP①（TCP/IPの概要、TCP/IPとOSI参照モデル） 第5回 TCP/IP②（IPアドレス、サブネットマスク） 第6回 LAN①（LANの特徴、伝送媒体の種類） 第7回 LAN②（LANの種類、プロトコル） 第8回 WAN①（WANの構成とインターフェース、伝送制御） 第9回 WAN②（電気通信サービス） 第10回 インターネット①（インターネットの特徴、接続技術、ドメイン名） 第11回 インターネット②（インターネットのサービス） 第12回 インターネット③（インターネットの接続方法） 第13回 ネットワークセキュリティ（セキュリティの概念、不正アクセス行為と対策、ウイルス） 第14回 ネットワーク関連知識（ネットワーク管理ツール、OS、符号化と伝送技術、関連法規） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習 ／情報処理IV(プレゼンテーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を活かしながら課題探求することである。 特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 ビジネスの現場では、プレゼンテーション能力のある人、クリエイティブな能力のある人の活躍がめざましくなっている。 そこで本科目は、プレゼンテーションの基本的理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。 具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。			
学生に対する評価の方法 プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど） 第2回 プレゼンテーションの基礎（プレゼンテーションの概要とPowerPointの基本操作） 第3回 プレゼンテーションデータ作成の基礎1（テキストデータによるスライドの作成） 第4回 プレゼンテーションデータ作成の基礎2（スライドの編集・加工、印刷） 第5回 プレゼンテーションデータ作成の基礎3（図表やグラフの利用） 第6回 プレゼンテーションデータ作成の基礎4（スライドマスタの利用、特殊効果の設定） 第7回 復習問題 第8回 プレゼンテーションの実践1（オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成） 第9回 プレゼンテーションの実践2（情報の収集、スライドの作成） 第10回 プレゼンテーションの実践3（スライドの作成） 第11回 プレゼンテーションの実践4（シナリオの作成） 第12回 プレゼンテーションの実践5（発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術について） 第13回 プレゼンテーションの実践6（リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価） 第14回 発表1（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価） 第15回 発表2（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）			
使用教科書 実教出版編集部（編）『30時間でマスター プレゼンテーション+PowerPoint2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] データベース演習 ／情報処理VI (データベース)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。 特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト (Microsoft Access) を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。特に産業界では、データベース技術を持つ人材のニーズが高まっている。 そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。 具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成 (テーブル)、データの抽出や集計 (クエリ)、データ入力画面の作成 (フォーム)、各種報告書や宛名ラベルの印刷 (レポート) 等の各項目について学習していく。			
学生に対する評価の方法 期末試験 (50%)、提出を義務付けた課題 (30%)、授業における取組状況 (20%) により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど) 第2回 データベースの基礎1 (リレーショナルデータベースとは、データベースソフト Access の基本操作) 第3回 データベースの基礎2 (データの検索、並べ替え、印刷) 第4回 テーブルの作成1 (テーブルとは、データの形式、データの入力) 第5回 テーブルの作成2 (入力支援機能の活用、効率的なデータ入力) 第6回 フォームの作成 (フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集) 第7回 クエリの作成1 (クエリとは、選択条件の作成) 第8回 クエリの作成2 (集計処理、式ビルダの利用、関数の利用) 第9回 クエリの作成3 (アクションクエリの利用) 第10回 データベースの設計1 (新規テーブルの作成、フォームの設計) 第11回 データベースの設計2 (リレーションシップの設定、データの入力) 第12回 データベースの設計3 (リレーションシップされたクエリの作成と計算) 第13回 レポートの作成 (レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能) 第14回 全体の復習 第15回 期末試験			
使用教科書 実教出版編集部 (編) 『30時間でマスター Access2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] プログラミング演習 ／情報処理Ⅶ（プログラミング）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な思考法を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができるはずである。</p> <p>本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、将来の挑戦に対する足がかりには十分なるであろう。</p>			
授業の概要 <p>本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができるJavaScriptを用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Java スクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Java スクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能になるだろう。</p> <p>なお、本科目はで情報の教職課程の履修を目指す学生（映像メディア学科2年以上で教職を選択する者）を優先とし、希望者多数の場合は、抽選となる場合もありうるので注意いただきたい。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。</p> <p>第2回 HTML と CSS について（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習）</p> <p>第3回 主なタグ（HTML 言語を用いて簡単な Web ページの作成）</p> <p>第4回 JavaScript の概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子）</p> <p>第5回 入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力）</p> <p>第6回 分岐1（IF の基本的な使い方）</p> <p>第7回 分岐2（条件分岐の応用）</p> <p>第8回 繰り返し1（繰り返し処理の作り方）</p> <p>第9回 繰り返し2（多重ループ）</p> <p>第10回 関数（関数とは、作り方、呼び出し方）</p> <p>第11回 配列（配列とは、配列の利用方法）</p> <p>第12回 課題作成1（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する）</p> <p>第13回 課題作成2</p> <p>第14回 課題作成3</p> <p>第15回 評価</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難であろう。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。</p>			

[授業科目名] システム開発と運用論 ／情報処理Ⅷ（システム開発と運用）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 情報システムの開発、運用、管理に関する基本知識や各種技法を理解する。 2. 経験者の指導の下で、情報システムの開発、運用、管理等の実務ができる。			
授業の概要 情報システムの開発、運用、管理に関する知識や技法は、情報システムだけではなく、一般の業務の遂行においても必要であり、それらを踏まえた上で、情報システムの開発業務に関わる場合に必要な、基本知識と各種技法を学ぶ。本講義では、開発技法、ソフトウェアの再利用、開発の準備、要件定義、分析・設計技法、外部設計、内部設計、プログラム設計、プログラミング技法、テスト・レビュー技法、システム構成技術、システムの性能と信頼性の項目に分類し、各々の詳細についてその基本を学習する。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス（授業の目的、授業計画、評価方法等の受講ガイダンス） 第2回 システム開発の概要（システムの定義、システム化とは、システム開発の概要） 第3回 システム開発（システム開発技法、開発コストモデル） 第4回 ソフトウェアの再利用（サブルーチン、関数、プログラム属性、リバースエンジニアリング） 第5回 システム化開発の準備（準備の手順） 第6回 システム化要件定義（調査方法、分析方法、分析設計図法） 第7回 システム設計技法（プロセス中心設計、データ中心設計、オブジェクト指向設計） 第8回 外部設計 （要件定義の確認、サブシステム分割、画面設計、報告書設計、コード設計、論理データ設計） 第9回 内部設計（プログラム分割、物理データ設計、入出力詳細設計、レビュー） 第10回 プログラム設計（構造化設計、モジュール分割技法、モジュールの独立性、レビュー） 第11回 プログラミング （モジュール設計、構造化プログラミング、プログラミング手法、コーディング、成果物） 第12回 テストとレビュー （ボトムアップアプローチ、テスト手法、デバッグ手法、レビュー手法、テスト管理） 第13回 システム構成技術（システムの構成、処理形態） 第14回 システムの性能と信頼性（稼働率、処理能力、性能評価法、信頼性の指標） 第15回 試験			
使用教科書 なし。 但し、随時プリント等の参考資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 総合講座 クリエーション ナウ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] メディア造形学部 教員
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア造形学部を構成する映像メディア学科、デザイン学科、ファッション造形学科の全体像を把握することで、メディア造形の世界がいかに複雑かつ密接にあるかを学ぶ。その上で、表現することが、いかに様々な領域を横断し合って成立しているかを知るとともに、自ら積極的に他領域とブラグインしていく姿勢を養う。			
授業の概要 映像・デザイン・ファッションの各領域の分野を、メディア造形学部全学科の教員により紹介・解説しながらも、メディアとは何かを根底に置き、より拡張された表現世界を呈示する。また、3学科分野に限らず、人が創造する行為（クリエイション）と社会とを接続する内容で各講義を行っていく。			
学生に対する評価の方法 出席状況、学科単位で行うレポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 今、メディア造形のあり方とは～領域を越えて 第2回 映像メディア1（映像メディアについて・映像基盤としての写真） 第3回 映像メディア2（CGとアニメーション表現） 第4回 映像メディア3（TVというメディア） 第5回 映像メディア4（映画の世界） 第6回 映像メディア5（サウンドとインスタレーション） 第7回 デザイン1（総合） 第8回 デザイン2（プロダクト・デザイン） 第9回 デザイン3（ビジュアル・デザイン） 第10回 デザイン4（環境空間デザイン） 第11回 ファッション造形1（ファッション・トレンド予測） 第12回 ファッション造形2（ファッション・プレゼンテーション） 第13回 ファッション造形3（生活者の意識変化とファッション小売業態） 第14回 ファッション造形4（ファッション素材と染色） 第15回 拡張するメディア造形へ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 自分の専攻以外の学科について、特に注目すること。			

[授業科目名] 現代映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像が現在に至るまでの歴史と基礎、映像のためのさまざまな考察によって、視覚表現、映像表現を实践するための基本的考え方や制作のための幅広い情報収集の方法を習得する。			
授業の概要 映像表現の出発点として、映像装置の歴史（日光写真、ゾーマトロープ、フェナキストスコープ、立体視などから3Dシステムまで）、視覚と見ることの構造、光と色彩と映像の歴史、時空間の考察を経て、映像のより深い認識へと向かう。講義内容の理解度を量るために、実験やテーマについて的小論文提出、そして自己表現、コミュニケーション能力を養うためのコンセプト発表を取り入れる。			
学生に対する評価の方法 受講態度、(20%) 授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、講義への参加意識やコミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 講義のはじめに、パースペクティブ描画、点と線による抽象表現を実施する。			
第1回	見ることの構造	見ることのはじまりから透視図法への表現と歴史	
第2回	視覚構造(1)	視差、錯視、3Dなど視覚特性を利用した表現の考察	
第3回	視覚構造(2)	残像効果による動画の成立	
第4回	光と視覚(1)	光と色彩	
第5回	光と視覚(2)	光による映像表現	
第6回	映像における時間	時間の概念と映像における時空間	
第7回	映像の芸術表現(1)	映像芸術の成立と歴史	
第8回	映像の芸術表現(2)	不可視の可視化	
第9回	映像の抽象表現(1)	点・線・面による映像表現	
第10回	映像の抽象表現(2)	表現を読み解く	
第11回	映像と情報	情報の収集、分析、読み取りから表現へ	
第12回	イメージの視覚化(1)	視覚化のためのコンセプトと設計	
第13回	イメージの視覚化(2)	設計のプレゼンテーション	
第14回	作品と講評	映像作品を講評する	
第15回	映像論 まとめ	講評	
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義で得たことについて復習し、実践で確認できることは実践を試みる。			

[授業科目名] メディア論 (コミュニケーションとメディア)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本のメディアと限定することなく、グローバルデジタル化の変遷の渦中にあることで、その変化の詳細を検証する。現存のメディアがネット上の仮想空間に吸収され、そのメディアとしての性格も変化を余儀なくされる。そんなデジタル環境の変化の中から、不安なく人間が歓迎できる新しいメディアの盟主を探求・考察し、それぞれの学生の「メディア論」の構築を到達目標とする。			
授業の概要 放送、新聞、出版、広告、インターネット、アニメ、ゲームなど、19世紀から20世紀に発達したメディアの形成の歴史に触れながら、現在の社会的木鐸と称されるマス・メディアというものの功罪を学ぶ。さらに、ネットとの融合を不可避とするデジタル化するメディアの性格の変化に伴い、人間や社会との関係、メディアインフラ、法律、モラル、ジャーナリズム、そして将来のメディアリテラシーについても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解と好奇心、探究心の提示（30%）、出席数（40%）、試験レポート（30%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回. 過去のメディア、現在進行形のメディア、将来完了形のメディアの変遷 メディアとネットとの融合が生み出すものは 変化する「メディア」という性格 第2回. マス・メディアの役割と功罪 メディアリテラシーの基礎理論 第3回. 表現の自由（1）言論・表現の自由とは 第4回. 表現の自由（2）プライバシーの権利、匿名性という存在、知る権利 第5回. 表現の自由（3）著作権、芸術性とわいせつ表現 第6回. 新聞のメディア性（1）ジャーナリズム論の理論化 第7回. 新聞メディアの未来（2）新聞離れの実態 第8回. 出版メディアの現実と将来予測 第9回. 映画・アニメーションメディア（1）映像誕生から映画制作の現状 第10回. アニメーションメディア（1）アニメーションのグローバル席卷 第11回. 放送のメディア性（1）ネットとの融合 第12回. 放送メディア（2）ジャーナリズムはどのように生き残るか 第13回. インターネットの特性と既存メディアの関係 第14回. インターネットツールの拡大とメディアの住み分け 第15回. 試験レポート			
使用教科書 とくになし。			
自己学習の内容等アドバイス デジタル世代の視座をもとに、過去、現在、将来のメディアの性格、社会的使命の変化の源泉を探求する。日常的なメディアとの関係性に、恣意的違和感や不安を想定し、人間が歓迎する未来のメディアを検証する。			

[授業科目名] 認知心理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伊藤 君男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア学部にも所属する学生にとって、「人がどのようにものを認識しているのか」についての知識を得ることは、各々の専門を深く習得するために役立つと思われる。本講義では、認知心理学が提供する知識を習得し、人間の認知機能についての理解を深めることが目標である。			
授業の概要 認知とは、人が自分をとりまく環境をどのように認識し、そこからどのような知識を、どのような方法で手に入れているのか、そして、どのように、それらの知識を使用し、判断しているのかを説明しようとするものである。本講義では、知覚・記憶・問題解決・推論などを中心に解説していく。			
学生に対する評価の方法 最終的におこなう試験（50%）、授業時のレポート課題（30%）、平常の授業態度（20%）によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 本講義の概要 第2回 認知心理学が取り扱う領域 第3回 認知心理学の研究法 第4回 記憶のメカニズム 第5回 短期記憶と注意 第6回 長期記憶と検索 第7回 記憶の歪み 第8回 パターン認識 第9回 文脈効果と認識の歪み 第10回 問題解決 第11回 推論のメカニズム 第12回 推論の歪み 第13回 意思決定 第14回 認知と感情 第15回 試験			
使用教科書 使用しない。参考書などは、講義中に必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 認知心理学に習得した知識を、講義内だけでなく、他の講義や日常生活の理解などに適用してみるよう、心がけるとよい			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
美学		講義	瀬島 久美子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1～4年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 芸術学、美学、美学哲学の解体と再構成の歴史を考察することから、a 独自の美学確立へ向かうことを目標とする。			
授業の概要 絵画、映像、音楽、空間造形など、美学の基礎となる作品を考察することで東洋と西洋の美の差異、世界の美の変遷を辿り、また自分を取り巻く情報環境を認識し、現代の美の輪郭を把握する。			
学生に対する評価の方法 受講態度(20%)、授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、コミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 講義のはじめに、文章表現のトレーニングとして、絵画、映像作品の印象批評、分析などを発表または提出する。			
第2回	遠近法(1)	表現の歴史とさまざまな遠近法	
第3回	遠近法(2)	知の遠近法としての美学、哲学	
第4回	遠近法へのアプローチ	遠近法の探索	
第5回	記号と言語(1)	言語による表現について	
第1回	記号と言語(2)	映像における記号と言語	
第6回	知覚と認識(1)	線的認識と面的認識	
第9回	知覚と認識(2)	光の面的認識	
第7回	ヴァナキュラーな表現(1)	ヨーロッパの光、日本の光	
第8回	ヴァナキュラーな表現(2)	西洋の表現、東洋の表現	
第10回	GENIUS LOCI(1)	歴史と自然環境からのアプローチ	
第11回	GENIUS LOCI(2)	情報の読み取り	
第12回	時空間の表現(1)	空間の概念。建築とインスタレーション	
第13回	映像的アプローチ(1)	遠近法の探索と考察	
第14回	映像的アプローチ(2)	考察結果のプレゼンテーション	
第15回	まとめ、講評		
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義で学んだ事を基礎として表現に応用するために、復習の段階で実践を試みる。			

[授業科目名] 芸術英語コミュニケーション		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 白前 晋
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 文献（主に映像、ファッション、デザインに関わるもの）を講読し、理解力を高め日本語でのコミュニケーション能力の向上を計ることを狙いとする。専門分野における制作の方向性を明確にできる力を養うことを目標とする。			
授業の概要 主に英語文献を読み解き（授業の中で訳す）、ディスカッション形式で授業を進める。写真や映像、音楽なども資料として取り扱うことでより理解を深める。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、授業内で行なうレポートにより各授業項目の理解度(40%)、最終に実施する試験(40%)などで総合的に評価を行う。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションと英語力の確認テスト 第2回 文献購読にあたり 第3回 文献講読① 第4回 文献講読② 第5回 文献購読③ 第6回 文献購読④ 第7回 文献購読⑤ 第8回 英語文献講読⑥（映像鑑賞） 第9回 英語文献講読⑦（映像鑑賞） 第10回 文献購読⑧ 第11回 文献購読⑨ 第12回 文献購読⑩ 第13回 文献講読（試験に関して） 第14回 試験日① 第15回 試験日② 履修者の状況（履修者所属学科及び学年）によって、上記のスケジュール及び内容を変更することも想定している。映像鑑賞に関しては授業の進行状況などによって日程を変更することが想定される。文献に関してはファッション、デザイン、映像に特化せず幅広く取り扱う予定。 英訳ができるツール（電子辞書など）を持参すること。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 語学力を向上させるための授業ではないので、英語検定などの試験対策などは各自で行うことをすすめる。			

[授業科目名] 西洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松田 愛
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近現代のアートのおもろろな作品と実践について、美的・芸術的価値だけでなく社会的・歴史的意義について分析し、思考する力を身につけます。本授業が自身や他者の生、世界との関わり方について見つめるきっかけになればよいと思います。			
授業の概要 アートは現代という時代に生きる私たちのもののおもろろの見方や、社会の事象を映し出すと同時に、時代を超えて「生きること」そのものについての問いを投げかけます。近現代の作家たちの作品や、さまざまなおもろろのとりあげ、制作意図や活動背景を知るとともに、アートが現代の社会や歴史、世界や私たちの生とどのように関わっているのかを考えます。			
学生に対する評価の方法 授業での小レポート 40%、定期試験（レポート） 60%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 近代までの西洋美術史 第3回 西洋近代美術のはじまり（1）：マネの絵画 第4回 西洋近代美術のはじまり（2）：印象主義の實踐 第5回 近代から現代へ：後期印象主義とセザンヌの絵画 第6回 マティスの絵画 第7回 ピカソの芸術 第8回 キュビズムの實踐 第9回 ダダ、シュルレアリスム 第10回 抽象表現主義 第11回 ポップアート 第12回 日本のポップ 第13回 コンセプチュアル・アート 第14回 現代の芸術 第15回 定期試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 本や資料を通して学べることは限られているため、積極的に美術館や展覧会へと足を運び、作品と直接向き合う機会をもちましょう。			

[授業科目名] 日本美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木下 稔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 スライド使用
授業の到達目標及びテーマ 美術の歴史は、美の殿堂でもあり、人間の生活の記録でもある。美術作品は、美しさを通して、我々に感動と興奮を覚えさせる。美術作品が、我々に呼びかけ、語りかける意味とその意味の関連について考察し、異なる時代に於ける美術の特徴、制作意識、技術的意味と意義など自ら理解できるよう指導する。			
授業の概要 本講では、特に平安・鎌倉時代の「やまと絵」、室町時代における「水墨画」及び近世初期、桃山から江戸初期に至る障屏画、近・現代の絵画を中心に、それぞれの様式上の特徴と変遷、その意味と意義、そして今日的意義を概説、考察する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、各授業項目の理解度（30%）、最終に実施する試験（50%）などで総合的に評価を行う。尚、出席率は3分の2以上を必要とする。特別理由の無い限り再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義内容の説明、そして造形美術の意味と意義について 第2回 造形美術との出会い、造形美術は如何にあるべきか 第3回 先史時代の美術 ―その生活と文化― 第4回 奈良時代の美術、彫刻・工芸を中心に 第5回 平安時代の美術について、日本独自の美術様式の成立 第6回 「やまと絵」 ―源氏物語絵巻を中心に―、 <u>小テスト</u> 第7回 鎌倉時代の絵画 ―中国宋・元画と日本の絵画について― 第8回 室町水墨画と雪舟の世界 第9回 桃山時代の美術とその精神 第10回 桃山時代の美術 ―永徳・等伯・友松の世界― 第11回 光悦・宗達、そして琳派について ―その世界と時代思潮― 第12回 江戸時代初期における美術について、その流派と画家達 第13回 近・現代の美術、絵画を中心に（劉生・鬘光・大観・古径・遊亀ほか） 第14回 評価試験 第15回 日本美術の精神、そして今後における造形美術の使命			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じてその都度、文献資料の紹介と資料コピーを提供。 参考図書 山根有三監修『日本美術史』美術出版社 他			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を事前に知らせる。そして必ず質問事項を尋ね アドバイスする。			

[授業科目名] 東洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本はアジア文化圏の一隅を形成しており、古来この圏内のさまざまな文化を吸収することで独自の文化を形成してきた。この授業では日本に影響をおよぼしてきたアジア文化の歴史的展開について、特に美術的な観点から理解することを目標とする。			
授業の概要 広範な東洋美術の歴史について、中国・韓半島の絵画史、およびインドから中国・韓半島に及ぶ仏教彫刻史を概観する中で論じる。			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 北朝時代までの中国絵画（第1章①②） 第3回 中国の石窟寺院の仏教壁画（第1章③④） 第4回 隋・唐・五代の絵画（第1章⑤⑥⑦） 第5回 宋・南宋時代の中国絵画（第1章⑧⑨） 第6回 元代以降の中国絵画（第1章⑩⑪⑫） 第7回 韓半島の絵画（第1章⑬⑭⑮） 第8回 インドの仏教彫刻（第2章①②③） 第9回 中国の初期仏像（第2章④⑤⑥⑦⑧） 第10回 隋から宋代にかけての仏像（第2章⑧⑨⑩⑪⑫） 第11回 韓半島の仏像（第2章⑬⑭⑮） 第12回 試験 第13回 レポート講評 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 「すぐわかる東洋の美術」（東京書籍）			
自己学習の内容等アドバイス 授業初回に通達するサイトから必要資料をダウンロードし、常に次回分を予習すること。ほとんどの学生にとって東洋美術史は予備知識のない領域なので、予習なしに授業を理解することは難しい。また復習もこまめに行うこと。膨大な情報量をまとめて復習できるとは思っていない。			

[授業科目名] 先端芸術論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間の能力と先端技術を藝術によって融合させ、新しい文化と共生関係を創造し続けている現代の藝術は、従来の絵画、デザイン、工芸、彫刻という表現領域では推し量れないものになってきている。そこで来るべき時代意識に即した様々な藝術表現を探り、広く社会に目を向けた創造とはどのようなものがあるかを知り、視野を広げることを目標とする。特に現代美術の終焉以降のアート有り様を中心に、様々な場で発表されている変容するアート表現としてのドキュメントを見てながら解釈し、ポスト・アートとして提示する。			
授業の概要 テクノロジーの発展において現在の藝術は、今までの価値観・文脈の延長上では捉えきれない表現内容・方法を取っており、様々な展開を今現在見せている「アート」の具体的作品を多数とりあげ、新たな解釈をしていく。			
学生に対する評価の方法 試験期間中に授業内容に関する題目でレポートを作成し、その内容で評価する。 出席状況、受講態度をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第一回 「藝術表現とはなにか」～ コンテキストとアートワールドの逸脱 第二回 「モダンアート」～ 創作上の自由宣言・主義主張 / 個人の自律という幻想 第三回 「前衛って何？」～ お藝術でなければ何でもいい 社会の文脈を問うその質があった時代 第四回 「モダンアートの終焉の始まり」～ 複製の環境のなかで / 主体でなくなる 第五回 「大衆音楽」～ ROCK MUSIC 百花撩乱 / ポップと箱(制度)からの脱出 第六回 「身体」～ 他者としての私 / 汗・臭いが漂白世界と記号化する世界 第七回 「リアリティからリアルへ」～ 日常と世界の彼方 / 2001-9.11 以後 第八回 「日常のマイノリティ」～ 大袈裟でないリアルなもの / 透明な日常 第九回 「他者との交わり」～ 知らないものとの出会い / 不気味さと興味 第十回 「情報を経験する」～ データーベースの憂鬱を超えてテクノロジーと制御不可能な私 第十一回 「錯綜する複数のナラティブ」～ 物語の破綻からものかたる 第十二回 「メディアがコンテンツ」～ 透明化するメディアの前で 第十三回 「ニュー・メディア」～ 新たな画像 ～ 可能性としてのメディア 第十四回 「人の欲望」～ 試してみたいから、大きな問い 第十五回 「再び、アートとはなにか」～ アートは必要か *藝術ではない「アート」を考えていきます。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等は授業後でもよいので必ず確認すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナー I (会社設立)		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次後期 (集中)	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家(新しい事業を起こす人)と企業家(既存の組織を変革する人)の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会(ビジネスチャンス)を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、起業家及び変革に必要なプロセスについて概説したうえで、自らの事業計画作成を通じて、起業に際して求められる条件を考察します。			
授業の概要 企業経営を理解するには、企業経営を取り巻く環境を理解したうえで企業経営を評価する理論的な枠組みを駆使することが必要です。この授業では特にアントレプレナーのマインドを意識しつつ企業経営の歴史の変遷を確認するとともに、企業経営を理解する上で必要な切り口(経営戦略、マーケティング、ビジネスシミュレーション等々)を説明します。その上で、学んだ知識をビジネスプランに反映させる方法を体験してもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と発言(50%)、ビジネスプランについてのレポート(50%)により評価する。 受講者数によってはグループによる演習を行う。その場合は、グループワークの成果も評価に加えることがある。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回:日本のベンチャー創業の現状と課題/日本における開業率の低下の現状と、これに伴う課題について学ぶ 第2回:第1回の続き 第3回:日米のベンチャー創業の比較分析/ベンチャー先進国米国との比較を通じて、日本の置かれた現状と課題について学ぶ 第4回:経営に関わる理論/アントレプレナーに必要な経営理論を学ぶ 第5回:第4回の続き 第6回:事例を通じた経営理論の理解 第7回:第6回の続き 第8回:マーケティングに関わる理論 第9回:第8回の続き 第10回:事例を通じたマーケティング理論の理解 第11回:前回の続き 第12回:シミュレーションの枠組みと事例研究 第13回:ビジネスアイデアの発想法/ビジネスアイデアを見つけた際の着眼点について学ぶ 第14回:演習 第15回:演習と発表 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進度及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナーⅡ（会社運営）		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3・4年次前期（集中）	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家（新しい事業を起こす人）と企業家（既存の組織を変革する人）の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会（ビジネスチャンス）を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、アントレプレナーⅠの受講者を対象に、新たに開始した事業を順調に成長させるために必要となる専門的な知識を、事例研究と演習をもとに学びます。			
授業の概要 現実の企業経営では事業の発展段階に応じて経営課題も多様化し、それに応じた対応が求められます。この授業では、こうした経営課題の中から特に重要とされる経営戦略と市場開拓、マーケティング活動に焦点をあてて、基本的な知識について講義した後に実在する企業経営を評価します。その上で、各自が事業戦略の策定やマーケティング計画の作成におこなってもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と参加態度（50%）、戦略とマーケティング計画に関して作成したレポート（50%）により評価する。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：事例を通じた経営戦略の理解① 第2回：事例を通じた経営戦略の理解② 第3回：事例を通じた経営戦略の理解③ 第4回：事例を通じたマーケティング戦略の理解① 第5回：事例を通じたマーケティング戦略の理解② 第6回：事例を通じたマーケティング戦略の理解③ 第7回：発展段階に応じた経営理論の適応① 第8回：発展段階に応じた経営理論の適応② 第9回：ビジネス・プランの作り方① 第10回：ビジネス・プランの作り方 第11回：グループによるビジネスプラン（演習） 第12回：第11回の続き 第13回：ビジネスプランのプレゼンテーション① 第14回：ビジネスプランのプレゼンテーション② 第15回：個人別ビジネスプランの作成 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進捗及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名] 映画鑑賞・評価		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画を自分自身の眼で見、自分自身の考えで読み解く事を目的とし、映像の表現者を志す者、又は生涯にわたり映画から多くの糧を得ようとする者に、よく視ることがよく表現することの第一歩であることを理解してもらおう。と同時に、安易に量産される商品としての映画と、映像表現の精華であり時の重圧に耐えうる作品としての映画を見極める鑑賞眼を養う。			
授業の概要 映画とはどうゆうメディアか。それを理解するための構造分析、思考、映像表現等の講義と、実際の映画上映とその研究解説を主軸とする。上映する映画は年代、国籍を問わず広範囲に選択されるが、必ずしも名作と言われるものにかぎらず、映画としての充実度が重視される。また上映される作品は毎年変わる。限られた数本の映画ですべてを語る事は出来ないからである。			
学生に対する評価の方法 中間、期末の2回の試験で評価する。 試験は、映画を上映してその後、その場で論文を作成するもので、当日まで作品題名は伏せるので、学生独自の視点と思考が重要視される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 映画その構造、原理、社会性、人間に与える影響 人はなぜ映画を観たがるか？ 第2回 講義 映画的表現とはなにか、映画に映っているなにに注目すべきか？ 自作CMの表現を例に解説。 以後3回から14回は映画の上映と解説を行うが、すべて上映作品は当日発表する これは先入観なしで映画と向き合ってもらうためである。従って、ここには前年の授業内容を参考として紹介する。 (2010年度内容) 第3・4回 「フレンジー」(アメリカ) アルフレッド ヒッチコック サスペンス表現における、間と呼吸 巨匠最晩年の若々しい実験。 第5・6回 「天国と地獄」(日本) 黒澤 明 雄弁な画面構成とは、構図が語る登場人物の内面心理。 第7・8回 「緑の光線」(フランス) エリック ロメール 中間試験 映画と人生の補色構造 第9・10回 「教授と美女」(アメリカ) ハワード ホークス スクリューボールコメディと透明な演出 第11・12回 「ひまわり」(イタリア) ヴィットリオ デ シーカ 俳優の存在感で可まる映画 小道具の意味 第13・14回 「奇蹟」(デンマーク) カール テオ ドライヤー 期末試験 虚構のなかに生まれる人間感情の真実。 第15回 講義 映画のDNA 映画誕生に至る経緯とその独自性 「月世界旅行」 ジョルジュ メリエス			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の性質上特に予習は必要ないが、復習は重要である 授業中に参考として紹介された映画、資料は必ず鑑賞、参照しておくこと。			

[授業科目名] デザイン論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 内田 和邦
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 狭義のファッションデザインは服飾デザインのことであるが、現代社会においてファッションの範囲は生活全般に及ぶ。多様化するファッションの概念とその仕組みの理解をテーマに、他のデザイン領域とのかかわりの中から、時代性や市場性を踏まえた着想の視点を養うことを目標とする。			
授業の概要 ファッションデザインの構成要素を理解し、その基本となる造形理論を習得する。また、ステージ発表を前提とした広範囲なデザイン創造の実践を通して、提案のための表現力を身につける。			
学生に対する評価の方法 受講態度 50% プレゼンテーション、制作作品 50%			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ファッションデザインとは① (ファッションデザインの特徴) 第2回 ファッションデザインとは② (ファッションデザインの目的と現代社会における自己表現のあり方) 第3回 ファッションデザインの構成要素① (造形の三要素) 第4回 ファッションデザインの構成要素② (機能・価格に対する評価) 第5回 ファッションデザインの構成要素③ (ファッションにおけるデザイン戦略) 第6回 デザイン発想へのアプローチ① (コンセプトメイク) 第7回 デザイン発想へのアプローチ② (コンセプトのプレゼンテーション) 第8回 デザイン発想へのアプローチ③ (カラー・マテリアルの検討) 第9回 デザイン発想へのアプローチ④ (シルエット・ディテールの検討) 第10回 デザイン発想へのアプローチ⑤ (スタイリング・ステージプランの検討) 第11回 デザイン表現 (ファッションデザイン画) 第12回 デザインプレゼンテーション① (構成) 第13回 デザインプレゼンテーション② (資料収集) 第14回 デザインプレゼンテーション③ (ツール制作) 第15回 プレゼンテーションの評価			
使用教科書 文化服装学院編 「文化ファッション大系 服飾関連専門講座④ ファッションデザイン画」 文化出版局 「ファッションカラー」 日本色研事業 (株)			
自己学習の内容等アドバイス 「ファッションカラー」等によって、専門用語とファッショントレンドを事前に理解する。			

[授業科目名] デザイン演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 畠山 巧
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 対象の分析、情報の収集など、様々な課題演習をステップ的に繰り返す。その過程の中で‘デザインする’作業を構成する 2 つのエレメント、即ち‘イメージの展開’又は‘イメージの形象化’のうち、デザイン作業の最も根本的かつ重要エレメントとも言える‘イメージの展開’能力を修得することを到達目標とする。			
授業の概要 デザイン発想の方法を、課題をステップ的にこなすことにより、修得していく。 言葉から連想するイメージ、形や色、または具体的な物体からイメージするものを抽象的に表現し、さらに具体化することでデザインに取り込む発想力を繰り返しの演習の中から修得する。			
学生に対する評価の方法 レポート・制作作品 (60%)、作品のプレゼンテーション (30%)、授業への参画態度 (10%)、の総合で評価する			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 デザイン概論 第 2 回 " 第 3 回 デザイン作業に対する一般概念 第 4 回 形とイメージオブジェの認識 (形・カラー) 第 5 回 " 第 6 回 基本形の与えるイメージ (形の持つ基本的概念とその働き) 第 7 回 形とイメージ 第 8 回 基本形から受け取るイメージの展開 第 9 回 カラーとイメージオブジェの認識 (形・カラー) 基本カラーの概念・働き 第 10 回 カラーとイメージ 基本カラーの作り出すイメージ世界の形象化 第 11 回 抽象的概念の形象化 第 12 回 抽象的概念の認識・形象化—抽象的概念としての「都市」の認識・形象化 第 13 回 情報収集・分析—知識の集積—イメージ展開 第 14 回 " 第 15 回 プレゼンテーション			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 身の回りのものに興味を持ち、常に発想の材料と考えて、物事を見る意識を持つこと。			

[授業科目名] デザイン演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ひびの こづえ・豊口 武三
[単位数] 2	[開講期] 1年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な職種によるデザイン方法を、各担当者から学び、企業規模と職業形態の面から分析・分類して、あらゆる職種や現場を想定したデザインの発想方法を修得する。 また、発想の訓練を行い、デザイン力と技術力の修得を到達目標とする。			
授業の概要 授業では、自ら発想したデザインを作品として制作し、プレゼンテーションを行うことにより、発想力、デザイン力、立体への構成技術を学ぶ。 また、さらにデザインとシルエットを構成する構造の研究及び実習を通して技術を学び、環境変化と情報がファッション美学に与える影響を分析し、デザインへ転換する方法論を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(10%)、提出課題(40%)、レポート課題(50%)を総合的に判断して評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) (ひびの) 第1回 ・コスチュームデザイナーの仕事と作品解説 第2回 ・デザインの発想方法 ・課題説明 第3回 ・デザイン発想(デザイン画) 第4回 ・デザインのプレゼンテーション 第5～7回 ・作品制作 第8回 ・作品のプレゼンテーション 第9回 ・まとめ(レポート) 第10回 〃 (豊口) 第1回 ・日本のクチュール(初期アパレルから現在までの変遷) ・専門店オリジナル企画 第2回 ・デザイナーズブランド(ライセンスと企業化) ライセンサーとライセンシー 企業化によるブランド作り ・手の触感や、視覚を通し記憶する感性の説明 第3回 ・テーマを基に服のデザインを考える習慣の必要性 ・○×△□形デザイン(参考デザインを見て考える) ・照明、音楽、場所、etcのデザインとの関わり (ステラ・マッカートニー新世代のミュージックビデオ使用) 第4回 ・形を作るために構造上必要な線を考える ・デザイン画論 (見せる絵、イメージを伝える絵、デザインを強調する絵、説明用の絵) ・人間の身体と動きを記憶し動き易く、着やすい服作り(首と衿の関係) ・色のバランス、色の選別 第5回 ・まとめ			
使用教科書 (豊口) 豊口武三著 「ファッションデザイナー入門」 織研新聞社			
自己学習の内容等アドバイス 1年生前期で学んだ技術・発想力を活かす授業のため、特に技術面の授業の復習をしておくこと。			

[授業科目名] デッサン		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 輝
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ ・基本形態が描ける ・明暗を理解できる ・質感の工夫ができる ・発想できる ・集中力が身につく ・クロッキー力が身につく ※重要テーマは、ものを立体的に見て、平面と立体の関係を理解すること。			
授業の概要 ファッションをはじめ、形を造る分野において、表現したい形を意のままに伝達する手段を身につけることは重要なことである。ここでは、そのための基礎となるデッサンを幅広く学ぶ。平面である布生地を立体である服に作り替えることは、デッサンで平面と立体の関係を学ぶこととつながる。技術的な描き方だけでなく、真に「ものを見る眼」を養い、美しさと表現の喜びを追求する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度 20%、課題提出とその内容評価・・・A. 描く力(理解力、展開力、独創性、描写力) 50% B. 努力(集中力、完成度) 30%			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 ガイダンス、画材説明 記憶によるデッサン (動、植物、日用品、キャラクター、その他を描く) 2回 静物① 球、円柱、立方体 (石膏、幾何) 「形、空間、構図」 3回 静物② 立方体、パース(木製立方体) 「光、調子、質感」 4回 風景のスケッチ (学内の樹木、建物) 五感を使って自然をとらえる 「空間、色、光、温度」 5回 人物クロッキーⅠ (学生モデル) 「プロポーション、ムーブメント」 10分～20分ポーズ 6回 人物クロッキーⅡ (学生モデル) 「対比・表現」 1分～20分ポーズ、背景に布、色紙。 7回 手のデッサン 「ムーブメント・バランス・密度」 8回 顔のドローイング (学生モデル) 「素材、表現、デフォルメ」 9回 服または靴のデッサン 「構成・描写」 自分が身につけているものを描く。 10回 イメージドローイング① キャラクターを考え、物語を描く。 「発想・視点」 11回 イメージドローイング② 「展開・完成」 12回 作品制作① ー立体空間、平面空間の面白さー 13回 〃 14回 作品制作② 15回 〃			
使用教科書 なし(授業内で配布するプリントを参考にする)			
自己学習の内容等アドバイス 事前学習よりも事後学習において繰り返し描くことが重要。デッサンは繰り返し描くことで上達するので、自宅で描いたものを授業に持参すればアドバイスも可能。			

[授業科目名] ファッションデザイン画		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 和邦
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッションデザイン画とは、ハンガーイラスト（アイテム図）やスタイル画（着装画）からファッションイラストレーションまで幅広い分野の総称である。それぞれの領域を理解し目的に合った表現技術を修得することをテーマとし、イメージしたスタイルを素早く具体化するための能力を養うことを目標とする。			
授業の概要 デザインイメージを的確に伝えるための描法と使用する画材特性の研究を経て作品制作を行い、創作に重点をおいて個性と感性の開発トレーニングを重ねていく。			
学生に対する評価の方法 受講態度（制作への意欲） 50% 作品提出とその内容評価 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修内容・計画及び使用画材等の解説 第2回 ファッションデザイン画とは 第3回 スタイル画のプロポーション①（基本ポーズの作成） 第4回 スタイル画のプロポーション②（応用ポーズの作成） 第5回 スタイル画のプロポーション③（オリジナルプロポーションの作成） 第6回 着装デザイン画とハンガーイラスト①（アイテム構造の理解） 第7回 着装デザイン画とハンガーイラスト②（アイテム図の描法・作成） 第8回 着装デザイン画とハンガーイラスト③（基本アイテム・テーマデザインの着装） 第9回 着彩①（透明水彩・パステル・色鉛筆） 第10回 着彩②（ポスターカラー・マーカー・その他） 第11回 素材別表現法①（織・編み・プリントの描法） 第12回 素材別表現法②（レザー・ファーの描法） 第13回 デザイン画における省略表現 第14回 創作デザイン①（発想のトレーニング） 第15回 創作デザイン②（作品提出）			
使用教科書 文化服装学院編 「文化ファッション大系 服飾関連専門講座④ ファッションデザイン画」 文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 授業では使用しない画材の研究も積極的に行い、表現の幅を広げることを心がける。			

[授業科目名] デザイン史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中西 富美子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現在のデザインは常に過去をモデルにする。芸術性とは何かを知らせる。			
授業の概要 自作のテキストを用い更に映像と実物着用とで記憶に残る講義と、時に時代を表す創作性を演習提出させる。			
学生に対する評価の方法 終了後のテストと幾つか提出させる作品を評価の対象にし、特に授業参画状況を重視			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 古代エジプト。見事な文明の起こりと装飾性 第2回 古代ギリシャ 今に残る遺産の数が非常に多い その国の衣装 第3回 古代ローマ トーガを着る戦に強く他国の富を我が物にして権力を拡大 第4回 ビザンチン宗教時代のキリスト画像表現と十字形の衣装を知る。 第5回 ルネッサンス 新しい芸術への狂奔。世界を知る海上の冒険など 第6回 バロック芸術。ルイ 14 世とベルサイユ。ポンパドールと 第7回 フランス革命の流血は貴族から庶民の勝利を勝ち取る。 第8回 世紀末のジャポニズム、ガレ、ラリック。モリスの装飾性とミュシャ。 第9回 第1 次世界大戦とハリウッドの繁栄。整形手術で作られるスターをまねる 第10回 1920 年代アールデコ様式。原色の氾濫と黒の進出、直線と円形の芸術。 ビーズとスパンコールのきらめきを見る。 第11回 ココシャネルの庶民的な衣装、永遠の個性の勝利。香水とネックレスと。 第12回 クリスチャンディオール 50 歳で終戦後デビュー。成熟した女を求める 第13回 ピエールカルダン、新鮮なデビュー。斬新で奇抜な衣服 第14回 イブサンローラン 優しい感覚と繊細な色彩。 第15回 まとめとテスト。アイロン使いを教える。			
使用教科書 中西作 『服飾文化史』 デザイン史 古代から現在までの生活とデザイン 大学内購買で求める			
自己学習の内容等アドバイス 図書館で調べる事を教える。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形論		講義	白石 孝子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ アパレルの設計には、デザイン、身体、素材、縫製など多くの因子が関わっている。このうち本講義では、アパレルの構成に関わる身体因子を主なテーマとし、その基本的な知識の修得を目的としている。具体的には、アパレルの機能と形態、アパレルのための体型情報および設計方法との関わりについて理解することを第一の到達目標とする。 次に、アパレル生産の基本的知識の修得をテーマとし、その生産工程、デザインとおよび縫製とコストの関わり、JISサイズの基本について学び、さらにファッションディテールの知識を習得することを第二の到達目標とする。			
授業の概要 人間にとってアパレルとは何であるか、自然環境や文化とどのような関わりを持っているかを理解したうえで、アパレルの造形に必要な人体について学び、それがアパレルの大量生産にどのように生かされるのかを理解する力を養う。さらに、アパレルの生産システム、および生産システムとコストについて学び、アパレル生産には多くの情報や技術が複合的に関わりをもっていることを理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・平常の授業態度(20%)、レポートによる授業内容の理解度(30%)、最終に実施する試験(50%)などで総合的に評価を行う。 ・試験方法：ノート、資料等の持ち込みは不可 ・追再試：試験結果が不合格の場合は再試験を行う。また、止むを得ない事情で受験しなかった場合は追試験を行うので、直ちに申し出ること 			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ファッション造形論を学ぶにあたって (講義内容の概説・参考図書を紹介・授業の準備の仕方・授業日程の説明)、衣服の機能 第2回 衣服の形式と形態 (立体構成と平面構成) 第3回 衣服設計のための体型情報 ①人体の構造(骨格・関節) 第4回 ②人体の構造(筋肉・皮膚・脂肪) 第5回 ③人体計測 第6回 ④体型情報 第7回 ⑤体型情報と衣服設計・JIS 衣料サイズ規格 第8回 衣服設計 ①原型 第9回 ②原型とゆとり 第10回 ③パターンメイキング 第11回 衣服の生産 ①生産システム 第12回 ②アパレルとコスト 第13回 ファッションディテール 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ			
使用教科書 「服装造形学 理論編Ⅰ」 三吉満智子監修 (文化出版局) [参考図書]「被服のための人間因子」 間壁治子著 日本出版サービス			
自己学習の内容等アドバイス 教科書による予習はもちろんであるが、例えば、人体を観察し、年齢差・性差・個人差等による体型差への理解を深めるよう日常的に心がけること。また、衣服は、表面的に見るだけでなく裏面の縫製・仕立て・プレス・素材による処理の差等についても見る目を養うべくいろいろな衣服に関心を持ってふれてみることをすすめる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形演習 I		演習	高間 由美子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
3	1 年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ			
作品製作を通して、デザイン（シルエット、ディテール）、素材、計測、パターン作成、裁断、仮縫い、補正、ソーイング技術など、被服構成のための基礎的な知識や技術を身に付けることを到達目標とする。			
授業の概要			
レディースのアイテムである「タイトスカート」と「ブラウス」の製作をする。また、衣服の機能性を追求し、着心地のよさを高めようとするは快適な衣生活への取り組みであることも理解させる。完成後には着装プレゼンテーションを行う。			
学生に対する評価の方法			
作品製作 50%、試験 20%、授業態度 30%などを総合的に判断し評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
「タイトスカート」の製作		「ブラウス」の製作	
第 1 回	演習のための用具の扱い方と注意点	第 23 回	ブラウスとは
第 2 回	人体計測	第 24 回	デザインと素材について
第 3 回	スカートとは	第 25 回	縮図のパターン作成
第 4 回	デザインと素材について	第 26 回	実物大パターン作成
第 5 回	縮図のパターン作成	第 27 回	パターンチェック
第 6 回	実物大パターン作成	第 28 回	パターンカット、マーキングと裁断
第 7 回	パターンチェック	第 29 回	仮縫い合わせ
第 8 回	パターンカット、マーキングと裁断	第 30 回	〃
第 9 回	仮縫い合わせ	第 31 回	試着と補正
第 10 回	試着と補正	第 32 回	〃
第 11 回	〃	第 33 回	本縫い準備
第 12 回	本縫い準備	第 34 回	身頃作り
第 13 回	ダーツ縫い	第 35 回	〃
第 14 回	脇縫い	第 36 回	〃
第 15 回	ファスナー付け	第 37 回	衿作り
第 16 回	〃	第 38 回	袖作り
第 17 回	ベルト作り	第 38 回	〃
第 18 回	ベルト付け	第 40 回	衿付け
第 19 回	裾始末	第 41 回	〃
第 20 回	仕上げ	第 42 回	袖付け
第 21 回	カギホック付け	第 43 回	仕上げ（ボタン付けとボタンホール）
第 22 回	プレゼンテーション及び作品提出	第 44 回	試験
		第 45 回	プレゼンテーション及び作品提出
使用教科書			
中屋典子/三吉満智子監修 「服装造形学 技術編 I」 文化出版局 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス			
授業の進捗状況に合わせた製作が望ましいため遅れは事前に解消しておく。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形演習 I		演習	水嶋 丸美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
3	1 年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 被服構成に関する基本的な知識の修得と、製図・型紙作成・仮縫い・試着補正・パターン修正・縫製等の技術修得を到達目標とする。			
授業の概要 被服構成に関する基本的な知識と技術を、スカートおよびブラウスの製作を通して修得する。 スカートでは、基本的なデザインやパターン知識、平面から立体を構成する知識・技術の理解、被服構成の基礎すなわち製図・型紙作成・仮縫い・試着補正・パターン修正・縫製技術等を修得する。 ブラウスでは、身頃原型におけるダーツ展開の理解と、襟や袖などの立体を構成するためのパターン展開・縫製技術等を修得する。			
学生に対する評価の方法 ①課題アイテムの製作過程・提出作品・その他提出物（製図・ノート等） [70%] ②被服構成の基本知識、製図、アイテムの基本知識に関する試験 [20%] ③授業への取り組み姿勢 [10%] 以上、①～③を総合的に判断し評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	①被服構成のための用具解説（用具の名称、取り扱い方法） ②③スカートに関する基本知識、スカート原型製図講義【小テスト】		※1回 = 3コマ 週2回開講
第2回	①②スカートのパターン展開講義 ③人体計測方法、人体計測実習【小テスト】		①…1コマ目 ②…2コマ目 ③…3コマ目
第3回	①スカート実物大製図（スカート原型製図、パターン展開）【小テスト】 ②③ミシン・ロックミシンの取り扱い方、基礎縫い		
第4回	①②スカート型紙作成、裁断、印つけ ③スカート実物仮縫い		
第5回	①②スカート仮縫い試着補正 ③パターン修正、補正後の布地修正・整理		
第6回	①スカート製作（裁ちはしの始末、ダーツ縫い、脇縫い） ②③ 〃 製作（ファスナー付け）		
第7回	① 〃 製作（ベルト付け） ②スカート製作（カギホック付け、裾の始末） ③スカート仕上げ、着装プレゼンテーション、作品・仕様書提出		
第8回	①②ブラウス・シャツに関する基本知識、身頃原型製図講義 ③身頃原型実物大製図		
第9回	①②ブラウスのパターン展開講義（身頃） ③ 〃 のパターン展開講義（襟、袖）		
第10回	①② 〃 のパターン展開講義（襟、袖） ③ブラウス実物大製図（身頃）		
第11回	① 〃 実物大製図（襟、袖） ②ブラウス型紙作成 ③ 〃 裁断、印つけ		
第12回	①② 〃 実物仮縫い・仮縫い試着補正 ③ 〃 パターン修正、補正後の布地修正・整理		
第13回	①ブラウス製作（接着芯貼り、ダーツ縫い、肩縫い） ② 〃 製作（襟作り、襟付け） ③ 〃 製作（脇縫い、袖作り）		
第14回	① 〃 製作（袖付け、袖ぐりの始末） ② 〃 製作（裾の始末） ③ 〃 製作（ボタンホール、ボタン付け）		
第15回	①前期試験 ②ブラウス仕上げ、着装プレゼンテーション、作品・仕様書提出 ③前期試験解説、前期まとめ		
使用教科書 中屋典子／三吉満智子監修 「服装造形学 技術編 I」 文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 被服構成の知識・技術の修得に努め、課題アイテムの製作に真摯に取り組むこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形演習Ⅱ		演習	高間 由美子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
3	1年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 前期で被服構成に関する基礎的な知識と技術を学んだことで服作りの概要が理解できたと思われる。後期はさらに体型とデザイン、デザインと素材の関わり、芯の扱い方、素材に応じた縫い方等を理解しながら、完成度の高い作品製作を目指すことに到達目標をおく。			
授業の概要 前期で学んだ被服構成の知識や技術を基礎として、後期は、「ワンピース」と「パンツ」の製作に取り組みながら更なるパターン知識や縫製技術の向上を図ることを目的とする。被服構成は手順や製作内容によって作品の出来映えが大きく左右される。どのように取り組めば短時間で能率よく行なうことができるかについても併せて考えていきたい。完成後には着装プレゼンテーションを行う。			
学生に対する評価の方法 作品製作 60%、授業態度 20%、試験 20%などを総合的に判断し評価する。 なお、ファッション造形演習Ⅰの不合格者は演習Ⅱの履修が難しいので注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
「ワンピース」の製作		「パンツ」の製作	
第1回	ワンピースとは	第25回	パンツとは
第2回	デザインと素材について	第26回	デザインと素材について
第3回	縮図のパターン作成	第27回	縮図のパターン作成
第4回	〃	第28回	実物大パターン作成
第5回	実物大パターン作成	第29回	パターンチェック、トレース
第6回	パターンチェック	第30回	パターンカット、マーキングと裁断
第7回	パターンカット	第31回	仮縫い合わせ
第8回	マーキングと裁断	第32回	試着と補正
第9回	仮縫い合わせ	第33回	本縫い準備
第10回	試着と補正	第34回	脇縫い
第11回	〃	第35回	ポケット作り
第12回	本縫い準備	第36回	〃
第13回	身頃作り	第37回	股下縫い
第14回	〃	第38回	股上縫い
第15回	袖作り	第38回	前明き始末
第16回	ノーカラーの見返し作り	第40回	〃
第17回	見返し付け	第41回	ベルト付け
第18回	ファスナー付け	第42回	〃
第19回	〃	第43回	裾始末・仕上げ
第20回	袖付け	第44回	試験
第21回	〃	第45回	プレゼンテーション及び作品提出
第22回	ファスナー明き始末		
第23回	裾始末および仕上げ		
第24回	プレゼンテーション及び作品		
使用教科書 中屋典子/三吉満智子監修「服装造形学 技術編Ⅰ」文化出版局 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 授業の進捗状況に合わせた製作が望ましいので遅れは事前に解消しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形演習Ⅱ		演習	水嶋 丸美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
3	1年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 前期に修得した被服構成の基礎知識・技術の復習と、更なる向上、および新たな知識・技術の修得を到達目標とする。 さらに、デザインやパターンの応用力と、合理的な縫製技術の修得を目標とする。			
授業の概要 前期の課題アイテム(スカート・ブラウス)の製作から修得した被服構成の基礎知識・技術の更なる向上と、新たな知識・技術の修得のため、ワンピースおよびパンツの製作を行う。 ワンピースでは見返しを用いた始末の方法、パンツではポケットの種類とその縫製方法の知識・技術を学び、両アイテムを通じて2種類のファスナーの縫製方法の知識・技術を修得する。 また、応用としてデザインやパターンに関する知識・技術の向上と、合理的な縫製技術を修得する。			
学生に対する評価の方法 ①課題アイテムの製作過程・提出作品・その他提出物(製図・ノート等) [70%] ②被服構成の基本知識、製図、アイテムの基本知識に関する試験 [20%] ③授業への取り組み姿勢 [10%] 以上、①～③を総合的に判断し評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等)			
第1回	①ワンピースに関する基本知識、ワンピース製図(テントシルエット) 講義	※1回 = 3コマ	
	②③ワンピース製図(ウエスト切替え、よこ切替えの応用) 講義	週2回開講	
第2回	①② // 製図(プリンセスライン、パネルライン、長袖) 講義	①…1コマ目	
	③ワンピース実物大製図	②…2コマ目	
第3回	①② // 実物大製図確認、型紙作成	③…3コマ目	
	③ // 裁断、印つけ		
第4回	① // 仮縫い		
	②③ワンピース仮縫い 試着補正、パターン修正・整理		
第5回	① // 縫製準備(未裁断パーツの型紙作成、接着芯貼り、裁断、印つけ)		
	②③ワンピース製作(裁ちはしの始末、ダーツ・たて切替えラインの縫製)		
第6回	① // 製作(肩縫い、脇縫い、よこ切替えラインの縫製)		
	②③ // 製作(コンシールファスナー付け、襟ぐりの始末)		
第7回	① // 製作(袖作り、袖付け)		
	② // 製作(裾の始末、スプリングホック付け)、仕上げ		
	③ワンピース着装プレゼンテーション、作品・仕様書提出		
第8回	①パンツに関する基礎知識、基本パンツ(ストレートパンツ) 製図講義		
	②スリムパンツ製図講義 ③製図応用(ベルボトムパンツ) 講義		
第9回	①製図応用(ワイドパンツ) 講義 ②製図応用(フレアパンツ) 講義 ③実物大製図		
第10回	①②パンツ実物大製図確認、シーチング仮縫い		
	③ // シーチング仮縫い 試着補正		
第11回	①パンツパターン修正、型紙作成 ②裁断、印つけ、縫製準備 ③裁ちはしの始末		
第12回	①②パンツ製作(ポケット付け)		
	③ // 製作(脇縫い、股下縫い)		
第13回	①② // 製作(見返し付け、股ぐり縫い、ファスナー付け)		
	③ // 製作(ベルト作成)		
第14回	①② // 製作(ベルト付け)		
	③ // 製作(ボタンホール・ボタン付け、またはホック付け)		
第15回	①後期試験 ②パンツ仕上げ、着装プレゼンテーション、作品・仕様書提出		
	③後期試験解説、後期まとめ		
使用教科書 中屋典子／三吉満智子監修 「服装造形学 技術編Ⅰ」 文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 被服構成の知識・技術の修得に努め、課題アイテムの製作に真摯に取り組むこと。			

[授業科目名] 人間工学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 白石 孝子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 衣服設計に関わる人間因子のうち、形態的因子と運動機構的因子についての理解をテーマとし、被服人間工学の視点から衣服設計を考える姿勢・力をつけることを到達目標とする。 形態的因子では、身体全体の形態および部分形態、運動機構的因子では主に可動域について学び、一部演習も実施するがこれらを通して着心地の良い衣服について具体的に理解し、パターンメイキングの基礎となる理論へ展開させる力を養うことを目標としている。			
授業の概要 前期の科目である「ファッション造形論」で学んだ基礎をさらに進め、被服人間工学の視点から衣服設計と体型分類・部分および全体の身体形状とパターン・動体形状とゆとりについて演習の内容も含めて講義を行う。これらの知識を生かしパターン設計の力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、レポートによる授業課題の理解度(50%)、最終に実施する試験(30%)などで総合的に評価を行う。 試験:ノート、資料等の持ち込みは不可とする。 追再試:試験結果が不合格の場合、再試験を行う。また、止むを得ない事情で受験できなかった場合は追試験を行うので必ず申し出ること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 人間工学を学ぶにあたって (人間工学とは、講義内容の概要、参考書の紹介、授業準備のしかた、授業日程の説明) 被服人間工学 第2回 部分体型と全体体型、体型と姿勢 第3回 衣服設計の立場からの体型分類 第4回 身体形状とパターン 第5回 人体の部分形状の検討Ⅰ ①頸部形状の計測・採取 第6回 ②頸部形状の検討・分析 第7回 人体の部分形状の検討Ⅱ ①体幹部形状の計測 第8回 ②体幹部形状の採取 第9回 ③体幹部形状の分析 第10回 ④体幹部形状の検討・まとめ 第11回 運動と身体形状 第12回 可動域 第13回 運動量、ゆとり 第14回 試験 第15回 学習のまとめ			
使用教科書 前期科目「ファッション造形論」で使用した「服装造形学 理論編Ⅰ」を使う			
自己学習の内容等アドバイス 静止時および動作時の体型と衣服の関係がテーマなので、授業時間内だけでなく、日常的に体型・動作時の体型と衣服の動き・着心地等について関心を持つことをすすめる。 事前:教科書や資料の予読 事後:学んだ内容についてレポートをまとめ提出する			

[授業科目名] ファッション素材論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安藤 文子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション素材論は、デザイン・造形演習とともに3本柱となるものである。作品製作のためには素材知識が非常に重要であり、その素材のもつ性質を十分に把握しておく必要がある。 そこで、繊維の製造、性質、用途などの基礎を学び、テキスタイルを生み出すために必要な知識を身につけて、適正な素材選びと新しい素材作りができるところまでのレベルを目標とする。			
授業の概要 上記目標にしたがって、今後の仕事や生活に密着した内容とする講義と平行して、基本的な原料・変化糸・織物・編物のサンプルを扱いながら、テキスタイルコレクション1冊を完成させる。これらの資料は卒業後も活用できるものとなる。			
学生に対する評価の方法 小テスト・期末試験(80%) 授業への参画態度、課題提出(20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス、小テスト テキスタイルコレクション材料について 第2回 材料の分類について解説 第3回 綿、麻繊維について 素材サンプルの解説 第4回 毛繊維について サンプル配布 課題 第5回 絹繊維とシルクライク素材 第6回 再生繊維 半合成繊維について 第7回 素材サンプルの解説 繊維製造現場映像解説 第8回 合成繊維 新合繊 化学繊維製造過程映像 第9回 その他の合成繊維 サンプル配布 第10回 合成繊維のまとめ 第11回 繊維製品の品質について 第12回 ファッション造形のための知識 第13回 テキスタイルコレクションの作成 第14回 素材に関するクレーム事例研究 第15回 全体のまとめ・試験			
使用教科書 安藤、他 「生活材料学 ―ファッションとインテリア― アイ・ケイコーポレーション 東海被服材料学研究会編 「テキスタイルコレクションII」			
自己学習の内容等アドバイス 繊維の主な性質を把握しておくことは重要であるのでしっかり覚えること。他の実習で使う材料を購入する際、表示などに関心を持つこと。			

[授業科目名] テキスタイル論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日下部 信幸
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 前期で学んだ基礎的な繊維の素材論を発展させて、糸、布を含めたテキスタイルに関する知識を養うことを目標とする。ここでは、特に糸と布の成り立ち、組織と柄の関係を学ぶことをテーマとし、ファッション素材選びに生かすようにする。			
授業の概要 糸と布の成り立ちを学ぶために、糸で作った布と繊維から直接作った布の違いから糸の重要性を知り、ファッション素材として最も多く使用されている糸で作った織物に注目する。特に、糸の造り方、織物の三原組織と各種の織り柄との関係、織物とその他の布との違いなどを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 試験 (50%)、毎回行う質問への回答 (25%)、授業への参画及び授業態度 (25%) とする。授業態度は 4 ない (遅刻しない・おしゃべりしない・居眠りしないプラス携帯見ない) 態度と 4 する (質問する・討議する・発表するプラス予習復習する) 態度になるようにすることである。なお、本授業は再評価を行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 テキスタイル素材のレビュー。 第 2 回 テキスタイルの繊維・糸・布を区別しよう。 第 3 回 糸から造った布と繊維から造った布の違いを知ろう。布のせん断性とドレープ性。 第 4 回 糸の成り立ちと種類、S 捻りと Z 捻り、捻り係数と強さ。 第 5 回 糸を造る道具 (紡錘車、糸車、手紡ぎ車) から機械 (三大紡機、現代紡機、革新紡機) へ。 第 6 回 糸の太さ表示、番手換算法、糸番手と布の重さと使用糸の長さの 3 つの関係。 第 7 回 織物の種類と三原組織、完全組織図、綜紬の枚数と組織の関係。 第 8 回 三原組織からできる変化組織。 第 9 回 2 色の糸を使って平織から織り柄を作る。新しい柄を作る。 第 10 回 2 色の糸を使って斜文織から織り柄を作る。 第 11 回 平織と斜文織及びその変化組織を使って、代表的な織り柄のツーアンドツーチェック、シャークスキン、千鳥格子、グレンチェックなどを作る。 第 12 回 編み物、レース、不織布、フェルトなどの成り立ちと性質。 第 13 回 布の加工と新素材の開発。 第 14 回 試験 第 15 回 まとめ			
使用教科書 前期で使用の「生活材料科学—ファッションとインテリア—」(アイ・ケイ・コーポレイション)			
自己学習の内容等アドバイス 家にある服、店頭に並ぶ服、人が来ている服を観察して、学んだことを生かそう。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション素材テスト		実験	安藤 文子・宮本 栞
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次後期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 繊維製品を扱う場合、理論的な知識だけでなく、ファッション素材テストで確認しておくことは、実社会において非常に役立つものとなる。また、市販の衣料品をサンプルとして、日常的に発生する諸問題を実験によって確認する。種々の演習で各繊維の特徴をつかむことによって、クレームのない繊維製品づくりと適正な扱いができる能力を養う。			
授業の概要 この授業では繊維を鑑別する方法をマスターした後、素材に関する基本的な性能試験を習得する。鑑別実験においては、実験過程で繊維の特徴を学ぶことができるので細部まで観察してほしい。性能試験は各種の機械を使用し、物性などを検討する。			
学生に対する評価の方法 実験ごとに提出する実験レポート 80% 授業に対する取り組み姿勢と小テスト 20%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 実験に対する心構えとレポートまとめ解説 燃焼テスト 第2回 形態観察テストと性能との関連 第3回 呈色による繊維観察と染色性について 第4回 薬品によるテストと耐薬品性について 第5回 混用率に関する試験 第6回 第1回目から4回目までのまとめ 混用率実験の説明 第7回 鑑別実験まとめ 第8回 性能試験の解説Ⅰ・実験 第9回 試験の解説Ⅱ・実験 第10回 性能試験Ⅰ 第11回 性能試験Ⅱ 第12回 性能試験Ⅲ 第13回 性能試験Ⅳ 第14回 性能試験のまとめ 第15回 提出レポートのまとめ			
使用教科書 安藤、他 「生活材料学－ファッションとインテリア－ アイ・ケイコーポレーション 担当者作成資料			
自己学習の内容等アドバイス 実験レポートは必ず実験した当日にまとめ、考察には関連事項を各自で調査し、内容のあるレポートにすること。また疑問点があれば参考書などで調べて記載してほしい。			

[授業科目名] テキスタイルデザイン		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 日下 知子
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ テキスタイルデザインの基礎知識と技術修得をテーマとし、最終商品をイメージしながらテキスタイルデザインを企画提案できる素材のプロ養成を到達目標とする。			
授業の概要 本物のよさを知る高感性な人が増え、しかも市場に商品が溢れている今、繊維業界だけでなく、アパレル業界においても、優れたテキスタイルデザイナーの重要性は増している。 この授業では、実践に即して作品制作を行い、生活者ニーズに対応した商品を提供する為に必要な知識・感性・技術を身につける。			
学生に対する評価の方法 制作作品 (80%) 授業への参画態度 (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 テキスタイルデザインの意味と特徴・ファッション業界における位置付け (履修内容・使用教材の説明) 第2回 テキスタイルデザインの基礎① 正送り柄作成 第3回 テキスタイルデザインの基礎② ハーフステップ送り柄作成 第4回 プリント柄① 加工方法の種類とそれぞれの特徴 第5回 プリント柄② ジョイント付き柄作成 (具象柄) 第6回 織物柄① 先染織物柄作成 (ストライプ柄) 第7回 織物柄② 先染織物柄作成 (チェック柄) 第8回 テキスタイルデザインの応用 スカーフ柄作成 第9回 テキスタイルデザインの応用 スカーフ柄作成 第10回 カラーコーディネート① 配色図案作成 (幾何・抽象柄) 第11回 カラーコーディネート② 配色図案作成 (伝統文様柄) 第12回 カラーコーディネート③ 配色図案作成 (自由) 第13回 テキスタイル企画立案 第14回 テキスタイル企画プレゼンテーションマップ作成 第15回 テキスタイル企画プレゼンテーション			
使用教科書 適宜プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回、次回の課題内容を説明するので、デザイン案などを考えておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッションビジネス論		講義	高見 俊一
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ ファッションビジネスに関する入門講座。必修科目として全員が履修する。ファッションビジネスとは何かから始まり、その仕組み、現状の問題点、将来に向けての展望をする。各自のファッションへの興味・関心は、ファッションビジネスの一部にしか過ぎないはずである。そこで、全体像を知ることが目標とする。			
授業の概要 リーマンショック以降、社会の変化はもとより、生活者の意識・行動が大きく変化している。そのような市場環境の中で、日本のファッション産業はどうなっていくのだろうか。刻々と変化する市場情報を、毎週伝えながら講義する。最初は、独特な業界用語が多数出てきて、戸惑いを感じるかもしれないが、その都度解説を加えながら指導していく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、授業内で課するレポート（20%）、期末テスト・レポート（60%）などで、総合的に評価を行う。出席数が満たない者、期末テスト・レポートの未提出者は自動的に失格とする。したがって、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（基本ルールの解説、自己紹介） 第2回 次世代ファッション産業の到来（歴史的変遷、現況、将来の展望） 第3回 環境変化のとらえ方①－時代環境－（変革期の構造とは、現況、時代環境予測） 第4回 環境変化のとらえ方②－トレンド予測－（21世紀初頭の市場構造） 第5回 アパレル産業の全体構造（複雑なアパレル産業構造と関連産業の全体像） 第6回 川上・川中の構造、仕事の種類（アパレル産業における独自の仕事とは） 第7回 ファッションデザイナーとは（デザイナーの位置づけ、必要な能力） 第8回 マーチャンダイザーとは（マーチャンダイザーの仕事とは） 第9回 ファッション専門店の構造&歴史と今後（専門店の仕組み） 第10回 大型小売業の現状と今後の方向（百貨店、量販店の現状と将来） 第11回 業態開発と新業態の動向（ファストファッションをはじめ、台頭する新業態の紹介） 第12回 グローバリゼーションの進展（アジアの時代、現状と今後の展望） 第13回 ファッションマーケティング（マーケティングとプロモーション） 第14回 産業・企業・人材の将来&自己啓発（職場はどう変わるのか、勉強法） 第15回 全体まとめ			
使用教科書 ファッションビジネス論 日本衣料管理協会編著 （日本衣料管理協会）			
自己学習の内容等アドバイス 絶えず街にでかけ、出来るだけ多くのファッションショップを観察すること。			

[授業科目名] ファッション情報論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三浦 玲子・浅野 健一
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッショントレンドやライフスタイルを時流とともに捉える能力を身につけ、自らの設定または与えられたテーマに対して「情報の収集」「分析」「組み立て」「表現（デザインやプレゼンテーション）」までの一連の行動を企画としてまとめられるようにする。			
授業の概要 MD、デザイナー、パタンナー、プレス、バイヤーなどファッション業界での職種で求められる基礎的なスキルや共通した知識を講義と演習を通して学ぶことにより専門的な知識や技術の土台を創る。 実践的な演習により専門分野への興味と探究心を養い、自発的な学習・情報収集・分析能力を身につける。			
学生に対する評価の方法 企画作品提出物による。（レポート・制作作品：60%：試験40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 ファッションと情報の基礎知識を身につける 2回 ファッショントレンドの発生を読む 3回 ファッション情報の収集と分析についての手法を学ぶ 4回 企画・デザインを組み立てるための4つの要素 （商品企画、生産企画、販売企画、プロモーション） 5回 企画・デザインの実行方法とファッション情報の生かし方を学ぶ 6回 演習のためのターゲット分析とテーマの設定・制作目標の設定を行う 7回 各個人が設定したテーマにより、情報の収集、分析、ブランドイメージ計画表の作成。 8回 ターゲットが共感できるプレゼンテーションツール創りと実行のための学生からのQ&A-1 9回 ターゲットが共感できるプレゼンテーションツール創りと実行のための学生からのQ&A-2 10回 プレゼンテーション1 11回 プレゼンテーション2 12回 ファッション情報論の総括として、マーケット調査による企画の実勢体験 13回 試験 14回 特別講義・演習（浅野担当） 15回 特別講義・演習（同上）			
使用教科書 担当者の作成レポートによる （参考資料・図書） 1、ファッションカラーとファッション雑誌 2、織研新聞			
自己学習の内容等アドバイス 織研新聞などでファッション・アパレル業界の情報や仕組みを知り、事業内容の理解度を高める。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション販売論		講義	高見 俊一
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1 年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ ファッション小売業に関する基本的な理解を狙いとしている。販売手法にも触れつつ出来るだけ最新の情報を織り込みながら講義する。ファッションビジネスでは、どの職種についても、販売が基本であり、全員が最初に仕事として必ず経験する。その意味を徹底理解させる。ビジネスコースに進む学生は必ず受講すること。			
授業の概要 ファッション小売店を生活者と作り手・売り手の接点として重要な拠点と位置付け、ファッションとは、販売とは、をはじめ、小売店の機能、仕事の具体的な手順を理解するとともに、用語を含めた小売業に関する基本を徹底指導する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、授業内で課するレポート（20%）、期末テスト・レポート（60%）などで、総合的に評価を行う。出席数が満たない者、期末テスト・レポートの未提出者は自動的に失格とする。したがって、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 現代社会におけるファッション小売業の役割（日本の小売業とは、その歴史） 第2回 販売とは、販売職の魅力とは（日本専門店協会のえっせい入選作を読む） 第3回 ファッション小売業の構造（小売業態、組織構造、職務の種類） 第4回 ファッション小売業の経営戦略（ブランドとは、事業計画と出店戦略） 第5回 小売業とマーケティング①（小売業のマーケティング） 第6回 小売業とマーケティング②（タウンウォッチング） 第7回 小売業とマーケティング③（情報収集の方法と情報活用法） 第8回 ファッション小売業の販売①（ターゲットと<客層>と販売の仕組み） 第9回 ファッション小売業の販売②（販売スタッフの役割） 第10回 ファッション小売業の販売③（店<販売>計数） 第11回 ファッション小売業の仕入れ、商品開発①（商品<仕入先>市場と仕入れの仕組み） 第12回 ファッション小売業の仕入れ、商品開発②（バイヤーの仕事） 第13回 ファッション小売業のプロモーション①（小売業のプロモーションの種類） 第14回 ファッション小売業のプロモーション②（シーズンプロモーション計画と具体的事例） 第15回 21世紀初頭のファッションビジネスと販売（求められる販売職の姿）			
使用教科書 改定ファッション販売論 高見俊一・川畑洋之介著（日本衣料管理協会）			
自己学習の内容等アドバイス 洋服をはじめ「モノ」を購入する時に、どのような売り方、接客が役立ったかを考えてみる。			

[授業科目名] ファッションショー企画・演出		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 和邦
[単位数] 1	[開講期] 1～3年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ イベント運営における各セクションが担うべき役割と技能の修得をテーマに、ファッションショーという複数領域にわたるクリエイションの協業を体験することで、ファッションディレクターとしての能力を養うことを目標とする。			
授業の概要 本学科の主要イベントであるNUAS COLLECTIONを制作する。 プロジェクトチームを編成して企画を立ち上げ、演出・照明・音響・映像・美術・広報のセクションに分かれて、本番に至るまでのすべての運営業務に携わる。			
学生に対する評価の方法 チームにおける活動状況(責任感、協調性等) 70% 実務能力 30%			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 プロジェクトチームの編成 第2回 企画・構成 第3回 テーマ決定 第4回 シーンコンセプト決定 第5回 企画書作成 第6回 運営セクションへの配属(スケジュール作成) 第7回 デザインオーデイション 第8回 デザイン修正・作品点数決定 第9回 モデルオーデイション 第10回 作品チェック 第11回 ステージレイアウト決定(美術担当) 演出プラン作成(演出担当) BGM選曲・編集(音響担当) 映像制作(映像担当) 広報ツール制作(広報担当) 第12回 リハーサルの実施 第13回 ステージ制作 照明プラン決定(照明担当) 最終リハーサル 第14回 本番 第15回 経費清算・評価			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス セクション間の連携が重要であることを強く認識し、自らの業務だけでなく、常にチーム全体とのコミュニケーションを心がける。			

[授業科目名] デザイン研修		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 学科各担当者
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この科目は学外研修を中心としたものであり、学内では経験することが難しい学外の企画に参加・見学をすることにより幅広い知識や経験の修得を目的とした授業である。			
授業の概要 学外研修では、学科の専門科目に関連した工場見学、美術館・博物館・展示会见学、各種コンテスト見学、などを企画し、実施する。 研修に参加するにあたり、研修先の事前調査および研修で得た情報や知識をレポートにまとめ提出することを単位修得の条件とする。			
学生に対する評価の方法 事前研修を含む研修レポート（90%）、研修への参画態度（10%）を総合的に判断し評価する。 集中講義期間に実施するので注意すること。 成績発表は4年次後期			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 舞台鑑賞（能・バレエ・ミュージカル・オペラなど） 第2回 大型アウトレットモール見学 第3回 1年次学外研修旅行（東京を予定） 第4回 " ※大規模展示会见学、美術館見学、ショップ研究(市場調査)など 第5回 コンテスト最終審査会见学 ※実施場所は年度により異なる 第6回 2年次学外研修 第7回 " ※工場見学、美術館・博物館見学など 第8回 ファッション関連市場調査 第9回 美術館・博物館見学 第10回 3年次学外研修 第11回 " 第12回 繊維またはアパレル関連工場の見学 第13回 外部ファッションセミナーへの参加 第14回 4年次学外研修 第15回 展示会の見学 ※行事や企画の開催時期・会場・内容等により、授業計画の内容が変更される場合がある。 詳細は、説明会および学科の掲示板にて連絡する。			
使用教科書 担当者作成の資料配布			
自己学習の内容等アドバイス 各研修先の事前調査を行い、研修先への興味・関心を高めて研修に臨むこと。			

[授業科目名] 海外デザイン研修		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 学科担当教員
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この科目は、感性豊かな時期に海外を視察し、見聞を広め、国際人として活躍することの出来る人材を育成するために開講された科目である。 日本とは異なった文化や歴史を持つ国々を訪れ、文化や習慣を体験することを目的とする。			
授業の概要 世界で活躍されているデザイナーが拠点としているファッションを学ぶ上で必要不可欠な国や都市を見学するため、次のような国々で研修を実施する予定である。 ①ヨーロッパを中心とした国々での研修 フランス・イギリス・イタリアまたはベルギー(約2週間) ②専門分野研修のための短期留学 アメリカ・イギリス・フランス・イタリアなど			
学生に対する評価の方法 事前研修・説明会への参画態度(20%)、事前課題レポート(30%)、研修報告書の提出(40%)、研修態度(10%)を総合的に判断し評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 海外デザイン研修オリエンテーション 第2回 研修先国内事前説明会Ⅰ 第3回 研修先国内事前説明会Ⅱ 第4回 研修先国内事前説明会Ⅲ 第5回 事前課題調査レポートの提出 第6回 研修国内事情の説明、渡航手続き方法、その他 第7回 研修先についての解説(訪問先施設…学校、工場、美術館・博物館など) 第8回 事前研修(最終説明会)…研修先確認、危機管理、その他 第9回～第14回 現地研修 第15回 研修レポートまとめ、提出、研修報告会			
使用教科書 担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 研修先の事前調査を行い、研修先への興味・関心を高めて研修に参加すること。 また、研修後の報告書を必ず提出すること。			

[授業科目名] ファッション造形特別演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 近藤 保・草野 田津子 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション関連の知識・技術を幅広く学ぶため、さまざまな方面の技術を学び、作品制作の視野を広げる。 また、機会を得ることにより、知識・技術の向上を図ることを授業の到達目標とする。			
授業の概要 この授業は、ファッションに関連する分野の知識や技術を得るために、集中的に演習・実習を実施する授業である。			
学生に対する評価の方法 レポート課題・制作課題等 (80%)、課題提出状況 (10%)、授業への参画態度 (10%)、を総合的に判断し評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 草野 田津子氏 「アートフラワー演習」(1年次) 第2回 // 第3回 // 第4回 // 第5回 近藤 保氏 「ドレーピング演習 (基礎)」(2年次) 第6回 // 第7回 // 第8回 // 第9回 近藤 保氏 「ドレーピング演習 (応用)」 第10回 // 第11回 // 第12回 // 第13回 サンプル縫製実習 第14回 カット&ソーの縫製演習 第15回 //			
使用教科書 担当講師準備の資料			
自己学習の内容等アドバイス 各授業の応用となる授業のため、常日頃ファッションの専門科目の知識や技術の修得に努めておくこと。			

[授業科目名] ファッションデザイン特別講義		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 下記参照
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション業界で常に活躍されているらっしゃる特別講師の方々から、直接ご講義いただくことにより刺激を受け、各分野の知識を修得する。 また、現場で積み重ねてこられたご経験を伺い、役立てることができる知識を蓄積させることを到達目標とする。			
授業の概要 ファッション業界は常に動いている。この流れの中で活躍されている著名なデザイナーや、ビジネス分野で成功されている講師を招き講義を行っていただく。			
学生に対する評価の方法 レポート課題 (80%)、レポート・その他課題の提出状況 (10%)、授業への参画態度 (10%)、を総合的に判断し評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 田山 淳朗氏 特別講義 第2回 小西 良幸氏 特別講義 第3回 丸山 敬太氏 特別講義 第4回 近藤 保氏 特別講義 第5回 畠山 巧氏 特別講義 第6回 津村 耕佑氏 特別講義 第7回 宇津木 えり氏 特別講義 第8回 比嘉 京子氏 特別講義 第9回 渡辺 教子氏 特別講義 第10回 ファッションジャーナリスト (予定) 第11回 その他① 第12回 その他② 第13回 その他③ 第14回 その他④ ※各講師のスケジュール等により開講順は変更されます。 第15回 その他⑤			
使用教科書 担当講師準備の資料			
自己学習の内容等アドバイス 事前に講師の作品や経歴等を調べ、授業内容がより理解できるよう予習をしておくこと。			

[授業科目名] デザイン演習Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 和邦
[単位数] 1	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザイン創造を通じてメッセージを発信するためには独創性のみならず、メッセージ内容（デザインコンセプト）に対する共感性を考慮することが重要である。デザインが社会にどのようなインパクトを与えるのかを常に意識し、より強い共感を求めて、適切な表現方法を選択し提案する能力を養うことを目標とする。			
授業の概要 デザイン演習Ⅰ・Ⅱで培ったイメージの展開力に加えて、素材・ジャンル・アイテム別の様々なデザイン提案手段の研究を行い、各種コンテストへの参加においてその成果を発揮することを目的とする。 なお、本科目履修にあたっては、「ファッションデザイン画」を履修済みであることが望ましい。			
学生に対する評価の方法 受講態度（制作への意欲） 30% 作品提出とその内容評価 70%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 デザインコンテスト①（資料収集・傾向分析・テーマ設定） 第2回 デザインコンテスト①（グッズデザイン研究・素材研究） 第3回 デザインコンテスト①（提案手段の検討・デザイン画制作・作品提出） 第4回 デザインコンテスト②（資料収集・傾向分析・テーマ設定） 第5回 デザインコンテスト②（メンズデザイン研究および描法の習得・素材研究） 第6回 デザインコンテスト②（提案手段の検討・デザイン画制作・作品提出） 第7回 デザインコンテスト③（資料収集・傾向分析・テーマ設定） 第8回 デザインコンテスト③（キッズデザイン研究および描法の習得・素材研究） 第9回 デザインコンテスト③（提案手段の検討・デザイン画制作・作品提出） 第10回 デザインコンテスト④（資料収集・傾向分析・テーマ設定） 第11回 デザインコンテスト④（ユニフォームデザイン研究・素材研究） 第12回 デザインコンテスト④（提案手段の検討・デザイン画制作・作品提出） 第13回 デザインコンテスト⑤（資料収集・傾向分析・テーマ設定） 第14回 デザインコンテスト⑤（バリエーションの展開） 第15回 デザインコンテスト⑤（提案手段の検討・デザイン画制作・作品提出） ※コンテストの日程、応募数に応じて履修スケジュールを調整			
使用教科書 資料配布 （各種コンテストの研究資料および参考作品）			
自己学習の内容等アドバイス 日常からアイデアスケッチを描きため、様々な種類の課題に対応できるよう準備しておく。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
コンピュータグラフィックス演習 I		演習	岡本 洋介
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	2年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ デザイン表現の習得方法には、手描きによる方法とパソコン上でグラフィックソフトを使用する方法がある。これをもとに業界標準グラフィックソフト Illustrator と、デジタル画像編集ソフト PhotoShop を使用して作品づくりを行い、Illustrator の基本操作を習得する。			
授業の概要 Illustrator を使用してベジェ曲線の使い方や色彩について学び、PhotoShop を使用してイラストや写真の編集方法を学ぶ。これにより印刷や Web などのあらゆるメディア向けグラフィックが作成可能となる。			
学生に対する評価の方法 授業の出席、提出する作品等で総合的に実施する。なお、この授業は再評価を実施しない。 出席状況・レポート提出・操作解説の記録・製作過程のデータから評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回ガイダンス 講義内容の説明と計画等について <ul style="list-style-type: none"> グラフィックソフト Illustrator の各ツールの解説・選択ツール・ダイレクト選択ツール 長方形ツール・楕円ツール・ペンツール・鉛筆ツール・ブラシツール 手のひらツールとズームツール・スクロールと画面の拡大縮小 第2回 Illustrator の基本操作-1 <ul style="list-style-type: none"> shift キーを使った水平垂直方向のオブジェクトの移動方法・オブジェクトのコピー方法 回転ツールとリフレクトツールを使ったオブジェクトの移動とコピー 回転ツールを応用して「花」を制作・リフレクトツールを応用して「蝶」を制作 第3回 Illustrator の基本操作-2 <ul style="list-style-type: none"> 任意で作ったオブジェクトにスウォッチライブラリーから彩色 線種の設定 オブジェクトの線幅を変える・ガイドについての説明・任意サイズの新規書類 グラデーションのつけ方とオリジナルグラデーションの作成 第4回 Illustrator の基本操作-3 <ul style="list-style-type: none"> カラー CMYK RGB についての解説 複数のオブジェクトに対しての整列・パスファインダの効果 任意のオブジェクトについてのワークツールの使用方法とその効果 シンボルスプレーツールの使用方法とその効果 オリジナルシンボルを制作し、シンボルに登録 第5回 Illustrator の基本操作-4 <ul style="list-style-type: none"> レイヤーについての解説・PhotoShop データの配置・マスクの操作方法・文字ツールの使用方法 ブレンドツールによるオリジナルグラフィック制作 グラデーションメッシュツールの使用方法とその効果 			

第6回 Illustrator の応用-1 マスク・リフレクトツールを応用して「目」「顔」を制作

第7回 Illustrator の応用-1 マスク・リフレクトツールを応用して「目」「顔」を制作

第8回 Illustrator の応用-2 「頭部」「胴体」を制作

第9回 Illustrator の応用-2 「頭部」「胴体」を制作

第10回 Illustrator の応用-3 「手」「足」「衣服」「靴」「帽子」などを制作

第11回 Illustrator の応用-3 「手」「足」「衣服」「靴」「帽子」などを制作

第12回 Illustrator の応用-4 メッシュツールを応用して立体的に表現する

第13回 Illustrator の応用-4 メッシュツールを応用して立体的に表現する

第14回 Illustrator の応用-5 制作してきた各パーツを整理し、背景制作、人体を完成させる。

第15回 Illustrator の応用-5 制作してきた各パーツを整理し、背景制作、人体を完成させる。

使用教科書

自己学習の内容等アドバイス

ソフトウェアおよびデータ作成に関する操作方法は各自専用のノートを用意し、必ずメモをとり操作の習得をより確かなものにする。制作したデータは記録メディアに保存する習慣をつける。

[授業科目名] コンピュータグラフィックス演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 岡本 洋介
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講座では、コンピュータグラフィックス演習Ⅰで学習した Illustrator・PhotoShop の操作方法を復習するとともに応用力を養う。			
授業の概要 写真素材を使用して PhotoShop の基本操作を学習し、イラストや写真の編集方法を学び、Illustrator データとの連携、写真合成やフォトレタッチを学習・研究する			
学生に対する評価の方法 授業の出席、提出する作品等で総合的に実施する。なお、この授業は再評価を実施しない。 出席状況・レポート提出・操作解説の記録・製作過程のデータから評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回ガイダンス 講義内容の説明と計画等について <ul style="list-style-type: none"> ・デジタル画像編集ソフト PhotoShop の各ツールの解説・選択ツール・なげなわツール ・多角形選択ツール・自動選択ツール・トリミングツール・エアブラシツール・スタンプツール ・手のひらツールとズームツール・スクロールと画面の拡大縮小 第2回 PhotoShop の基本操作-1 <ul style="list-style-type: none"> ・移動ツール・ブラシツール・ヒストリーブラシツール・消しゴムツール・スポイトツール ・グラデーションツール・塗りつぶしツール・パス選択ツール・文字ツール ・ペンツールの説明と操作方法 第3回 PhotoShop の基本操作-2 <ul style="list-style-type: none"> ・スキャナ操作方法・各パレットの解説 ・レイヤー・チャンネル・ヒストリー・パス・カラー・色見本・新規ファイル作成 ・画像サイズの変更・描画色と背景色の解説・ブラシサイズの調整 第4回 PhotoShop の基本操作-3 <ul style="list-style-type: none"> ・選択範囲・チャンネル・レイヤーについての解説・画像の保存方法 第5回 PhotoShop の応用- 1 自然素材と人工素材の合成写真 第6回 PhotoShop の応用- 2 抽出を利用した合成写真 第7回 PhotoShop の応用- 3 照明効果を利用した合成写真 第8回 PhotoShop の応用- 4 季節感を変えるフォトレタッチ 第9回 PhotoShop の応用- 6 アルファチャンネルを利用したフォトレタッチ 第10回 PhotoShop の応用- 7 季節感を変えるフォトレタッチ 第11回 PhotoShop の応用- 8 3D トランスフォームを利用したフォトレタッチ 第12回 PhotoShop の応用- 9 季節感を変えるフォトレタッチ 第13回 PhotoShop の応用-10 フォトレタッチによる氷の表現 第14回 I PhotoShop の総復習 第15回 PhotoShop の小テスト			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス ソフトウェアおよびデータ作成に関する操作方法は各自専用のノートを用意し、必ずメモをとり操作の習得をより確かなものにする。制作したデータは記録メディアに保存する習慣をつける。			

[授業科目名] コンピュータグラフィックス演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山縣 亮介
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 美術の世界では使う道具により表現方法やその限界が異なる。素材の持つ特性を最大限に生かしながら制作するという事は、その素材ならではの表現であり個性でもある。 コンピュータによる表現に対し、これまで慣れ親しんできた絵の具などの道具代替えとして考えるのではなく、コンピュータならではの手法や表現の可能性に目を向け、新しいアプローチの方法を考える姿勢を身に付けることを到達目標とする。			
授業の概要 Photoshopの基本操作を学び、画像の修整、加工、合成、イラスト描画などの方法を習得する。応用操作では、ファッションに関する素材の表現を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、授業内で行う課題に対する理解度（20%）、課題作品（40%）、前期試験（20%）などで総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 Photoshopの基本操作-1 メニューの解説 第2回 Photoshopの基本操作-2 ツールの解説 第3回 Photoshopの基本操作-3 パレットの解説① 第4回 Photoshopの基本操作-4 パレットの解説② 第5回 Photoshopの応用操作-1 ジャガード織の表現 第6回 Photoshopの応用操作-2 毛皮の表現（豹柄） 第7回 Photoshopの応用操作-3 オーストリッチの表現 第8回 Photoshopの応用操作-4 ニットの表現 アクセサリーの表現①（ドッグタグ） 第9回 Photoshopの応用操作-5 アクセサリーの表現②（真珠） 第10回 Photoshopの応用操作-6 アクセサリーの表現③（ダイヤモンド） 第11回 Photoshopの応用操作-7 アクセサリーの表現④（ターコイズ） アクセサリーの表現⑤（シルバーリング） 第12回 ブランドイメージポスターもしくはCDアルバムジャケット制作① 第13回 ブランドイメージポスターもしくはCDアルバムジャケット制作② 第14回 ブランドイメージポスターもしくはCDアルバムジャケット制作③ 第15回 試験及び作品提出			
使用教科書 特になし。適宜資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業内でもったメモを読み返しておく。課題作品用の資料を収集しておく。			

[授業科目名] デザインマネジメント		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山内 睦美
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 商品企画の初期発想として、マーケット、トレンド、デザイン、企画構成を習得することをテーマとし、カラー、素材、デザイン、デザイン構成のプレゼンテーションを実践する。			
授業の概要 マーケット、情報誌等からのトレンド、デザインアイデアの収集方法と、デザインアイデアからデザイン企画をすることの重要性を学ぶ講義を行う。トレンド、デザイン、素材、カラー、イメージを組み合わせたデザイン企画の構成を演習する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（40%）、数回実施するレポート内容（30%）、最終に実施するプレゼンテーション内容（30%）などで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 デザインマネジメントを学ぶにあたって （マーケットトレンドと情報誌等からのデザインアイデアの収集方法） 第2回 マーケットトレンドと情報収集 第3回 雑誌、情報誌のトレンドと情報収集 第4回 トレンドカラーとスタイリング 第5回 ニット素材と布帛素材の特徴 第6回 ブランドのイメージ企画 第7回 マーケトリサーチからのデザイン企画 第8回 マーケトリサーチからのデザイン企画 第9回 情報誌からのデザイン企画 第10回 情報誌からのデザイン企画 第11回 カラー、素材、スタイリングとデザイン企画 第12回 イメージとデザイン企画 第13回 デザイン企画のプレゼンテーション 第14回 デザイン企画のプレゼンテーション 第15回 デザイン企画と構成			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス トレンドを把握して、数回のマーケットリサーチからレポートとするための内容と表現方法を考察する。			

[授業科目名] ファッション造形演習Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 佳津子																																													
[単位数] 3	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ アパレル生産で必要な合理的な縫製、パターンテクニックを学び、完成度の高い作品制作を目標とする。																																																
授業の概要 ファッション造形演習Ⅰ・Ⅱで修得した知識、技術を基本とし、重衣料の基本ジャケットを制作する。 素材・シルエット・副資材また、パターン展開・縫製技術の修得を目的とする。																																																
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題・ノート提出 (50%)、試験 (30%) などで総合評価を行う。																																																
授業計画 (回数ごとの内容等) <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>授業概要説明</td> <td>ジャケットの基本デザイン・シルエットについて</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>ジャケットの作図方法</td> <td>ゆとり、ダーツ展開</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>テーラーカラーの作図</td> <td>表衿と見返しの展開の必要性</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>二枚袖の作図方法とポケットの種類とパターン</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>各自制作するジャケットデザイン (ハンガーイラスト) のチェック</td> <td>パターン作成</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>パターン作成</td> <td>身頃まで</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>パターン作成</td> <td>トワール組 → チェック → 修正</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>パターン作成</td> <td>袖パターン作成 (縫い代付け、裁断、芯貼り等縫製準備)</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>縫製</td> <td>伸び止めテープー縫い代始末</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>縫製</td> <td>ポケット付け</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>縫製</td> <td>衿、見返し縫い</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>縫製</td> <td>袖付け</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>縫製</td> <td>まとめ (穴かがり、ボタン付け、まつり縫い、仕上げ、採寸)</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>テスト</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>プレゼンテーション</td> <td></td> </tr> </table>				第1回	授業概要説明	ジャケットの基本デザイン・シルエットについて	第2回	ジャケットの作図方法	ゆとり、ダーツ展開	第3回	テーラーカラーの作図	表衿と見返しの展開の必要性	第4回	二枚袖の作図方法とポケットの種類とパターン		第5回	各自制作するジャケットデザイン (ハンガーイラスト) のチェック	パターン作成	第6回	パターン作成	身頃まで	第7回	パターン作成	トワール組 → チェック → 修正	第8回	パターン作成	袖パターン作成 (縫い代付け、裁断、芯貼り等縫製準備)	第9回	縫製	伸び止めテープー縫い代始末	第10回	縫製	ポケット付け	第11回	縫製	衿、見返し縫い	第12回	縫製	袖付け	第13回	縫製	まとめ (穴かがり、ボタン付け、まつり縫い、仕上げ、採寸)	第14回	テスト		第15回	プレゼンテーション	
第1回	授業概要説明	ジャケットの基本デザイン・シルエットについて																																														
第2回	ジャケットの作図方法	ゆとり、ダーツ展開																																														
第3回	テーラーカラーの作図	表衿と見返しの展開の必要性																																														
第4回	二枚袖の作図方法とポケットの種類とパターン																																															
第5回	各自制作するジャケットデザイン (ハンガーイラスト) のチェック	パターン作成																																														
第6回	パターン作成	身頃まで																																														
第7回	パターン作成	トワール組 → チェック → 修正																																														
第8回	パターン作成	袖パターン作成 (縫い代付け、裁断、芯貼り等縫製準備)																																														
第9回	縫製	伸び止めテープー縫い代始末																																														
第10回	縫製	ポケット付け																																														
第11回	縫製	衿、見返し縫い																																														
第12回	縫製	袖付け																																														
第13回	縫製	まとめ (穴かがり、ボタン付け、まつり縫い、仕上げ、採寸)																																														
第14回	テスト																																															
第15回	プレゼンテーション																																															
使用教科書 中屋典子・三吉美智子監修「服装造形学 技術編Ⅱ」 文化出版局																																																
自己学習の内容等アドバイス 事前にジャケットのデザイン、素材を調べておく。作成対象者の採寸を行っておくこと。																																																

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形演習Ⅲ		演習	黒田 悦子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
3	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 作品の制作を通して、パターンの理論と縫製技術を関連付けて学び、より完成度の高い服作りをテーマに、パターンの知識を深めるとともに、実習による縫製技術の向上を目指すことを目標とする。			
授業の概要 ファッション造形演習Ⅰ・Ⅱで修得した基礎知識および技術を踏まえ、さらに応用発展できる能力を養う。 具体的には「裏付きベスト」を制作する。その過程で、パターンおよび裏付き衣服の基本的な縫製方法について学ぶ。 また、「テーラードジャケット」の作図について学び、各自テーラードジャケットの作図をし、トワールにて組立て、試着、補正をし、フルパターンを作成する。			
学生に対する評価の方法 制作作品（80％） 授業態度（20％） なお、授業の欠席は減点の対象となるので注意すること。 再評価は実施しないので、作品の提出期限は厳守すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ベストのデザインと素材について 原型操作及びベストの作図講義 第2回 各自制作するベストの実物パターン作成 トワール裁断・組み立て・チェック・修正・ベストのパターン完成 第3回 テーラードジャケットのデザインについて解説 テーラードジャケットの作図講義（身頃三面構成） 第4回 身頃四面構成・テーラードカラー・2枚袖の作図講義 第5回 各自制作するジャケットのパターン作成 第6回 ベストの表地及び裏地の裁断 芯地の裁断及び接着 第7回 ベスト本縫い ダーツ・デザイン線縫い等、前後の身頃作り（表地、裏地） 第8回 ポケット作り 第9回 表地、裏地の肩縫い及び見返しと裏地の縫合 前端、衿ぐり、袖ぐりの縫合 第10回 表返しをし、前端、衿ぐり、袖ぐりを完成 第11回 脇縫い及び裾の始末 第12回 まとめ、ベスト完成、提出 第13回 テーラードジャケットのトワール裁断・組み立て・チェック・パターン修正 第14回 表衿と見返しのパターン作成 第15回 表地及び裏地のパターン完成			
使用教科書 中屋典子・三吉満智子監修「服装造形学 技術編Ⅱ」文化出版局 担当者作成のテキスト			
自己学習の内容等アドバイス 授業内における実習時間は限られるので、作品の縫製については、授業以外における実習により、毎回の授業内容を次回の授業までにクリアしていく努力が必要である。 常に意欲的に授業に取り組む姿勢が大切である。			

[授業科目名] ドレーピング I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 後藤 裕子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 美しいシルエットを作る上で、重要なドレーピングの第一段階である地直しから始める事により、糸の力を利用してシルエットを創ることが、着崩れを起こさない服作りができる。 また、スカートの形の良否は、人間の体の形、その構造がどこまでわかっているかによって決まることを、中ヒップの役割を演習により理解することを目標とする。			
授業の概要 ドレーピング I では、地直し、ピン打ち、ハサミの入れ方など基本テクニックを習得し、標準体型をもとにした工業用ボディを使い、ボトムを中心に、さまざまなデザインにチャレンジできるよう導きたい。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(30%)、授業内での各項目の理解度(20%)、提出物、作品（50%）で総合的に評価をおこなう。 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ドレーピングについての基礎知識 ドレーピングの歴史 体型について 工業用ボディについて 第2回 地直し シーチングの扱い方 アイロンのかけ方 第3回 スカート原型 組み立て、印入れ、トレース 第4回 修正、再組み立て 第5回 タイトスカート 組み立て、印入れ 第6回 トレース、修正 第7回 再組み立て 第8回 Aラインスカート 組み立て、印入れ 第9回 トレース、修正 第10回 再組み立て 第11回 フレアスカート 組み立て、印入れ 第12回 トレース、修正、再組み立て 第13回 デザインバリエーション、8枚接ぎ、ヨーク付き等 第14回 デザインスカート 第15回 各自デザインしたスカートにチャレンジする。			
使用教科書 プリント			
自己学習の内容等アドバイス 授業内で使用するシーチングの地直し（糸抜き・赤も入れ）を事前にしておくこと。			

[授業科目名] ドレーピング I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 山縣 亮介
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 立体裁断と平面裁断を対極的に区別することなく、立体裁断とはドレーピング、もしくはパターンメイキングによって実現される立体的な服作りであることを認識し、『立体を知った上での平面』と『立体を知らない平面』では出来上がる型紙のラインが違うものになることの理解を到達目標とする。			
授業の概要 衣服とは、「平面」という二次元の素材を用いて、「立体」という三次元の曲面体である人体を包む造形物である。その衣服設計を行う方法のひとつであるドレーピングを様々なモデル作品の作成を通して習得する。 また、胸ぐせのダーツ処理によるデザイン展開を学び、ダーツが衣服デザインにおける重要なファクターであることを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (20%)、授業内で行う課題に対する理解度 (50%)、前期試験 (30%) などで総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ドレーピングについての基礎知識 (歴史、立体裁断と平面裁断、体型、必要な道具) ボディについての基礎知識 (種類及び目的について、ボディの準備) 第2回 地直しについて ピンの打ち方 第3回 タイトスカート① (ドレーピング) 第4回 タイトスカート② (マーキング&ドラフティング) 第5回 フレアスカート① (ドレーピング) 第6回 フレアスカート② (マーキング&ドラフティング) 第7回 身頃原型について スローパー① (ドレーピング) 第8回 スローパー② (マーキング&ドラフティング) 第9回 胸ぐせの処理 (ダーツによるデザイン展開) 第10回 ダーツを利用したオリジナルデザイン 第11回 シャツカラー (ドレーピング及びマーキング&ドラフティング) 第12回 台襟付きシャツカラー (ドレーピング及びマーキング&ドラフティング) 第13回 袖原型について 袖のドレーピング① (製図、シーチングへの転写) 第14回 袖のドレーピング② (ピン仕上げ、袖付け) 試験対策 第15回 前期試験			
使用教科書 特になし。適宜資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回授業範囲のシーチング準備をしておくこと。			

[授業科目名] ドレーピング I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 中川 恵子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ アパレル企業に於いて、生産用パターンを作成するパタンナーに必要なドレーピングの知識と技術を、基本テクニックから取得していく。			
授業の概要 人体工学に基づく人体の構造、機能性を学びながら、スカート、ブラウスのシルエット作り、衿、袖のドレーピング、パターン作成を行う。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（60%）、提出物（40%）、などで総合的に評価を行う。 なお、この授業は再評価を実施しないので、授業態度・提出物には十分注意すること。 （欠席回数が授業回数の3分の1を超えている場合及び、作品の提出が80%以下の場合には不認定とする）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ドレーピングについての基礎知識（授業の目的と、講義内容の概要、授業日程の説明） 第2回 正確なシルエットを作成する為に重要な、シーチングの地直しの仕方を学ぶ 第3回 タイトスカートのドレーピング 第4回 タイトスカートのパターン完成 第5回 フレアースカートのドレーピング 第6回 フレアースカートのパターン完成 第7回 見頃ストレートスローパーのドレーピング 第8回 見頃ストレートスローパーのパターン完成 第9回 見頃ストレートスローパーに運動量のゆるみを加え、ブラウススローパーの作成 第10回 ブラウススローパーのシーチング組み立て 第11回 スタンドカラーのドレーピング 第12回 シャツカラーのドレーピング 第13回 スタンドカラー・シャツカラーのパターン完成 第14回 袖のドレーピング 第15回 袖のパターン完成			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 次回ドレーピング作業の為の、シーチングの地直しをしておくこと。			

[授業科目名] パターンメイキングⅠ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 佳津子
[単位数] 1	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ パターンの基礎と数多くのディティールの作図方法を修得することを目標とする。			
授業の概要 原型を使用してのパターンの基礎展開と作図方法を学ぶ。 パターン展開に必要な基本的なダーツの処理方法、ディティールの作図方法を学び、各アイテムの中に取り込み全体のバランスや完成度を高めることを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業態度（20%）、課題・ノート提出（40%）、試験（40%）などで総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	身頃のダーツ展開	ダーツの必要性・ダーツの分散・移動・デザイン展開	
第2回	スカート原型	タイトスカート・Aラインスカート・フレアスカート	
第3回		ギャザースカート・ゴアードスカート・キュロットスカート	
第4回	衿の作図	フラットカラー・セーラーカラー・シャツカラー	
第5回		スタンドカラー・台衿付きシャツカラー	
第6回		ショールカラー・テーラーカラー	
第7回	袖の作図	一枚袖（半袖・長袖）	
第8回		ギャザー袖・タック袖・（袖口、袖山への展開）	
第9回		二枚袖（明き見せ・本明き）	
第10回	ブラウスの作図	ダーツあり・なしの展開	
第11回		ブラウス（台衿、長袖、前立て、短冊、ドロップショルダー）	
第12回	縫い代付け		
第13回	仕様書の記入方法	ブラウス・スカート	
第14回	テスト		
第15回	まとめ・テスト解答		
使用教科書 中野典子・三吉美智子監修 「服装造形学 技術編」 文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 回ごとに内容を復習し、自分の言葉で補足しノートにまとめる。衿や袖の名称と形を予習しておくこと。			

[授業科目名] パターンメイキングⅠ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 有馬 国子
[単位数] 1	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 広く市場の現場を理解することを目的とする。			
授業の概要 工業用ボディの原型を利用して、パターンメイキングをする。 立体に基づくパターンメイキングは着やすく、工業生産する場合も作りやすく、美しいシルエットのものづくりができる。			
学生に対する評価の方法 提出物（50%）、授業への参画状態（30%）、その他・デザイン性等（20%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 工業用原型の説明 ダーツの移動 スカート 第2回 ギャザースカート 第3回 セミフレアースカート フレアースカート 第4回 プリーツスカート キュロットスカート ブラウス 第5回 ウエストダーツブラウス 第6回 ストレートブラウス 衿 第7回 台つきシャツカラー 第8回 ショールカラー 第9回 テーラーカラー 袖 第10回 シャツ袖 第11回 一枚袖 第12回 ギャザー袖 第13回 提出物 第14回 ジャケット 第15回 2枚袖 ☆スカート原型 ドレス原型 ストレート原型を使用してパターンメイキングをする。			
使用教科書 担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス パターンメイキング後にそれを組み立て、パーツ名や縫いしろを自分で書き込むこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
テキスタイルケア		講義	宮本 栞
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次後期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 1年次で学んだ多種多様な素材の幅広い知識を基礎として、繊維製品について使用中の性能維持と扱い上の注意に関する科学的な知識と考え方を修得することをテーマとし、それに基づき衣服の着用・保存管理のために行われる「手入れ」の適正な方法を的確に遂行する能力の育成を到達目標とする。			
授業の概要 繊維製品の消費過程において重要な洗浄・漂白・染色・仕上げなどの合理的で経済的な手段についてクレーム事例も示しながら解説する。これらの知識をまず自分の衣服の日常の手入れに導入して実践し、この成果をレポートにまとめて確認し、さらに周辺の実際面に応用できるようにすることを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の受講態度（20%）、授業内で行うレポートによる理解度（30%）、最終に実施する試験（50%）などで総合的に評価を行う。【評価算出の割合を（）内に%で示す。】			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明） 衣服の汚れ（汚れの組成、汚れの分類、繊維への汚れの付着状態） 第2回 衣服の洗浄（洗濯の発祥、洗濯の目的、洗濯のメカニズム、洗浄力試験） 第3回 洗剤について①（洗濯剤発見の歴史、界面活性剤の構造・特性・分類・作用） 第4回 洗剤について②（洗剤に用いられる界面活性剤の一般的性能） 第5回 洗剤について③（市販洗剤の種類と性質） ビルダーについて（主なビルダーの種類と作用） 第6回 素材別扱いの違いと処理法（繊維について） 第7回 素材別扱いの違いと処理法（布、皮革、羽毛について） 第8回 洗浄の条件と洗浄効果（洗剤濃度・洗浄温度・洗浄時間・洗濯水の硬度・洗浴のpH等の影響） 第9回 漂白（漂白剤の分類、漂白剤の特徴と使用法、漂白上の一般注意） 増白（蛍光増白の原理、蛍光増白剤の特性） 第10回 しみ抜き（しみ抜きの方法、しみ抜きの一般的注意） 仕上げ①（柔軟仕上げ、糊付け、糊剤） 第11回 仕上げ②（アイロン仕上げの方法とその効果） ドライクリーニング 第12回 被服の保管（保存中の損傷の種類とその原因、防虫対策、保存法） 第13回 染色①（染色の意義、天然染料と合成染料の種類・特性・染色方法） 第14回 染色②（染色堅ろう度、染色堅ろう度試験法） 第15回 試験日			
使用教科書 安藤文字他共著 生活材料学 （株アイ・ケイコーポレーション）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと			

[授業科目名] 織・編（織）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 杉浦 晶子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション造形における最も重要な要素である織物の全行程を学び、織り機の構造と織物組織（平織り・綾織り）を理解し、使いこなす。 目的に合った素材選び、糸密度と糸量の計算、仕上げまでを各自計画し実行できるようにする。			
授業の概要 本格的な足踏み式手織機を用い純毛マフラーと服地サンプルを制作する。 ・マフラーは平織り綾織り（ヘリンボーン）を自由に使い好みの配色で織り上げ、縮絨（毛織物の仕上げをする）。 ・2色の糸の配列を工夫すると、単純な組織でも思わぬ織り柄となる「くずし」の技法で、千鳥格子などの服地サンプルを制作する。 ・羊毛の手紡ぎを体験し、繊維と紡ぎ方による糸の特性を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 制作作品80%、レポート10%、授業態度10% 作品未提出の場合、途中経過も評価しない。 制作時間が少ないので極力欠席しないこと。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 手織り機の構造、手織りの行程と織り計画 第2回 たて糸の製経 第3回 粗筈通し 第4回 巻き取り 第5回 綜統通し 第6回 筈通し、織りつけ、試織 第7～10回 1作目織り 第11～13回 2作目織り 第14回 房の始末と傷なおし 第15回 縮絨と仕上げ、織物の組織図まとめ 第16回 羊毛の手紡ぎ（羊毛の種類と部位の特性・紡毛と梳毛）			
使用教科書 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 細かい作業が多いが、慎重に進めれば充分時間内に完成する。説明をよく聞くこと。			

[授業科目名] 織・編（編）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 成子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 編み組織の特性、編成原理及び、素材特性を理解する事により、実社会に出た時に、即役立つ人材育成を目指す。			
授業の概要 編み機の利用によってニットの基本から学び、各自テーマに沿って作品を仕上げる。 さらにコンピューターとの連動で製品が出来る装置や、近代的な編成原理の基礎を習得する。			
学生に対する評価の方法 作品の提出(70%)、授業への参画状態(30%) などで総合的に評価を行う。 作品提出日は厳守。本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	講義 実習	編み機と、編み目が出来る原理を学習する。(毛糸の注文・購入) 編み物の基礎と、編み機の使い方を学ぶ。 編み機で編む、モヘアのロングマフラーの制作	
第2回	実習	編み機で編む、モヘアのロングマフラーの制作、アイロン、仕上げ	
第3回	実習	編み機で編む、ニットキャップの制作、アイロン	
第4回	実習	編み機で編む、編みこみネックウォーマーの制作	
第5回	実習	編み機で編む、編みこみネックウォーマーの制作、アイロン	
第6回	実習	ニットキャップの仕上げ	
第7回	実習	編みこみネックウォーマーの仕上げ	
第8回	実習	作品提出日。完成していない作品の仕上げ、仕上げアイロン モヘアのマフラー、ニットキャップ、編みこみネックウォーマー 提出作品は3点。提出記録を書いて提出する。	
使用教科書 編み機に付属の本（テクニックブック・トラブルブック）			
自己学習の内容等アドバイス 授業は、編み機を使っでの作品制作になるが、教室には、かぎ針・棒針も置いてある。 かぎ針・棒針作品が載った本も多数、置いてありますので利用すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
コンピュータテクスチャ演習		演習	村松 朋子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期～3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ ファッションを学ぶ学生に重要な、縫製仕様書記載について、その基礎的な知識及び描画の方法をコンピュータを用いて習得することをテーマとする。それに基づき、自らの提案を最適な方法で表現する能力を養うことを到達目標とする。			
授業の概要 アパレル専用のCGソフトを使用して、テキスタイルの柄の作成、着装シミュレーション、マップ作成を行う。基本操作を習得した後、応用作品を制作する。制作した柄を用いてのカラー展開、画像の編集技術などを実践する。ソフト間の互換や、スキャナを使用したの画像加工などを行う。 併せて、企業で利用されている工業用の自動制御横編機、捺染プリント機についても説明し理解を深める。			
学生に対する評価の方法 授業への参画状態（30%）、授業内で行う制作により各授業項目の修得度（70%）などで総合的に評価を行う。 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 概要説明およびDrawingソフト使用説明 第2回 Drawingソフト使用説明 第3回 Drawingソフト課題制作 第4回 Paintingソフト使用説明及び柄作成 第5回 Paintingソフト応用及びスキャナの使用説明 第6回 Mappingソフト使用説明及び練習課題 第7回 Mappingソフト課題制作 第8回 Mappingソフト課題制作 第9回 最終提出課題計画及び、自動制御横編機と捺染プリント機の説明 第10回 課題制作 第11回 課題制作 第12回 課題制作 第13回 課題制作 第14回 課題制作 データ提出 第15回 講評会 なお、10回～14回のいずれかの回で自動制御横編機及び捺染プリント機の説明を行う			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業で行う制作には、雑誌、写真などを用いるため、あらかじめ自分の興味のある素材は保管しておくこと。			

[授業科目名] 染色デザイン I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 白柳 まどか
[単位数] 2	[開講期] 2 年次前期	[必修・選択] 選択 (衣必)	備考
授業の到達目標及びテーマ 一つの作品を一人の手で作り出す手染の技法を習得するとともに、手仕事の個性と、技術から生まれる独特の美の世界を見極める目を養う。技法による制約や限界に挑戦しながら、各々の感性を生かした自由な発想で作品を制作することを目指す。作業を進める中で、技法による思わぬ発見があることを期待する。			
授業の概要 防染法 (型染)、直接法 (ステンシル)、を用いて実際に作品制作をする。色や形や、空間などの模様を構成する要素と、デザインの基本について理解する。			
学生に対する評価の方法 作品にレポートをつけて提出 (課題 2 点とレポート 2 点)。再評価は、実施しない。作業内容が多いため、欠席を避けること。作品の評価 60%、レポート 20%、授業への取り組み 20%、として評価する。作品の評価については、授業内容の理解力に加え、各々の創意工夫を評価する。準備するものを持ってこないと作業に支障をきたすため、忘れないようにすること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 染色技法とデザインの必要性について ～ 「型染」 技法説明、参考作品を見る ～ デザインを考える 第 2 回 デザインチェック ～ 型紙を彫る ～ 紗張り 第 3 回 型染実習 (1) 糊を作る ～ 型付 / 「ステンシル (摺り込み)」 技法説明、参考作品を見る 第 4 回 型染実習 (2) 色差し 第 5 回 型染実習 (3) 色止め ～ 水元 / デザインチェック ～ 型紙を彫る 第 6 回 摺り込み実習 (1) 1 色目 / 「型染」 講評 第 7 回 摺り込み実習 (2) 2 色目 ～ 3 色目 / 「ステンシル」 講評			
使用教科書 資料プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、何をつくるかを考える訓練をしておく、デザインを決める際に、迷わず、スムーズに作業に取りかかることができる。			

[授業科目名] ものづくり講座Ⅰ（刺繍・帽子）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 刺しゅう： 河村 博子 帽 子： 武山 昌子
[単位数] 1	[開講期] 2年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「ものづくり講座Ⅰ」では、刺しゅうおよび帽子の実習を通して、それぞれの専門知識や技術の修得を到達目標とする。 また、工芸品が機械化する中で手作りの作品を仕上げることにより、手仕事のすばらしさと重要性を学ぶ。			
授業の概要 刺しゅうと帽子の基本的な技術・知識を、実習を通して修得する。 刺しゅうでは、基本的なステッチの技術を学び、刺しゅうを活かした作品の制作を行う。 帽子では、制作方法の基本を知り、ファッションデザインを衣服のみではなく被服としてとらえ知識を深め、縫製技術を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度（10%）、提出作品・作品数（90%）を総合的に判断して評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） 《刺しゅう講座》 第1回 刺しゅうの歴史、方法についての講義 第2回 刺しゅう糸の扱い方、基礎的な刺しゅう技法 第3回 基礎的な刺しゅう実習 第4回 基礎的な刺しゅう実習 第5回 応用の刺しゅう技法 第6回 応用刺しゅう実習 第7回 応用刺しゅう実習 第8回 作品評価 《帽子講座》 第9回 帽子の歴史、種類についての講義 第10回 帽子の構造講義、パターン作成① 第11回 作品制作① 第12回 作品制作① 第13回 パターン作成② 第14回 作品制作② 第15回 作品制作② 第16回 作品評価			
使用教科書 刺しゅう： 戸塚刺しゅう Stitch book 大学から貸与 帽 子： 担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 集中で行う授業のため、日ごろから集中力を養い、縫製技術の復習をしておくこと。			

[授業科目名] ものづくり講座Ⅱ（陶芸）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 若子 千年 他
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期～3年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「ものづくり講座Ⅱ」では、様々な技法の陶芸実習を行うことにより、陶芸の基本知識および技術を修得する。 また、陶芸の実習を通じて、ものづくりの基本を知り、デザイン性の高い造形作品制作への意欲をより高めることを目的とする。 さらに、陶芸の関連事項について各自調査・研究を行い、陶芸に対する幅広い知識を修得することを到達目標とする。			
授業の概要 陶芸の知識や技法を、それぞれの専門家から学び、実際に作品を制作することで、陶芸作品およびものづくりの基本姿勢を学ぶ。 また、陶芸に対する知識を修得するためのレポート課題も実施する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度（10%）、提出作品（60%）、レポート提出（30%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 陶芸の手法解説、手捻りによる作品制作 第2回 手捻りによる作品制作 第3回 たたら造りと簡易象嵌による陶芸作品制作（皿） 第4回 たたら造りと簡易象嵌による陶芸作品制作（皿） 第5回 たたら造りと簡易象嵌による陶芸作品制作（カップ） 第6回 たたら造りと簡易象嵌による陶芸作品制作（カップ） 第7回 陶芸に関する調査(レポート課題提出) 第8回 陶芸に関する調査(レポート課題提出) 第9回～第15回 学外研修・他			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 陶芸に対する造詣を深めるための、予習を行っておくこと。 また、展覧会など積極的に足を運び、見る目を養う。			

[授業科目名] 基礎ゼミナール		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 複数担当者によるオムニバス
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考 3年次前期に別日程の集中授業あり
授業の到達目標及びテーマ この科目では、3年次の専門ゼミナール、4年次の卒業研究の授業に備えて一般常識を学び、就職対策および卒業後の就職に役立てる知識を得とくすることを到達目標とする。			
授業の概要 この科目では、専門ゼミナールや卒業研究で必要となる論文の書き方や、研究方法、アンケートの調査方法などの大学生としての基礎能力について学ぶ。 また、一般常識および、就職活動対策や卒業後の就職に役立てる知識について学ぶ。 それぞれの分野の担当者が交代で授業を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度（10%）、課題提出状況（10%）、レポート・ポートフォリオ・論文・その他提出課題（80%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業ガイダンス(授業内容について) 第2回 社会人基礎力Ⅰ（社会人になるための準備） 第3回 社会人基礎力Ⅱ（企業が求める人材） 第4回 社会人基礎力Ⅲ（ファッション業界で求められる人材） 第5回 書類の作成手法Ⅰ 第6回 書類の作成方法Ⅱ 第7回 論文の書き方Ⅰ(学術論文と一般論文) 第8回 論文の書き方Ⅱ(演習) 第9回 ポートフォリオの作成方法Ⅰ 第10回 ポートフォリオの作成方法Ⅱ 第11回 プレゼンテーション能力養成 第12回 マナー講座（社会人としてのマナー） 第13回 企業人講座Ⅰ 第14回 企業人講座Ⅱ 第15回 企業人講座Ⅲ			
使用教科書 担当講師作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 一般常識試験等、授業の中で実施するため、常に社会人としての基礎能力を高める予習を行うこと。			

[授業科目名] ファッションクリエイト演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒田 悦子
[単位数] 3	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 作品の制作を通して、自分の思い描いたデザイン・シルエットの服作りが可能となることを目指す。 手早く、完成度の高い服作りのための作業手順、縫製テクニックの修得に努める。そして、将来デザイナー、パタンナーを志す者に必要な知識と技術力を十分に身に付けることを目標とする。			
授業の概要 ファッション造形 I・II・III で得た知識と技術を生かし、ジャケットの定番であり、活用範囲が広く、しかも学ぶ価値の高いアイテムである「総裏付きテーラードジャケット」を制作する。その過程において、機能的で且つ、美しいシルエット作りのための芯の扱い、縫製方法、縫製テクニック、アイロンの扱い等服作りに関する技術を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 制作作品 (80%) 授業態度 (20%) なお、授業の欠席は減点の対象となるので注意すること。 再評価は実施しないので、作品の提出期限は厳守すること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 テーラードジャケットの表地及び裏地の裁断・芯地の裁断 第2回 芯接着・印つけ・ポケット布裁断 第3回 本縫い・表地のダーツ及びデザイン線縫い 第4回 裏地のダーツ及びデザイン線縫い、ポケット作り (アウトポケット) 第5回 ポケット作り (フラップポケット・箱ポケット) 第6回 表身頃テープ貼り・肩縫い・裏衿作り・裏衿付け 第7回 見返しと裏地の縫合・裏地肩縫い・表衿付け 第8回 上衿外回り縫い 第9回 ラペル、前端、裾縫い 第10回 表に返し、衿、前端を整える 第11回 裾の始末 (表地・裏地) 第12回 袖作り (2枚袖 明きみせ付き、明きみせなし) 第13回 袖付け 第14回 袖付け及び袖裏始末、まとめ、ボタン付け 第15回 ジャケット完成、提出			
使用教科書 中屋典子・三吉満智子監修「服装造形学 技術編II」文化出版局 担当者作成のテキスト			
自己学習の内容等アドバイス 授業内における実習時間は限られるので、作品の縫製については、授業外における実習により、毎回の授業内容を次回の授業までにクリアしていく努力が必要である。 遅刻、欠席は実習進度の遅れに大きく影響する。そのようなことのないよう注意をし、常に意欲的に授業に取り組む姿勢が大切である。			

[授業科目名] ドレーピングⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 後藤 裕子・山縣 亮介
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドレーピングⅡでは、Ⅰで学んだテクニックを発展させトップスのアイテムを広げていく。 中ヒップラインについて知ることで、美しいスカートを創ることができるように、袖も腕と身体との関係を知ることで、美しく機能的な袖を創ることができる。最初のブラウスにつけるシャツ袖で、それについて詳しくふれたい。			
授業の概要 現在のトレンドの流れをつかみながら、流行のシルエットのバリエーションを広げ、そして表現できるよう導きたい。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(30%)、授業内での各項目の理解度(20%)、提出物、作品（50%）で総合的に評価をおこなう。 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ドレス原型 組み立て、印入れ、トレース 第2回 修正、再組み立て 第3回 ストレートブラウス 組み立て、印入れ、トレース 第4回 修正、再組み立て 第5回 シャツ袖の製図、袖の目等 第6回 袖つけ、襟のドレーピング、シャツカラー 第7回 ワンピース（丈の長いもののトワルの据え方、ウエストのダーツの作りかたなど） 組み立て、印入れ、トレース 第8回 修正、再組み立て 第9回 ジャケット 4面構成（ゆとりを入れながらドレーピングすることを学ぶ） 肩パッド付け、組み立て、印入れ 第10回 トレース、修正、再組み立て 第11回 2枚袖の製図、袖付け 第12回 襟のドレーピング、テーラー、スタンド等 第13回 デザインジャケット 第14回 各自デザインしたジャケットにチャレンジする。 第15回 各自デザインしたジャケットにチャレンジする。			
使用教科書 プリント			
自己学習の内容等アドバイス 授業内で使用するシーチングの地直し（糸抜き・赤も入れ）を事前しておくこと。			

[授業科目名] パターンメイキングⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 佳津子
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 多くのディティールからアイテムとして展開し、分量感やバランス、パターンの重要性を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 パターンの基礎とディティールを学び、デザインへの活用、応用力を高める。 また、縫い代付け、仕様書、裏地の展開など工業用のパターン展開を修得することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題・ノート提出 (40%)、試験 (40%) など総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 衿 ウイングカラー・ナポレオンカラー・ハイネック 第2回 袖 ラグランスリーブ (表・裏地展開) 第3回 エポーレットスリーブ 第4回 キモノスリーブ・マチ入りキモノスリーブ 第5回 ケープ フード付き 第6回 ワンピース ファスナー・ベンツありの場合の裏地展開 第7回 縫い代付け・仕様書 第8回 ジャケット 三パネル切り替え 第9回 二枚袖作図 第10回 縫い代付け (角付け、高さ合わせの必要性) 第11回 身頃、袖の裏地展開 第12回 表素材の厚みによる表衿、見返しの展開 第13回 仕様書 第14回 テスト 第15回 まとめ・テスト解答			
使用教科書 中野典子・三吉美智子監修 「服装造形学 技術編Ⅱ」 文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 回ごとのまとめを確実に行き、ノートに自分の言葉で補足すること。 市場調査や自分の洋服のディティールを観察することによりパターンを立体的にとらえること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション造形特別演習Ⅱ		演習	森 喜久子 他
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次後期～3年次後期(集中)	選択	デザインコースのみ
授業の到達目標及びテーマ 将来服飾関係に身をおくことを目指す学生にとり、どの分野においても知っておくべき共通の基礎的なテクニック、知識および考え方を得とくし、さらに進んで基本の上にとった自己表現の方法を考え、生み出していく技術を修得することを到達目標とする。			
授業の概要 現代を生きるわれわれのファッションは、果たしてこれでよいのか、時、場所、目的は合致しているのか、さらに、良いものと悪いものの区別がつく“目”を持っているのかなど、ファッション界を生き抜いていくための基本を学ぶ。 また、ファッションの歴史的な背景を話していく中で、DIOR を取り巻くファッションの流れ、過去のファッションが現代にどうかかわってくるのか、さらに将来どう変化していくのかを1つのデザイナーブランドを通して自発的に問題意識を持てる人材を育成する。			
学生に対する評価の方法 DIOR 時代の資料を基にまとめ上げたレポートを学生に配布し、説明、さらに関連資料をスライドで見せ、意見を求めながら進行する。最終的には、歴史の基本から始まり現代に至るまでのファッションの中で課題を与え、デザインを書かせる。その作品と生地との関連、コスト、上代などプロの業界人として通用するか否かを提出物をもって判定をする。課題・レポート提出 (90%)、授業への参画態度 (10%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) (森 喜久子) 第1回 歴史の捉え方 (西洋服飾史の上での近代～現代) 第2回 近代～現代のファッションの流れの中でDIOR およびDIOR をめぐる人々の足跡 第3回 同上 第4回 マテリアルとデザインの関係 第5回 イメージをデザイン画に表現する練習 第6回 同上 ・ デザイン画提出 第7回 色彩とバランス 第8回 業界人を志す学生のための全般的な講義 商品の出来上がるまでを図解で説明する。 第9回 同上 第10回 以上を習得した学生に課題を与え、時間内に仕上げさせて提出させ、採点の対象にする。 (デザイン画提出 (コメント付)) (他) 第11回 デザイン発想の方法について 第12回 デザイン発想 (実習) 第13回 〃 第14回 プレゼンテーション 第15回 講評			
使用教科書 担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 授業内で発想したデザインを表現するための画力を常に磨いておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ビジュアルマーチャンダイジング		講義	竹内 克
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ ビジュアルマーチャンダイジングの基礎知識と技術を習得するとともに、小売業の現況を見つめ、感性を養いそれらを基にフレキシブルかつタイムリーにビジュライズできる能力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 授業は、パワーポイント等を用い視覚を通して平易に理解させる。仕上げとして自らショーウィンドウデザインを制作し、学習の成果とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (20%)、課題制作 (80%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション、竹内 克のプレゼンテーション (仕事の紹介) 第2回 ビジュアルマーチャンダイジングについて 1 第3回 " 2 第4回 " 3 第5回 ショーウィンドウのデザイン制作について 最新ニューヨークのショーウィンドウの紹介 第6回 ショーウィンドウのデザイン、プレゼンテーションボードの制作 1 第7回 " 2 第8回 " 3 第9回 " 4 第10回 課題のプレゼンテーション、講評 第11回 ショーウィンドウの模型制作 1 第12回 " 2 第13回 " 3 第14回 " 4 第15回 課題のプレゼンテーション			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 普段からメディアに頼らず自らの目で小売業の現況を確かめる。			

[授業科目名] グッズ・クリエイト I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 佳津子・他
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自分でショップを開く前提で素材、色、柄、デザインを考え、選び企画し、売れる物作りを目標とする。			
授業の概要 ティッシュケース、ペンケース、ポシェットや手提げバックの制作。 カーブに対するパイピングやファスナーの付け方、丁寧な作業による完成度の高い作品作りを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題提出 (80%)、などで総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 概要の説明 ティッシュケース、ペンケースのパターン作成 第2回 裁断・縫製 第3回 ポシェットのパターン作成・縫製 第4回 縫製 第5回 手提げバックのパターン作成 (ショップで販売するため2点制作) 第6回 縫製 第7回 縫製 まとめ 第8回 ファッショングッズについて 第9回 同上 第10回 同上演習 第11回 同上演習 第12回 靴に関する講義 第13回 同上 第14回 同上 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 事前に素材・デザイン等イラストにしておくこと。			

[授業科目名] グッズ・クリエイトⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小川 明伸
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業は、物作り(バッグ)の楽しさと大変さ、さらに「出来た！」と言う達成感を、バッグを作る過程で感じとり味わう事がテーマとなる。			
授業の概要 与えられた課題を材料の確保から始まり、裁断、手作業、縫製と手順を踏み3作品から4作品を完成させる事を目標とする。特にレザー(本皮)を使用する事により必要となる機械である皮漉き機及び厚物用特殊ミシン(平ミシン、腕ミシン)の基本的な使い方を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業への参画態度(40%) 作品を作る過程における段取りのよさ(30%) 前作で習得したものが次回作にどれだけ生かせるか(応用力)(20%) 作品の完成度(10%)			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 本授業を受けるにあたって必要な道具、材料の調達方法の説明 資材の概要 ミシン(2種類)の基本的な使用方法の説明 皮漉き機の基本的な使用方法の説明 第2回 第1作目 帆布製トートの作成 裁断 第2作目 レザーマチ無しショルダーバッグの準備 第3回 第1作目 帆布製トートの作成 手作業 縫製 第4回 第1作目 帆布製トートの作成 手作業 縫製 完成 第5回 第2作目の作成 レザーマチ無しショルダーバッグ 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第6回 第2作目の作成 レザーマチ無しショルダーバッグ 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第7回 第2作目の作成 レザーマチ無しショルダーバッグ 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第8回 第2作目の作成 レザーマチ無しショルダーバッグ 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第9回 第2作目の作成 レザーマチ無しショルダーバッグ 裁断 皮漉き 手作業 縫製 完成 第10回 第3作目(選択)の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第11回 第3作目の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第12回 第3作目の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第13回 第3作目の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第14回 第3作目の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 第15回 第3作目の作成 裁断 皮漉き 手作業 縫製 完成 ※ 作品制作の進み具合によりスケジュールの変更を行う場合がある。			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 製作過程を確実に把握をしておくこと			

[授業科目名] 染色デザインⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡邊 芳治 他
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」(伝産法)の内容と目的を知り、伝統的工芸品である「名古屋友禅(型友禅)」の歴史、特徴を理解し、技術、技法、染色用具、染色工程を修得することを、到達目標、テーマとする。また、皮革についての染色も後半で学ぶ。			
授業の概要 自己のデザイン・色彩感覚を生かし、実際の製品に結びつく作品を制作し、着物への理解をふかめる。作品制作は、学内および学外の染色工房において、染色用具、材料を使用し染色工程全体を修得する。後半は、皮革を素材に染色と革工芸について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、制作への意欲・作品の評価(60%)、レポート内容(20%) 作品制作の授業なので欠席は減点の対象となる。 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「伝産法」の内容と目的を知る。 第2回 「名古屋友禅(型友禅)」の歴史、特徴、技術、技法、用具、工程について知る。 第3回 名古屋友禅作品制作(地張り、糸目糊置き、色合わせ、型彫) 第4回 同 上 第5回 名古屋友禅作品制作(柄付け、地色作り) 第6回 同 上 第7回 名古屋友禅作品制作(柄付け、地色作り、地染め) 第8回 同 上 第9回 名古屋友禅作品制作(蒸し、水洗、仕上げ) 第10回 同 上 第11回 皮革の染色 第12回 同上 第13回 同上 第14回 同上 第15回 同上			
使用教科書 (財)伝統的工芸品産業振興協会「伝統工芸士研修テキスト」、名古屋友禅黒紋付協同組合連合会「型友禅技法解説書」など プリントを配布			
自己学習の内容等アドバイス 実際の着物を見たり、書籍などで事前に調べておくこと。			

[授業科目名] マーケティング論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高見 俊一
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ マーケティングは、企業経営にとって、必要欠くべからざる機能であり、ファッションビジネスの根幹をなすものである。同時に、マーケティングは多様な顔を持っている。そこで講義では、一般的なマーケティング論を基本にはするものの、実践的な技法が身に着くように指導していく。日常的にマーケティング思考ができる基盤を構築することを目標とする。			
授業の概要 主に、ファッション小売業でのマーケティングに焦点を合わせ、特に、マーケティング戦略、出店戦略等の講義にウエイトをかけるとともに、後半では、街研究として、立地調査を実施する。また、授業では、毎時間最初に業界のホットなニュースを伝え、その意味を解説していく。 ビジネスコースを専攻する学生は必ず受講すること。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、実習の成果（20%）、期末テスト・レポート（60%）などで、総合的に評価を行う。出席数が満たない者、期末テスト・レポートの未提出者は自動的に失格とする。 したがって、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（基本ルール、マーケティングの歴史） 第2回 マーケティングの定義（製造業のマーケティング、小売業のマーケティング） 第3回 企業におけるマーケティングの位置づけ（個人の能力との関係） 第4回 製造業と小売業の特性（戦略、思考法、事業展開の違い） 第5回 環境変化のとりえ方と市場環境予測 第6回 市場調査とは（市場調査手法の種類、主な手法の紹介） 第7回 情報収集の基本と発想法（情報収集法とその活用法） 第8回 商品企画、品揃えとマーケティング（新製品開発のプロセスと品揃えの手法紹介） 第9回 マーケティング戦略の構築と業態開発（3Cと4P） 第10回 出店戦略①（出店戦略の考え方と出店立地） 第11回 出店戦略②（店舗出店のプロセス） 第12回 街研究一演習① 立地特性の研究 第13回 街研究一演習② 実地調査 第14回 街研究一演習③ まとめ、プレゼンテーション 第15回 プロモーション（広告、パブリシティーとは、集客と購買促進の手法とは）			
使用教科書 ファッションマーケティング論 日本衣料管理協会編（日本衣料管理協会） （参考文献） マーケティングセンスを磨く 高見俊一著（織研新聞社）			
自己学習の内容等アドバイス 後半では、特に、チームに参画して成果を出すにはのノウハウを身につけよう。			

[授業科目名] 店舗設計		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中山 則和
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 21世紀は、女性やクリエイティブな人達が活躍する時代である。店舗設計の授業を通して、これから必要になる発想力と感性を磨いて21世紀に活躍する人になって頂きたい。			
授業の概要 21世紀のクリエイティブな仕事に必要なものはたくさんあるが、たいてい大学では教わらない。しかしクリエイティブな現場や、これからの仕事で必要になるものである。これらを習得して、クリエイティブな活動や、より良いコミュニケーションに活かしてほしい。			
学生に対する評価の方法 表現力 (50%) 授業への取り組み・熱意 (50%) プロを目指すならば、熱意を維持してやり続ける事が大切。 再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 設計の未来と現在と過去。自分の今いる位置を知ろう。 第2回 マインドマップを使って自己分析をしてみよう。 第3回 マインドマップを使っていろんなものを分析しよう。 第4回 マインドマップを使って創造性とアイデアをだす訓練をする。 第5回 マインドマップを自在に使って、脳を柔らかくして発想力を高める。 第6回 テーマを決めてマップの製作とプレゼンテーション。 第7回 店舗設計の調査とコンセプトマップの作成。その1 第8回 店舗設計の調査とコンセプトマップの作成。その2 第9回 活躍するデザイナーを先生に迎えて。その1 第10回 活躍するデザイナーを先生に迎えて。その2 第11回 店舗の計画その1 第12回 店舗の計画その2 第13回 店舗の計画その3 第14回 プレゼンテーション 第15回 まとめ			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス お店に入ったら店舗デザイナーの視線で興味深く見ること。			

[授業科目名] 市場環境論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高見 俊一
[単位数] 2	[開講期] 2・3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 隔年開講予定
授業の到達目標及びテーマ 社会環境、経済環境は加速度をつけて変化している。企業は市場環境という環境に適応することによって、生き残ることができる。特に、ファッションビジネスは、他産業に比べ市場環境の変化に強く影響を受ける。そこでこの授業では、市場環境を把握し予測する方法、考え方を講義し、市場環境の変化を具体的に実感できるようなレベルへの到達を目標とする。			
授業の概要 授業では、市場環境の変化とは何かを理解してもらうとともに、具体的な手法を紹介し、実践させる。トータル的目標を「2015年のファッション市場環境予測」とし、最終的には、まとめとして、報告書を提出させる。個人レベルの研究を重視するが、他人の見方も参考にするため、最後にグループワークを行う。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20％）、個人研究のレベル（20％）、グループワークへの参画度（20％） 期末テスト・レポート（40％）などで、総合的に評価を行う。出席数が満たない者、期末テスト・レポートの未提出者は自動的に失格とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、ノート作成の義務付けの指導 第2回 市場環境とは、市場環境を予測する意味とは 第3回 日常的な情報収集環境づくり 第4回 予測手法― 人口構造分析 第5回 予測手法― 歴史分析 第6回 予測手法― 未来年表の作成 第7回 予測手法― 観測のポイントと必要予測項目 第8回 予測野ための発想法― KJ法 第9回 予測のための発想法― 仮説検証法 第10回 予測のための発想法― シナリオライティング 第11回 課題「2015年のファッション市場環境予測」 構想の組み立て 第12回 個人研究 ノートの整理、個人レベルの予測結果整理 第13回 グループでの討議（個人レベルでの予測結果について） 第14回 グループとしてのシナリオライティング 第15回 グループ発表、まとめ			
使用教科書 マーケティングセンスを磨く 高見俊一著（織研新聞社）			
自己学習の内容等アドバイス 講義で示された方法の完全実施。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
マーケティング演習		演習	高見 俊一
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ ファッションビジネスの全体像を理解するには、ショップ作りのプロセスを体験することが効果的である。最初から、チーム編成し作業を進めていく。会社での仕事は、ほとんどがチームで行われる、そのための基盤を身につけてもらう。 ビジネスコースの学生は、必ず受講すること。			
授業の概要 セレクトショップ作りの店舗開発企画書を作成する。方法は、いくつかのグループに分け、それぞれがライバルという位置付けで演習を進める。現実に関わりなく近い条件で進めていくため、街に調査に出かける。最終のプレゼンテーションでは、順位付けを行いゲーム感覚も取り入れていく。 ビジネスコースの学生は必ず受講すること。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、チームへの参画度（30%）、演習結果（50%）などで、総合的に評価を行う。出席数に満たない者は、自動的に失格とする。演習のため再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（問題提起、個人研究） 第2回 グループ分けとテーマ決定（グループ分け、役割分担、テーマ決定） 第3回 コンセプトの構築、ターゲットの絞り込み 第4回 立地戦略の構築、立地候補、ライバル店の特定 第5回 立地調査、立地の特定<賃貸条件についても調査>、ライバル店調査 第6回 品揃えコンセプトの策定、年間、月別品揃え計画の立案 第7回 販売計画の立案、営業期の設定 第8回 店舗デザイン、イメージの策定、使用什器の特定 第9回 プロモーション計画の立案 第10回 企画全体像のチェック 第11回 投資採算計画の立て方、スケジュール計画の立案 第12回 採算計画書の策定 第13回 プレゼンテーションの意味、注意事項等の講義 第14回 プレゼンテーション準備、企画書作成 第15回 プレゼンテーションの実施と講評（外部の実務家を招き、評価をいただく）			
使用教科書 特に使用せず、必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 積極的にチームに参画する。そのためには、最低条件として欠席をしない。			

[授業科目名] 計数管理（会計・簿記）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高見 敬二
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション業界における生産、仕入れ、販売のシステムをより具体的に計数に落とし込み、アパレルメーカー運営を出来る基礎知識を身につける。			
授業の概要 各流通段階における計数での表現を理解し、アパレル業界で通用する基本知識を身につける。			
学生に対する評価の方法 課題レポートまたはテスト、出席、授業態度を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 アパレル業界における計数管理の必要性（MD、ブランドMG育成の為の） 第2回 生産システム ①原価計算、売価設定マニュアル 第3回 生産システム ②仕入、貿易実務、卸販売マニュアル 第4回 生産システム ③リテールマニュアル 第5回 アパレルビジネスの仕組 ①特性（定義と特性） 第6回 アパレルビジネスの仕組 ②動向（変遷） 第7回 アパレルビジネスの仕組 ③流通と価格 第8回 物流システム（ロジスティックマニュアル） 第9回 店頭調査（商品構成） 第10回 店頭調査（計数構成） 第11回 店頭計数管理（分析と計画） 第12回 店頭計数管理（売上） 第13回 店頭計数管理（経費） 第14回 店頭計数管理（効率） 第15回 まとめ、試験日			
使用教科書 アパレル営業入門			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
テキスタイルテスト		実習	安藤 文子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期・後期（集中）	選択（衣必）	
授業の到達目標及びテーマ ・製品のクレームとその解決法の研究 ・特殊な素材の扱い 資格を取得しない場合でも受講可能であるので、就職に備えて幅広い知識を得るためにも受講してほしい。			
授業の概要 1年次では繊維、糸、布について深く学んでいるので、この授業では製品化された試料性能の試験法を学ぶ。その方法としては市場で販売されている衣料品を試買し、それらについてグループで実験、検討する。すでにクレーム品とされている品についてもグループでその原因の追究を行う。加えて、1年次で扱っていないTシャツなどのプリント、皮革に関しても実際にデザインを考えて作品を制作し、次いでその製品について種々の角度から扱いの注意事項を学んでいく。			
学生に対する評価の方法 作品・レポート 80% 受講への参画態度 20% 正規の時間割以外でも集中講義で補講をするので注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 関連資料の解説 第2回 顔料プリントに関する実習 シルクスクリーン手法解説 第3回 シルクスクリーンによる作品制作 第4回 顔料プリントに関する種々の試験 第5回 テキスタイルトレンド調査 情報収集 第6回 テキスタイルトレンド マップ制作 第7回 テキスタイルトレンド調査のまとめ 第8回 2、3、4回の仕上げとレポート 第9回 麻素材によるテキスタイル研究 第10回 羊毛素材によるテキスタイル研究 第11回 綿素材によるテキスタイル研究 第12回 クレーム事例研究 講義 第13回 クレーム品の調査と検討 第14回 上記について実験実習により調査 第15回 クレーム品に関し、各自でレポートまとめ 第16回 皮革に関する実験および作品制作 第17回 皮革材料の染色法 第18回 皮革製品の仕立てと仕上げ剤について 第19～22回 特殊機械による試験方法 第23～26回 2年次学外研修（工場見学・他） 第27～30回 3年次学外研修（工場見学・他）			
使用教科書 1年次に使用した素材テスト、担当者作成資料			
自己学習の内容等アドバイス 2年後期からは集中講義で行うので、3年後期または4年前期まで学びを積み重ねること。学外研修に関しては、事前レポートを課すので必ず提出すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
コンピュータファッション企画		演習	杉本 典子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 企画提案マップは、自身で資料を集め、イメージする商品展開を解りやすくマップで表現できる様にする。 企画仕様書は、具体的に素材や付属の見本帳を見て、規格や性質を学びながら、解りやすく、正確な仕様書を作成できる事を目標とする			
授業の概要 日々変化してゆくアパレル産業において、コンピューターの使用が不可欠なものとなっており、コンピューターを十分使いこなす事が重要となっている。 そこで、コンピューター（Adobe Illustrator）を使用し企画書を作成する上で必要な、素材、付属、縫製などに関する知識を身につけて、企画提案マップ及び企画書を的確に作成できる能力を養う。			
学生に対する評価の方法 課題提出（各授業の理解度）（70%） 授業への取り組み（30%） 上記を総合的に評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 コンピュータファッション企画を学ぶにあたって 授業の目的と講義内容の概要 授業日程の説明 第2回 企画提案マップ作成 マップの必要性を認識し、コンセプトを設定しデザインマップの構成を考える トレンド情報を分析、整理し資料収集を行い、イメージマップ上で表現できるよう学習する 第3. 4回 コンセプト、トレンドを考慮した上で、 習得した知識を基にそれらを総合させた企画提案マップを完成させる（課題提出） 第5. 6回 ハンガーイラスト作成 デザインしたものをパタンナーや生産者に伝える為のハンガーイラストを作成する 第7. 8. 9. 10回 企画仕様書 カットソー トップス1 Tシャツ トレーナー を生産する際に必要なミシンの種類、縫製始末等を理解し コンピューターを使用し企画指示書を作成する（課題提出） 第11. 12. 13. 14回 企画仕様書 カットソー トップス2 カーディガン パーカー を生産する際に必要なミシンの種類、及び付属を理解し コンピューターを使用し企画指示書を作成する（課題提出） 第15回 まとめ			
使用教科書 プリントを随時配布する			
自己学習の内容等アドバイス Adobe Illustrator を使用するのので、基本を復習しておくこと			

[授業科目名] バーチャル・ファッション ・コーディネート演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中西 富美子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 企画に必須なソフトであり、出来るだけ大勢の学生に取っても欲しい。			
授業の概要 90分授業で作品を作るため準備を良くした。下絵。昨年の学生作品等参考に成る物を多数用意。パソコンは好き嫌いがあるが今はそういう事は言っていない時代だ。パソコンを面倒がる学生を無くしたい。			
学生に対する評価の方法 作品は大抵2回で完成する。フォトショップも慣れて使う。作品は印刷して講評・採点する			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 色彩の和名を理解する。 各自の考える構図をデザインする。 和風の手毬や折り鶴等を下絵に用意しておく。基礎は過年度の3年目の学生も見せる。時間を要する。 第2回 続き 提出 第3回・第4回 カーブ線を描く練習として『白雪姫』を予め下絵で用意。好みに色を入れストーリーを考え画面を構成する。幼児の柔らかい体のカーブを描く練習に成る 第5回・第6回・第7回 イラストレーターソフトでオリジナルの模様作りをマスター。彩色し デザイン的に各自で時代考証をして画面を作り文字も考えて提出。 第8回・第9回 フォトショップソフトを用いて 来年のカレンダーを制作する。写真又は描いた服を景色の中に入れカレンダーを作る。2個のソフトを自由に操る。 第10回・第11回 イラストレーターで描いた物を縮小拡大してレイアウトの練習。 第12回～第14回 時期は春であるが 楽しいクリスマスの画面を自由に作り上げる。 用意したイラストは難易度が高い。模様を作って描く。子供や時計、電灯等の下絵を好みに入れ込む。印刷は特殊のコピー機で A3 に拡大する。紙を剥がせば布地。多量に印刷すればオリジナルドレスの布に成る事を知る。 第15回 此处で自作の柄でバーチャル画面を駆使して 靴やアクセサリをつける 用意した景色にはめ込み自由に大小や方向を変える体験をする。			
使用教科書 特になし。予めプリントして配布			
自己学習の内容等アドバイス 基礎的に使うパソコンなので、学生割引制度もあり若い時に自宅にも設置することが望ましい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ユニバーサルデザイン		講義	内田 和邦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
ユニバーサルの思想の具現化をテーマに、生活者が様々な製品に期待する機能とその効果を明らかにし、ユニバーサルデザインおよびユニバーサルファッションが成立するための要件となる、より多くの状況への適合、あるいは、より個別のニーズに適合するためのしくみとデザインを考案することを目標とする。			
授業の概要			
<p>少子高齢化、バリアフリー社会の到来に対応して、ユニバーサルデザインへの関心が高まっている。住宅、家電、情報機器等の産業分野では、時代の要請を受けて様々な商品開発が進められているが、衣料を中心としたファッション分野においては、そのパーソナルな特性ゆえに開発が容易でなく、対応の遅れが懸念される。</p> <p>本講義ではユニバーサルの理念を理解し、具体的なデザイン検証を通じて持続可能なデザインの方向性を探るとともに、ファッションデザインへの応用を検討する。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>受講態度 50%</p> <p>レポート、プレゼンテーション 50%</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 ユニバーサルデザインとは何か（ユニバーサルデザインの概念および七原則）			
第2回 何が問題か（デザインの限界、あるいは個々の能力の限界によって行動が制約を受けている実態を認識し、現在の社会生活において何が問題であるかを明らかにする）			
第3回 誰の問題か（高齢化は社会にどのような影響を及ぼすのか。バリアフリー社会到来の意味は。誰にとって深刻な問題であり、また、誰がその当事者となりうるのかといった点について考察する）			
第4回 何をなすべきか（福祉、環境、教育、法制、国際協力といった観点から、ユニバーサルデザイン導入のための道筋を探る）			
第5回 デザインの検証①（公共領域における環境デザインのあり方を検討する）			
第6回 デザインの検証②（個人・家族の生活領域における製品デザインのあり方を検討する）			
第7回 ユニバーサルデザインの対象と基本的な達成手法（対象を「利用者」と「時間的持続性」の関わりから分類し、対象の使用目的に適したデザイン手法を理解する）			
第8回 ユニバーサルデザインの提案（レポート提出）			
第9回 ファッションにおけるユニバーサルデザイン①（国内外のファッション環境を比較検討する）			
第10回 ファッションにおけるユニバーサルデザイン②（ユニバーサルファッションの概念を理解し、分類、位置付けを確認の上、その市場規模を推察する）			
第11回 ユニバーサルファッションへのアプローチ①（国内外におけるユニバーサルファッションの開発事例と、デザイナーズコレクションに見られるユニバーサルの要素を解説する）			
第12回 ユニバーサルファッションへのアプローチ②（事例をもとに、「パーソナル性」と「共用性」の関係について考察する）			
第13回 ユニバーサルファッションへのアプローチ③（ユニバーサルファッションの定義について考察する）			
第14回 ユニバーサルファッションの提案①（資料作成またはサンプル製作）			
第15回 ユニバーサルファッションの提案②（プレゼンテーション）			
使用教科書			
ユニバーサルファッション協会編・著 「ユニバーサルファッション宣言 Part II」 中央公論新社 随時資料配布			
自己学習の内容等アドバイス			
ユニバーサルの原則に照らして、身の回りの製品を診断してみる。 ファッションに対する不満調査を任意に行い、ユーザーの要求を理解するよう心がける。			

[授業科目名] コンピュータパターンメイキング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 金森 久宙・早坂 安希子
[単位数] 2	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「アパレル業界に通用する人材の育成」を目指すために、CADを実践的に使用できる知識と技術を習得する。			
授業の概要 マスターパターンからデザインバリエーションをつくる事を目的とし、様々なパターン展開をコンピュータ支援により行う。アパレル生産に必要とされているパターンメイキング・グレーディング・マーキングを、演習しながら習得する。アパレル生産におけるCADの適用分野を理解することを目的とする			
学生に対する評価の方法 ① 日常の出席状況・受講態度 ② 作成データ ③ パターン出力、データ提出 以上の総合 (①40%+②30%+③30%) なお、再評価は実施しないので、特に出欠席・提出物には注意すること			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 パターンマジック基本操作の習得 (授業の概要、基本操作や用語の説明) 第2回 " (画面構成、図形編集の基本操作) 第3回 " (線の種類、点モードの種類等) 第4回 " (曲線作成、ノブ・ノード調節) 第5回 " (計測方法等) 第6回 " (カット、端点移動) 第7回 " (原型より展開、回転) 第8回 " (ダーツ展開、合わせの種類) 第9回 スカート原型の分断編集 (スカート原型からのデザインアレンジ、セミフレアースカート) 第10回 " (パーツ化、縫代付の基本説明) 第11回 " (パーツ管理シート、出力) 第12回 " (ヨーク切替スカート) 第13回 " (各種デザイン、プリーツ・ギャザー・ピンタック等) 第14回 " (各自オリジナルスカートパターンを作図) 第15回 " (プロッターで出力、作品データ提出) 第16回 シルエット原型からのパターンアレンジ (ブラウスのデザインアレンジ) 第17回 " (プロダクトパターンの作成)			

- 第18回 トレースマジック基本操作の習得 (スキャナーを利用)
- 第19回 マーキングマジック基本操作の習得 (マーキングデータの作成)
- 第20回 // (マーキング、縮小マーカー提出)
- 第21回 // (柄合せ説明)
- 第22回 // (柄印入力)
- 第23回 // (柄、芯地マーキング、縮小マーカー提出)
- 第24回 グレーディングマジックの基本操作の習得 (ルール付け説明)
- 第25回 // (基本ブラウス、ルール付け)
- 第26回 // (対象プランニング、点追加等)
- 第27回 // (応用デザイン①)
- 第28回 // (応用デザイン②)
- 第29回 // (課題パターングレーディング)
- 第30回 // (データ提出、まとめ)

使用教科書

配布するテキストを使用

自己学習の内容等アドバイス

専用ソフトを使用するため、予習をしておく事は難しいが、パターンメイキングの知識を復習しておくのが望ましい。

[授業科目名] 創作テキスタイル		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 杉浦 晶子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッションにおける最も重要な要素であるテキスタイルを思い通りに制作、または提案するために、柔軟な発想をもって面白みのあるデザインや素材、技法を工夫し、小作品を制作する。 発想から素材の調達、制作、完成までの全ての工程を各自でする。			
授業の概要 トビー式コンピューター織機と同じ構造であるレバー式卓上機を使用する。 平織り、綾織りの他、二重織り、ワッフル織りなど多綜絨組織に挑戦することもできる。 服地、バッグ地、ショール、など明確な使用目的をもったテキスタイルを制作する。 テキスタイルコンテストに応募するための制作でもよい。			
学生に対する評価の方法 制作作品80%、レポート10%、授業態度10% 作品未提出の場合、途中経過も評価しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 卓上機のできる織物組織（平織り、綾織り、ワッフル織り、昼夜織り、二重織り等） 発想の具体化・アイデアスケッチ 技法、素材の吟味 第2回 織り計画作成 購入するたて糸を計算 第3・4回 実際に用意した素材で織り計画を完成 たて糸の製経 第5回 筈通し 第6回 綜絨通し 第7回 巻き取り 第8回 織り付け、試織 第9～13回 織り 第14回 仕上げ 第15回 講評会 レポート・作品提出			
使用教科書 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 第3回目までに必ず材料を準備すること。材料を忘れて実習できない日は欠席とする。			

[授業科目名] 染色加工学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日下部 信幸
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 色はファッションに欠かすことのできない重要なものである。ファッション素材としてのテキスタイルの色は染色によって付与される。当授業では、染色加工に関する様々な知識を習得することを目標にし、そのために染色加工の概念から具体的な染色加工の方法と内容をテーマとして取り上げ、「染色加工演習」の授業に役立つようにする。			
授業の概要 繊維、糸、布、繊維製品の染色加工はファッション製品に付加価値や感性などを高めるために行われている。ここでは、「なぜ染まるか」、「染まる繊維と染まらない繊維があるのはなぜか」、「助剤や媒染剤によってなぜ濃く染まって色が変化するか」、「染色方法によってどう変わるか」などの学習を通して、染色加工に関する内容を学習するとともに、染色によるもの作りの基礎を養う。			
学生に対する評価の方法 試験（50％）、毎回行う質問への回答（25％）、授業態度（25％）とする。授業態度は4ない態度（遅刻しない・おしゃべりしない・居眠りしない・プラス携帯見ない）と、4する態度（質問する・討議する・発表する・プラス予習復習する）になるようにしよう。なお、本授業は再評価を行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 染色加工学とは：テキスタイルと色と染めの関係 第2回 精練と漂白：生成り布を白くして染まりやすくするには 第3回 染料の種類と歴史：天然染料の発見から合成染料の発明 第4回 染色を理解するための有機化学の基礎（1） 第5回 染色を理解するための有機化学の基礎（2） 第6回 染料の構造と性質：各種天然染料と合成染料の特徴 第7回 なぜ染料は繊維に付着するか：染料と繊維の分子レベルの深い関係 第8回 染色性に及ぼす染色助剤と媒染剤の効果 第9回 染色方法と技法：ばら毛染めから糸染め、反染め、浸染と捺染、手工芸的染色方法と工業的染色方法 第10回 染色堅ろう性：耐光性、耐洗濯性、耐汗性、耐摩擦性等 第11回 日本及び世界の伝統的染織品 第12回 繊維、糸、布の性能改善のための加工：一般的な加工と特殊な加工 第13回 染色加工と環境問題 第14回 試験 第15回 まとめ			
使用教科書 「衣生活のもの作りと科学実験」（家政教育社）			
自己学習の内容等アドバイス ファッションにもっとも重要な色と染色の関係に注目しよう。「染色加工演習」の授業で行う染色によるもの作りに役立てよう。			

[授業科目名] 染色加工演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 日下部 信幸
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「染色加工学」を学び、それを演習（実験実習）により染色加工の体験を通して知識と理解を深め、ファッションに応用できるようにすることを目標とする。具体的には、天然染料と合成染料を用いて、手工芸的染色方法によってもの作りを行い、創造的なデザインをファッション素材に活かせるようにテーマを設定している。			
授業の概要 繊維と染料の関係を理解し、身近にある材料を各種の方法でテキスタイルに染色加工を施し、それらによるもの作りを行うとともに、新しいファッション素材を生み出す工夫を考え、テキスタイルやファッションの商品企画等に活かせるようにする。			
学生に対する評価の方法 毎回行うテーマの実施レポート（40%）、制作品（30%）、授業態度（30%）とする。特に、レポートは考察の内容、制作品は創意工夫と完成度、授業態度の3ない（遅刻しない・無駄話しない・携帯見ない）態度と3する（質問する・討議する・発表する）態度を評価する。なお、本授業は再評価を行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 染色加工演習の内容説明と演習（実験実習）の心得 第2回 天然染料の染着性を調べる：各種繊維布を染まりやすい繊維と染まりにくい繊維に見分ける。天然染料で羊毛トップを染める。 第3回 合成染料の染着性を調べる：染料の種類と染まる繊維との関係を知る。酸性染料で羊毛トップを染める。 第4回 天然染料と合成染料の染色堅牢性（耐光性、耐洗濯性、耐アイロン性等）を調べる。 第5回 染色羊毛トップからホームスパンを作る（1）：染色羊毛トップをブレンドして、独楽で糸を紡ぐ。 第6回 染色羊毛トップからホームスパンを作る（2）：織り柄をデザインして小物作品を織る。（作品1） 第7回 染色羊毛トップからフェルト作品を作る：平面作品または立体作品。（作品2） 第8回 豆乳を使った濃淡染め：どんな布がよいか、どんな染料が使えるか。（作品3） 第9回 マーセル化加工による濃淡染め：未シルケット加工布とシルケット加工布との違い。（作品4） 第10回 季節の花と葉で染める（1）：不思議な大錦鶏菊と黄花コスモスの花染め：酸とアルカリによる色変化を応用する（作品5） 季節の花と葉で染める（2）：藍の生葉のたたき染め、摺り染め。（作品6） 第11回 藍の乾燥葉でジャパンプルーに染める（1）：防染方法を工夫する（絞り、プラスチック容器、合成のり等） 第12回 藍の乾燥葉でジャパンプルーに染める（2）：好みの濃度（瓶のぞきから藍色まで）に染める。（作品7） 第13回 台所用漂白剤で染色布の脱色：無地染めして脱色。（作品8）、作品3~7の染色作品を脱色で工夫する。 第14回 作品（1~8）の完成：縫合、刺繍、接着、コーティング、アイロン等。 第15回 レポートと作品のまとめ、提出。			
使用教科書 「衣生活のもの作りと科学実験」（家政教育社）			
自己学習の内容等アドバイス 授業に積極的に参加し、「百聞・百見は一験・一触にしかず」を染色によるもの作りで体験しよう。			

[授業科目名] マーチャンダイジング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 下川 美都子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッションを志す学生にとって必要な「マーチャンダイジング」の基礎的知識および考え方を習得することをテーマとし、それに基づき自分でマーチャンダイジングを組み立てられる力をつけることを到達目標とする。			
授業の概要 日本のファッションビジネスが置かれている現状と課題、マーチャンダイジングの定義、アパレル、小売り、SPA のマーチャンダイジング、ファッションビジネスに欠かせない基礎用語や基礎知識や計数知識の講義を行う。リサーチやマーチャンダイジング立案の小課題に取り組むことで、マーチャンダイジングを組み立てる力を養う			
学生に対する評価の方法 平常の受講態度（30%）、授業内で出される小課題（20%）、最終に実施する試験（50%）などで総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 マーチャンダイジングの定義、ファッションビジネスの現状とマーチャンダイジング 第2回 ファッションビジネスの基礎用語 ① 第3回 ファッションビジネスの基礎用語 ② 第4回 ファッションビジネスの基礎用語 ③ 第5回 ブランド分類・テイスト分類（リサーチ課題） 第6回 アパレル、小売、SPA のマーチャンダイジング 第7回 マーチャンダイジングの基礎知識 ①シーズン区分、年間MD カレンダー、売場区分、商品構成 第8回 マーチャンダイジングの基礎知識 ②情報分析手法、リサーチ手法 第9回 インターネットとマーチャンダイジング 第10回 マーチャンダイジングの立案（商品企画開発小課題） 第11回 マーチャンダイジングの立案（SPA、小売企画小課題） 第12回 ファッションビジネスの計数知識 ① 第13回 ファッションビジネスの計数知識 ② 第14回 ファッションビジネスの計数知識 ③ 第15回 試験日			
使用教科書 「ファッションビジネス（Ⅱ）」【(財)日本ファッション教育振興協会】、ファッション雑誌 参考図書：「実践ファッションマーケティング」（下川 美知瑠：日本能率協会マネジメントセンター）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味や企業のホームページなどを辞書やインターネットで事前に調べておくこと。			

[授業科目名] プレゼンテーション		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山縣 亮介
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ プレゼンテーションの本質が、大人数参列の礼儀正しく挙行されるセレモニーではなく、日常的に顧客ニーズや満足・不満足の状態を嗅ぎ分け、タイミング良くそれらに対応していく日常的コミュニケーションであることの認識を到達目標とする。			
授業の概要 プレゼンテーションに対する基礎知識を学ぶ。目的、スケジュールの確認、情報収集や資料作成など、実習を通して学ぶ。さらに、フィードバックプレゼンテーションを行い、各自の改善点及び取り入れるべき点を探り、より良いプレゼンテーションへと展開させる。 また、代表的なプレゼンテーションツールである PowerPoint の基本的な操作方法を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (30%)、作品 (35%)、発表で総合的 (35%) に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 プレゼンテーション概論 第2回 プレゼンターの能力を構成する要素① (意識) 第3回 プレゼンターの能力を構成する要素② (知性) 第4回 プレゼンターの能力を構成する要素③ (姿勢) 第5回 プレゼンターの能力を構成する要素④ (技能/トーク偏) 第6回 プレゼンターの能力を構成する要素⑤ (技能/プレゼンテーション資料編) 第7回 PowerPoint の基本使用法 第8回 PowerPoint を利用した資料制作法 第9回 個人発表 第10回 プレゼンテーション評価シート・発表の反省 第11回 セルフ・プレゼンテーション準備 『他人から見た自分の認識』①モノの知覚 ②複眼 ③アンケート 第12回 アンケート結果に基づく分析及び PowerPoint を利用した資料制作 第13回 PowerPoint を利用した資料制作 第14回 セルフ・プレゼンテーション① (前半) 第15回 セルフ・プレゼンテーション② (後半)			
使用教科書 特になし。適宜資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業中にメモした専門用語の意味などを調べておくこと。			

[授業科目名] 広告デザイン		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岡本 洋介
[単位数] 2	[開講期] 3 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ グラフィックデザイン媒体の大半は印刷により完成品となる。今日ではそれが DTP システムで進められている。デザインから印刷まで一貫してデジタルワークスで進める DTP を各プロセスごとに理解し、DTP の流れを把握する。			
授業の概要 DTP 制作現場において頻繁に制作されるデータ制作方法を検証し、ワークフローについての理解を深める。グラフィックソフトによる実例も制作する。			
学生に対する評価の方法 授業態度、提出する作品等で総合的に実施する。なお、この授業は再評価を実施しない。 レポート提出・操作解説の記録・製作過程のデータから評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1 回 DTP の基礎知識 ・ DTP の登場 ・ DTP の進化 ・ DTP のメリット ・ DTP に必要なソフトウェアとハードウェア 2 回 DTP (Macintosh) 環境の現在とこれから ・ OS の特徴と現状 ・ 利用できるフォント形式 ・ CPU のしくみと役割 3 回 コンピュータの基本単位 ・ 使用される各単位の解説 4 回 OS の機能と役割 ・ OS の機能と解説 ・ OS の基本的な役割 5 回 カラーマネジメント ・ カラーマネジメントの仕組み ・ カラーマネジメントの要素 6 回 印刷基準カラー ・ Japan Color の解説 ・ 雑誌広告基準カラーの考え方とワークフロー			

- 7回 デジタル画像
- ・ベクトル画像とビットマップ画像
 - ・ 描画のしくみと代表的アプリケーション
 - ・印刷に適した画像データ
- 8回 画素数と解像度
- ・ビットマップ画像の基礎知識
 - ・網点及び解像度と網点の関係
 - ・印刷に必要な解像度
- 9回 ベクトル画像の基礎知識
- ・ベクトル画像の基礎知識
 - ・主な用途
- 10回 フォントの解説
- ・フォント
 - ・組版及び書体
 - ・フォントの分類と名称
- 11回 フォントの解説
- ・表現方法の違いによる分類
 - ・書体のウェイトとファミリー
- 12回 日本語の組版
- ・基礎知識
 - ・禁則処理
 - ・ルビの組み方
- 13回 プリプレスと校正
- ・データを製版フィルムに出力
 - ・製版フィルムから刷版へ
 - ・CTPの解説
 - ・色校正
- 14回 色校正
- ・色校正において使用される記入例
- 15回 印刷
- ・各種印刷方法の基礎知識

使用教科書

自己学習の内容等アドバイス

ソフトウェアおよびデータ作成に関する操作方法は各自専用のノートを用意し、必ずメモをとり操作の習得をより確かなものにする。制作したデータは記録メディアに保存する習慣をつける。

[授業科目名] スタイリスト演習 (含メイク・ヘアメイク)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 千葉 明美・梶田 京子 石川 万名見
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション関連の仕事のひとつとして、日本ではスタイリストの役割は重要なものとなる。 スタイリストの仕事内容の理解と、スタイリストとして必要とされる感性や技術、また情報収集・解析方法などを修得する。事例に基づいた実習を取り入れ、スタイリストとして実際に現場で必要とされる人材の育成を到達目標とする。			
授業の概要 スタイリストやヘア・メイクアーティストとして活躍していらっしゃる講師の方々から直接仕事内容やこれまでのご経験等について演習を通して学ぶ。 また、実際にファッションショーのスタイリストとして実践できる場を設け、実体験するところにより、さらにスタイリストの仕事を理解する。			
学生に対する評価の方法 作品・レポートの提出（80%）、授業への参画態度（10%）、課題の提出状況（10%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） ≪スタイリスト≫ 第1回 スタイリストとは ・スタイリストになるための知識 ・スタイリストに必要な技術 第2回 仕事の事例紹介 第3回 コーディネイトテクニックについて 第4回 コーディネイト演習 第5回 コーディネイト演習（パネル製作） 第6回 プレゼンテーション ≪ヘア・メイク≫ 第7回 ヘア・メイクの仕事 第8回 メイクの基礎知識 第9回 ヘア・メイク実習①（日常用メイク） 第10回 " ②（舞台用メイク） 第11回 " ③ 第12回 " ④ ≪その他≫ 第13回 ファッションショーのスタイリストについて 第14回 " 第15回 ファッションショースタイリスト実習			
使用教科書 各担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 2年生までに学んだ知識や技術を活かした職種であり、演習としてその技術が問われることもあるため、復習を欠かさないこと。 また、ファッションショーのスタイリスト実習も行うため、授業内容の理解に努めること。			

[授業科目名] 写真・映像演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 西宮 正明・安達 洋次郎 他
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッションと写真とは全く切り離すことが出来ない関係である。かつて N.Y. のハーパース・バザー、ヴォーグ誌の主演は写真家アーヴィング・ペンやリチャード・アヴェドンであった。 ファッション業界で働く夢を持つディレクター志向の学生に写真を通してファッションの足跡を見せながら、自らの作品をファッション写真に 仕上げるテクノロジーを短期間に習得することを目標とする。			
授業の概要 マイフィーリングではフィルムカメラ(ニコン FM10)を使用し、個々が最も関心の高い事物を撮影し、A-3 縦上に写真で構成する演習。そしてマイ ファッションスピリットでは今までに制作したファッション作品を実際にモデルに着させて、スタジオにてファッション写真の撮影演習を行う。(一眼レフデジタルカメラ使用) 出来上がった写真をセクションしマイフィーリングと同様に写真構成して仕上げる。			
学生に対する評価の方法 課題制作であるマイ フィーリング (40%)、マイ ファッションスピリット(40%) 授業への参画態度 (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 写真映像を学ぶにあたって (オリエンテーション、演習スケジュール) 第2回 ファッションと写真の関係、アートの中でのファッション 第3回 歴史的なファッション。一眼レフカメラ ニコン FM10 の使用説明。 マイフィーリング その1 (校内撮影) 第4回 マイフィーリング その2 (学外撮影) 第5回 西宮, 安達 の写真論 学外撮影フィルム回収 第6回 小山のデザイン論 (レイアウトについて) マイフィーリング A-3 レイアウト演習 その1 第7回 マイフィーリング A-3 レイアウト演習 その2 第8回 マイフィーリング A-3 レイアウト演習 その3 第9回 マイフィーリング講評 第10回 スタジオ撮影、デジタルカメラの使い方 マイ・ファッションスピリット 撮影その1 第11回 マイ・ファッションスピリット 撮影その2 第12回 マイ・ファッションスピリット 撮影その3 プリントアウト 第13回 マイ・ファッションスピリット レイアウト その1 第14回 マイ・ファッションスピリット レイアウト その2 第15回 まとめ、マイ・ファッションスピリット講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 写真を学ぶにあたり、日常生活でつねに光を感じながら生活する。 大学の図書館にある著名な写真集特にファッションフォトには目を通しておく事。			

[授業科目名] 舞台芸術・衣装①		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 都築 正道
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ①+②を受講のこと
授業の到達目標及びテーマ テーマは「オペラの衣装」とする。演劇・バレエ・ダンス・オペラ・ミュージカルなどなど、多くの観衆を一堂に集めて、ステージの上で演じられるパフォーマンスのことを「舞台芸術」(Performing arts)という。そのとき、「衣装」は極めて重要な役割を果たす。授業で取り上げるオペラの総合芸術としての価値を学びながら、「時代考証」「階級制度」「心理的表現」「登場人物の役割」「演技の機動性」「着脱の機能性」などを満足させる「衣装」を考案することをその到達目標とする。			
授業の概要 この授業では、舞台衣装の創作に直接結びつく、オペラを映像で観ます。舞台芸術であるオペラをDVDの鮮明な映像で鑑賞しながら、歌・管弦楽・演奏・オペラハウス・台詞・演技・演出・演劇・文学・美術・建築・歴史・哲学・社会史・宗教・心理学・自然科学にいたるまで、オペラに関するありとあらゆる人文諸科学を詳細に考察しながら、「舞台芸術の魅力」に迫る。舞台芸術は、ヨーロッパ文化の花である。そこには、ヨーロッパの思想と歴史のすべてがある。舞台芸術こそ、楽しく学べる格好の「ヨーロッパ文化入門」である。舞台芸術を見れば、ヨーロッパの音楽・文学・美術・演劇のなんであるかがすぐに理解できる。この講座では、オペラの代表的な名作の詳しい解説を加えながら、それぞれの舞台におけるそれぞれのシーンにおいて、舞台芸術の機構がどのような役割をはたしているか、具体的に見ていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）と各授業毎の内容についての4回のレポート（80%）により総合的に評価する。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 舞台芸術論概説「舞台芸術とはなにか」。 第2回 滑稽な歌劇《フィガロの結婚》の滑稽さ。（レポート提出） 第3回 歌劇《椿姫》にみる「悲劇の構造」。 第4回 歌劇における「衣装と図像学」。（レポート提出） 第5回 歌劇《アイーダ》にみる「科学の進歩と芸術の発展」。 第6回 権力と愛の抗争のドラマについて。（レポート提出） 第7回 歌劇《トゥーランドット》にみる「悲劇・喜劇の構造」。 第8回 舞台芸術における感動の誕生。（レポート提出）			
使用教科書 『あくびなしの音楽講座：フィガロの結婚』 都築正道著 愛知劇場企画刊(2010年9月発行)2000円			
自己学習の内容等アドバイス 1 授業でとりあげたオペラを映像で全曲観ておくこと。 2 オペラの原作を読んでおくこと。 3 テレビや劇場で、その他のオペラにも親しんでおくこと。 4 教科書で予習・復習をして、授業中に、積極的に意見を述べたり、質問すること。			

[授業科目名] 舞台芸術・衣装②		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 下斗米 雪子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ①+②を受講のこと
授業の到達目標及びテーマ オペラは音楽を中心に、あらゆる芸術のジャンルを網羅してつくられる総合芸術といわれている。この科目では、その中の「衣装」にスポットを当て、実践的な学習を行なう。第一に、舞台衣装の成立や役割といった基本的な知識を学び、次に実際に衣装をデザインするのに当たっての必要な知識（時代考証や身分考証、地域の考証、そしてカッティング、ソーイングなどとともに、照明や装置との関係など）を学び、実際の舞台のバックステージ見学なども含め、将来舞台衣装デザイナーまたはスタッフを目指す人達にとって必要な知識を会得してもらうことを目標とする。			
授業の概要 実際に、4演目のオペラの内容に基づいて、各々のキャスト・合唱・その他の出演者の衣装をデザインして衣裳香盤を作成する。			
学生に対する評価の方法 劇場内での作業を中心としたプロフェッショナル育成を目的とした科目である。時間厳守、受講態度、礼儀などの評価を重視する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：舞台衣装全般 ・舞台衣装の持つ役割、意味、効果、その他 第2回：衣裳香盤とデザインを作ってみる。 ・ソリストと合唱の関係。装置、照明と衣装の関係について学習する。 第3回：ホールバックステージ見学 ・ホールの都合で、順番が変更になる可能性もある。 第4回：バックステージでの作業・専門用語、その他。実践に必要なマナー、常識などを学習する。			
使用教科書 担当者制作資料			
自己学習の内容等アドバイス 自主的に課題の作品はもとより、関連作品（同じ作曲者の他の作品）を多く観ておく。またその原作を読んでおくこと。			

[授業科目名] ものづくり講座Ⅲ（彫金）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 佐野 敏朗 他
[単位数] 1	[開講期] 3年次（集中）	[必修・選択] 選択	備考 デザイン・ビジネスコースのみ
授業の到達目標及びテーマ ファッションの一部として、装飾に欠かせないアクセサリ制作を学ぶ。 アクセサリを制作するための様々な知識・技術を、講義および実習を通して修得することを到達目標とする。			
授業の概要 彫金では、銀を取り扱うための基本知識と技術を修得し、シルバーアクセサリの制作方法、シルバーリングのデザイン方法等を学ぶ。 また、芸術的なアクセサリの制作を通してものづくりの楽しさや充実感を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度（10%）、作品課題（80%）、課題提出状況（10%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 彫金について 第2回 彫金基礎実習（平打ちリング制作） 第3回 彫金実習（平打ちリング制作） 第4回 彫金実習（すり出しリング制作） 第5回 彫金実習（すり出しリング制作） 第6回 彫金実習（すり出しリング制作） 第7回 彫金実習（すり出しリング制作） 第8回 彫金実習（丸線アクセサリ制作） 第9回 彫金実習（丸線アクセサリ制作） 第10回 彫金実習（丸線アクセサリ制作） 第11回 その他（アクセサリ制作） 第12回 その他（アクセサリ制作） 第13回 その他（アクセサリ制作） 第14回 その他（アクセサリ制作） 第15回 まとめ 講義			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 彫金に対する造詣を深めるための、復習および予習を行うこと。			

[授業科目名] 専門ゼミナール		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 文子
[単位数] 4	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション造形学科の4本柱であるデザイン・造形・テキスタイル・ビジネスのうちテキスタイル部門をより深く学ぶ。授業を通じて、将来、デザイン・ビジネスの両部門のいずれにも役立つようにしたい。			
授業の概要 内容はかなり広いものであるが、テキスタイルトレンド分析、染め、織、おもしろい素材の創作を中心とする。前期は、はじめて取り組む捺染技法や絞り染めを習得し、これまで学んだ知識とミックスさせながら基本的な内容を習得する。後期では、作品の制作または調査・研究レポートなど、一つのテーマについて研究する面白さを体感する。			
学生に対する評価の方法 作品、レポート (80%) 授業への取り組み姿勢 (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 「前期」 第 1 回 ガイダンス 直営ショップのためのTシャツデザイン 第 2 回 Tシャツ、エコバッグの染色 第 3 回 特殊染色実習① 第 4 回 特殊染色実習② 第 5 回 特殊染色実習③ 第 6、7 回 オリジナルテキスタイル制作 織、編、その他各自の好みで実習 第 8、9 回 同上 第 10 回 テキスタイル制作のプレゼンテーション 第 11～13 回 最近のテキスタイル傾向調査 第 14 回 テキスタイル傾向のまとめ 第 15 回 市場調査 消費者調査の手法について アンケート調査用紙の検討 「後期」 第 1 回 アンケートの実施と集計 第 2 回 同上 第 3 回 集計とプレゼンテーション資料制作 第 4、5 回 調査のまとめとプレゼンテーション資料作成 (発表は後日) 第 6、7 回 各自の選択分野の作品制作または調査内容、個別指導 第 8、9 回 作品制作または調査の実施 第 10、11 回 同上 第 12 回 第 1 回から第 5 回の完成分のプレゼンテーション 第 13 回 オリジナルプリントデザイン制作 第 14 回 大型染色機によるプリント作品制作 第 15 回 まとめ			
使用教科書 担当者作成資料			
自己学習の内容等アドバイス 次週に行う内容の解説をするので、関連事項について学んでおくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
専門ゼミナール		演習	内田 和邦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
4	3年次	必修	
授業の到達目標及びテーマ デザインイノベーションをテーマに、次代のファッション環境についてブランディングの観点からアプローチする。コレクションは概念を視覚化するためのプレゼンテーションツールと位置付け、他との差異や独創的な基準をアピールするための活動（ブランディング）に重点を置くことで、デザイン提案の基本となる仮説提示力を養うことを目標とする。			
授業の概要 ①理念とプロセス重視のデザイン開発事例を参考に、ファッション企画に応用可能な手法を抽出し検討する。 ②必要に応じて理念の創造的拡張を図りつつ、デザインプランの構築、及びその提示にいたるまでのプロセスと手法を研究していく。③構築したコンセプトに基づいてコレクションを制作し、複数のメディアを想定したプレゼンテーションを行う。 なお、本科履修にあたっては、3年次前期開講の「ユニバーサルデザイン」を履修していることが望ましい。			
学生に対する評価の方法 受講態度（企画に対する姿勢） 30% 企画の内容と制作作品の完成度による評価 70%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 デザイン理念の構築①（開発事例の検証） 第3回 デザイン理念の構築②（理念の統合あるいは拡大） 第4回 デザイン理念の構築③（ファッション企画への転換） 第5回 コンセプトメイク①（ブランド調査、市場性およびライフスタイルとの照合） 第6回 コンセプトメイク②（コンセプト立案、ゼミ内プレゼンテーション） 第7回 コンセプトメイク③（コンセプト決定） 第8・9回 コレクションプラン①（スタイリング計画立案） 第10・11回 コレクションプラン②（素材計画・カラーリング・スペックの検討） 第12・13回 コレクションプラン③（プロトタイプ製作） 第14回 コレクションのプレゼンテーション①（プレゼンテーション資料の作成） 第15回 コレクションのプレゼンテーション②（ゼミ外プレゼンテーション） 第16回 ブランディング①（チーム編成） 第17回 ブランディング②（ブランド価値の検討） 第18回 ブランディング③（バリエーションの提案） 第19回 ブランディング④（製作プロセスの決定、素材・付属の手配） 第20回 ブランディング⑤（モデルの選出、製作） 第21・22回 ブランディング⑥（製作、プロモーション企画立案） 第23・24回 ブランディング⑦（製作、ビデオ撮影のための演出プラン作成） 第25・26回 ブランディング⑧（製作、製品カタログのためのデザインプラン作成） 第27回 ブランディング⑨（撮影） 第28・29回 ブランディング⑩（編集、カタログ制作） 第30回 総評			
使用教科書 随時資料配布			
自己学習の内容等アドバイス プレゼンテーションとメディア研究のために、ステージ、展示会、ウェブサイトの映像等を常にチェックするよう心がける。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
専門ゼミナール		演習	木村 佳津子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
4	3年次	必修	
授業の到達目標及びテーマ 4年生の卒業研究を踏まえ、研究テーマの足がかりを探る。 また、デザイン画・ハンガーイラスト・パターンなど、将来役に立つ知識、実力を付けることを目標とする。			
授業の概要 各自テーマを決め、それに基づきデザインの発想からパターン作成、トワール組、実物制作を通し、その間のプロセス、方法を学ぶ。作品制作を通しパターンの重要性と縫製テクニックを修得する。			
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題・課題提出 (80%) などで総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回	授業内容の説明 計画表の作成	16回	裁断・縫製
第2回	資料集め (各自デザインテーマ、 方向性を決める)	17回	縫製
第3回	マップ・デザイン画・素材・ ハンガーイラスト	18回	縫製
第4回	パターン作成 ①	19回	縫製
第5回	パターン作成	20回	まとめ 完成 ②
第6回	トワールチェック (地の目、 シルエット、構造線の重要性の確認)	21回	パターン作成 ③
第7回	パターン完成	22回	パターン作成
第8回	裁断・縫製	23回	パターン作成
第9回	縫製	24回	トワールチェック
第10回	縫製	25回	パターン完成
第11回	まとめ 完成 ①	26回	裁断・縫製
第12回	パターン作成 ②	27回	縫製
第13回	パターン作成	28回	縫製
第14回	トワールチェック	29回	縫製・まとめ
第15回	パターン完成	30回	プレゼンテーション 作品、デザイン画、プロセスのまとめ
※ 前期に1作品は完成すること			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 事前に作成するための資料を集め、デザイン・素材などの確認を各自行うこと。			

[授業科目名] 専門ゼミナール		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 金森 久宙																																																												
[単位数] 4	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考																																																												
授業の到達目標及びテーマ ファッションは、「クリエイション」「テクノロジー」「マネジメント」それぞれの分野が連携・発展してこそ成り立つ。入学以来の基礎力をもとに、「マネジメント」の領域において「市場」「企業」「流通」「販売」を、それぞれがリンクする「実践」に触れることにより学習し、創造性、予測能力、行動力が求められるファッションビジネスへの知識を深めることを目標とする。																																																															
授業の概要 ファッションビジネスの世界に向けてのエントリーの場として、「nuas shop の運営・企画への参画」、「企業（小売り）に対するプレゼンテーション」を中心に、アパレル産業、市場の理解を進める。演習を進める為には、全員一人ひとりの積極性・自主性と提案能力が必要であり、また、実業界との関連も多いため、責任感、マナーも共に重要視する。																																																															
学生に対する評価の方法 主体的な計画性と行動、提案力と表現能力、積極性と責任感を中心に評価。 授業態度（自律とマナー）はその基本として厳正に評価する。																																																															
授業計画（回数ごとの内容等） <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>第1回</td><td>オリエンテーション</td> <td>第16回</td><td>後期オリエンテーション</td> </tr> <tr> <td>第2回</td><td>基礎演習</td> <td>第17回</td><td>共同研究（調査・分析）</td> </tr> <tr> <td>第3回</td><td>基礎演習</td> <td>第18回</td><td>共同研究（調査・分析）</td> </tr> <tr> <td>第4回</td><td>基礎演習</td> <td>第19回</td><td>共同研究（調査・分析）</td> </tr> <tr> <td>第5回</td><td>nuas shop 状況分析</td> <td>第20回</td><td>共同研究（調査・分析）</td> </tr> <tr> <td>第6回</td><td>nuas shop 対策・運用企画立案</td> <td>第21回</td><td>共同研究（調査・分析）</td> </tr> <tr> <td>第7回</td><td>nuas shop 対策・運用企画立案</td> <td>第22回</td><td>プレゼンテーション準備</td> </tr> <tr> <td>第8回</td><td>nuas shop 対策・運用企画立案</td> <td>第23回</td><td>プレゼンテーション準備</td> </tr> <tr> <td>第9回</td><td>nuas shop 対策実施企画まとめ</td> <td>第24回</td><td>プレゼンテーション準備</td> </tr> <tr> <td>第10回</td><td>nuas shop 対策実施企画書作成</td> <td>第25回</td><td>プレゼンテーション</td> </tr> <tr> <td>第11回</td><td>nuas shop 対策実施準備</td> <td>第26回</td><td>個人小論文作成</td> </tr> <tr> <td>第12回</td><td>nuas shop 対策実施準備</td> <td>第27回</td><td>個人小論文作成</td> </tr> <tr> <td>第13回</td><td>nuas shop 対策実施</td> <td>第28回</td><td>個人小論文作成</td> </tr> <tr> <td>第14回</td><td>nuas shop 対策反省会</td> <td>第29回</td><td>個人小論文発表</td> </tr> <tr> <td>第15回</td><td>前期まとめ</td> <td>第30回</td><td>後期まとめ</td> </tr> </table>				第1回	オリエンテーション	第16回	後期オリエンテーション	第2回	基礎演習	第17回	共同研究（調査・分析）	第3回	基礎演習	第18回	共同研究（調査・分析）	第4回	基礎演習	第19回	共同研究（調査・分析）	第5回	nuas shop 状況分析	第20回	共同研究（調査・分析）	第6回	nuas shop 対策・運用企画立案	第21回	共同研究（調査・分析）	第7回	nuas shop 対策・運用企画立案	第22回	プレゼンテーション準備	第8回	nuas shop 対策・運用企画立案	第23回	プレゼンテーション準備	第9回	nuas shop 対策実施企画まとめ	第24回	プレゼンテーション準備	第10回	nuas shop 対策実施企画書作成	第25回	プレゼンテーション	第11回	nuas shop 対策実施準備	第26回	個人小論文作成	第12回	nuas shop 対策実施準備	第27回	個人小論文作成	第13回	nuas shop 対策実施	第28回	個人小論文作成	第14回	nuas shop 対策反省会	第29回	個人小論文発表	第15回	前期まとめ	第30回	後期まとめ
第1回	オリエンテーション	第16回	後期オリエンテーション																																																												
第2回	基礎演習	第17回	共同研究（調査・分析）																																																												
第3回	基礎演習	第18回	共同研究（調査・分析）																																																												
第4回	基礎演習	第19回	共同研究（調査・分析）																																																												
第5回	nuas shop 状況分析	第20回	共同研究（調査・分析）																																																												
第6回	nuas shop 対策・運用企画立案	第21回	共同研究（調査・分析）																																																												
第7回	nuas shop 対策・運用企画立案	第22回	プレゼンテーション準備																																																												
第8回	nuas shop 対策・運用企画立案	第23回	プレゼンテーション準備																																																												
第9回	nuas shop 対策実施企画まとめ	第24回	プレゼンテーション準備																																																												
第10回	nuas shop 対策実施企画書作成	第25回	プレゼンテーション																																																												
第11回	nuas shop 対策実施準備	第26回	個人小論文作成																																																												
第12回	nuas shop 対策実施準備	第27回	個人小論文作成																																																												
第13回	nuas shop 対策実施	第28回	個人小論文作成																																																												
第14回	nuas shop 対策反省会	第29回	個人小論文発表																																																												
第15回	前期まとめ	第30回	後期まとめ																																																												
使用教科書 特になし。必要に応じて資料配布。																																																															
自己学習の内容等アドバイス 3年生の専門ゼミの期間に限らないが、意識して店頭を観察し、また業界紙によく目を通して、広くファッションビジネスを見つめる習慣をつけ、大きな仕組みや流れ・変化を捉える力を養うことが、次の各自のステップアップにつながる。																																																															

[授業科目名] 専門ゼミナール		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 下斗米 雪子
[単位数] 4	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 実践を通して衣裳を中心とした舞台スタッフを志す人を育てることを目的とする。衣裳製作そして本番バックステージの作業までを一貫して実習する形式をとる。 また、このゼミ期間中に行われる幾つかの実際の本公演に、希望者が参加できる機会を作り、生の劇場での仕事を体験し、理解することによりこの仕事の厳しさ、楽しさを感じてプロ意識に目覚めるよう育成していく。			
授業の概要 愛知県立芸術大学（オペラ研究試演会）とのコラボレーションによる、オペラ衣裳を実際に製作し、上演するところまでを担当する。			
学生に対する評価の方法 受講態度・表現方法・作品・レポート			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1・2回 : 演目の理解と衣裳デザイン、香盤表づくり 第3・4回 ↑ 第5・6回 第7・8回 ↓ 第9・10回 : 演出家との打合せ。出演者の採寸、その他 第11・12回 ↑ 第13・14回 ↓ 第15・16回 : デザインに基づいて、製作を開始 第17・18回 ↑ 第19・20回 第21・22回 第23・24回 第25・26回 第27・28回 第29・30回 ↓ 衣裳合せ、リハーサル、本番、その他 ※本番日程及び練習日程などにより、作業予定が若干変更となることがある。			
使用教科書 担当者制作資料			
自己学習の内容等アドバイス 自主的に多くの作品を観ること、またその原作を読んでおくこと。			

[授業科目名] 専門ゼミナール		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小川 明伸
[単位数] 4	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的なパターン構造が違うバッグを、型紙から裁断、手作業、そして縫製し作り上げる事で、基礎を習得し、その応用として、自分で描いたデザインをパターン化してレザーバッグを作りあげる事を最終目標とする。			
授業の概要 ひとつの作品を作るために必要な材料として、まず表地（裏地）素材の、レザー（本皮）、合成皮革、化成品、布地の知識を深める。次に付属品となる金具、ファスナー、テープ類、芯材料、その他資材関連についての種類、素材、メッキなどの基本的な事柄を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業への参画態度（40%） 作品を作る過程における段取りのよさ（30%） 前作で習得したものが次回作にどれだけ生かせるか（応用力）（20%） 作品の完成度（10%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 本ゼミにあたって 授業の進め方 準備の仕方 の説明 表地(裏地) レザー 合成皮革 化成品 布地 ファスナー 金具 付属品 テープ類 芯材料 資材関連 第2回～第3回 第1作目（課題作品） 主素材の決定 及び 型紙製作開始 第4回～第6回 第1作目 型紙製作 裁断 皮漉き 第7回～第9回 第1作目 型紙製作 裁断 皮漉き 第2作目型紙製作開始 第10回～第12回 第2作目 型紙製作 裁断 皮漉き 第13回～第14回 第1作目 手作業 縫製 完成 第15回～第16回 第3作目 型紙製作開始 第17回～第18回 第3作目 型紙製作 裁断 皮漉き 第2作目 手作業 縫製 第19回～第21回 第2作目 手作業 縫製 完成 オリジナル製作のための準備 全ての材料の決定 型紙製作開始 第22回～第23回 オリジナル型紙製作 第3作目 手作業 縫製 第24回～第25回 第3作目 手作業 縫製 完成 第26回～第27回 オリジナル 裁断 皮漉き 第28回～第29回 オリジナル 手作業 縫製 第30回 オリジナル 手作業 縫製 完成 ※ 作品制作の進み具合によりスケジュールの変更を行う場合がある。			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス パターン作製の手順を考える事 及び 製作する時の過程を把握しておく事			

[授業科目名] ファッションクリエイト演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 高間 由美子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ オリジナルデザインに適する素材、パターン技術、ソーイング技術等が一体となって初めて満足の得られる作品となる。これらの技術力を作品製作に応用できる能力を養うことを到達目標とする。また、オリジナルデザインを手掛ける楽しさをも味わって欲しい。			
授業の概要 各自のテーマに基づいたジャケットプランで、そのデザインやパターンにはどんな素材がふさわしく、また縫製技術はどの方法が適しているのかを考え、模索することで表現力が養われ技術力が増す。完成した作品の着装によって、反省点、改善点等を具体的にプレゼンテーションする。			
学生に対する評価の方法 作品評価 50%、授業態度 30%、まとめ 20%などを総合的に判断し評価する。 なお、履修に際してファッションクリエイト演習Ⅰの受講者が望ましい。			
授業計画（回数ごとの内容等） ジャケットの応用			
第1回	授業概要説明、オートクチュールとは	第17回	試着補正、パターン確認
第2回	衿の応用	第18回	ポケット作り
第3回	袖の応用	第19回	〃
第4回	デザインへの応用	第20回	衿作り
第5回	トワールでの裁断・組み立て	第21回	表身頃縫い合わせ
第6回	チェック・修正・まとめ	第22回	裏身頃
第7回	各自のテーマに基づくデザインを決定	第23回	袖作り
第8回	ポケットの部分縫い	第24回	衿つけ
第9回	〃	第25回	袖つけ
第10回	パターン作図、トレース	第26回	〃
第11回	裁断・組立・修正	第27回	仕上げ
第12回	パターン完成	第28回	ボタンホールとボタン付け
第13回	表地の裁断・芯張り	第29回	学習のまとめ（デザイン画・レポート等）
第14回	〃	第30回	着装プレゼンテーション
第15回	仮縫い		
第16回	〃		
使用教科書 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 計画的な作業ができるよう、製作での遅れは事前に取り戻しておくこと			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッションクリエイト演習Ⅲ		演習	水嶋 丸美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 被服構成の知識と技術の更なる向上と、実践的な知識の修得と技術力の修得を到達目標とする。 また、パターンメイキングの知識・技術の応用として、工業パターンを用いた、商品製作を行い、生産効率を考慮した縫製仕様の検討と、質のよい商品の製作技術と知識の修得を目標とする。			
授業の概要 アパレル企業の特徴のうち、企画・生産の分野に関する知識・技術を修得することを目的とし、学科のアンテナショップである「nuas fashion shop」の顧客のニーズに対応した商品企画と、販売可能な商品製作を目標に演習を行う。 授業では、商品企画から縫製仕様の検討、商品の生産、検品、納品までを演習を通じて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 ①製作商品の仕上がり及び納品点数 [60%] ②商品企画・パターン等の課題内容・提出状況 [30%] ③授業への取り組み姿勢 [10%] 以上、①～③を総合的に判断し評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 アパレル企業の企画・生産について 商品企画（ブランド・コンセプト・デザイン等） 第2回 商品企画プレゼンテーション 商品企画の検討 第3回 サンプルパターンの作成 第4回 トワルサンプルの作成 第5回 トワルサンプルの検討・点検 第6回 工業用パターンの作成 第7回 仕様書作成 第8回 商品生産（裁断） 第9回 商品生産（裁断・縫製準備） 第10回 商品生産（縫製準備） 第11回 商品生産（縫製） 第12回 商品生産（縫製） 第13回 商品生産（縫製） 第14回 検品 第15回 納品準備			
使用教科書 中屋典子／三吉満智子監修 「服装造形学 技術編Ⅰ」 文化出版局 中屋典子／三吉満智子監修 「服装造形学 技術編Ⅱ」 文化出版局 【参考図書】 文化服装学院編 文化ファッション大系 アパレル生産講座⑤「工業パターンメイキング」文化出版局			
自己学習の内容等アドバイス 1～3年生までの復習になるため、基本的な技術の復習をかかさず、知識・技術に対する修得目標を定め、商品製作に真摯に取り組むこと。			

[授業科目名] パターンメイキングⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 佳津子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ トレンチコートを中心に工業用パターンの要素を取りこんだ作図方法や素材などによるゆとり分量、シルエットの出し方を修得することを目標とする。			
授業の概要 重衣料の中で、コートは最も外側に装着するため、ファッションの影響を受けやすい。トレンチコートやピーコートの作図方法から洋服の基本である機能性を追求する。			
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題・ノート提出 (40%)、試験 (40%) などで総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業概要 コートについて 第2回 トレンチコートパターン作成 第3回 シルエット、ゆとりの入れ方について 第4回 衿 第5回 ストームフラップ・バックヨーク・チンフラップ 第6回 ラグランスリーブ (一枚袖からの展開) 第7回 ポケット・カフストラップ 第8回 ベルト・ベルトループ・ベンツ 第9回 裏地展開 第10回 縫い代付け・芯地の貼り方、箇所 第11回 パターン完成・仕様書作成 第12回 ピーコート シルエット、ダーツ処理方法 第13回 衿 (月腰切り替えの衿展開) 第14回 テスト 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 実物大で作成するためノートに回ごとにまとめる。各部の名称を事前に調べておくこと			

[授業科目名] グッズ・クリエイトⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 達也・内山 友晴
[単位数] 2	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考 クリエイティブコースのみ
授業の到達目標及びテーマ ファッションアイテムの1つでもある靴の製作技術や基本的な知識を学ぶことにより、トータルでファッションを生み出す力を育てることを到達目標とする。			
授業の概要 靴の基本的な制作方法を学び、基本技術を身に付けて、トータルのデザイン力やそのデザインを形にする技術などを実習を通して学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度（10%）、作品の提出状況（10%）、提出作品（80%）、を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 靴について（材料説明・革の特徴について等） 第2回 使用機器・道具の説明 第3回 靴の製作方法について 第4回 型紙提供によるパンプスの製作（製甲作業） 第5回 〃 第6回 底付け作業 第7回 〃 第8回 〃 第9回 仕上げ・作品提出 第10回 作品製作（応用） 第11回 〃 第12回 〃 第13回 〃 第14回 〃 第15回 仕上げ・作品提出			
使用教科書 担当者作成資料			
自己学習の内容等アドバイス 専門の機器を用いた授業のため、授業の復習をすること。 また、自宅で作業できる部分は、必ず次回授業までに行っておくこと。			

[授業科目名] テキスタイル制作 I (織)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 杉浦 晶子
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 販売も視野にいれた最終商品のためのテキスタイル製作。 2年次の織り、3年次の創作テキスタイルを履修した学生はかなり完成度の高い織物を制作する。 素材、技法、密度を工夫し、発想から素材の調達、仕上げまで各自でおこなう。			
授業の概要 集中講義のため、初回に材料が必要となる。 事前に配布するプリントからテーマを選び、素材を準備しなければならない。 高機を使用し、効率的に大作や複数の作品を制作する。			
学生に対する評価の方法 制作作品80%、レポート10%、授業態度10% 作品未提出の場合、途中経過も評価しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 事前準備 技法、素材の吟味、織り計画作成、たて糸を計算し購入する （早めにプリントを配り相談に応じます） 第1回 実際に用意した素材で織り計画を完成 第2回 製経 第3回 粗筈通し 第4回 巻き取り 第5回 綜統通し 第6回 筈通し 第7回 織り付け、試織 第8～12回 織り 第13回 仕上げ 第14回 講評会 レポート・作品提出			
使用教科書 プリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 日頃からテキスタイルの素材（糸）に興味をもち、価格や販売店をチェックしておくといよい。 初回に材料を忘れて実習できなければ欠席とする。 または、予備として担当者が3000円程度の材料を用意するが、独創的な作品は望めない。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
テキスタイル制作Ⅱ（編）		演習	鈴木 成子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 編み組織の特性、編成原理及び、素材特性を理解する事により 実社会に出た時に、即役立つ人材育成を目指す。 2年次に学んだ編みの基礎を利用し、編み機で出来る技法を学ぶ。			
授業の概要 編み機で編んだ、色々な編地を組み合わせた作品の制作をする。 (完成作品の例としては、ネックウォーマー・ニットキャップ)			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み(20%) 作品の提出(80%)などで総合的に評価を行う。 作品提出日は厳守。本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	講義	制作する編地の説明。出来上がりサイズを決める（毛糸の色を選び、購入）	
第2回	実習	編みの基礎の復習・編地の制作（メリヤス編み・しま模様）	
第3回	実習	編地の制作（引き上げ編み）	
第4回	実習	編地の制作（すべり目模様）	
第5回	実習	編地の制作（レース模様）	
第6回	実習	編地の制作（なわ編み）	
第7回	実習	編地の制作（編みこみ模様）	
第8回	実習	編地の制作（パイピング）	
第9回	実習	制作した編地にアイロンをかけ、作品の組み立て図を作る。	
第10回	実習	編地を組み立てる（とじ・はぎ）	
第11回	実習	作品の仕上げ（パイピングをつける）	
第12回	実習	作品の仕上げ（パイピングをつける）	
第13回	実習	作品の仕上げ（とじ・はぎ）	
第14回	実習	作品の仕上げ（とじ・はぎ・仕上げアイロン）	
第15回	実習	作品の完成、提出日。提出作品は2点。提出記録を書いて提出する。	
使用教科書 編み機に付属の本（テクニックブック、トラブルブック）			
自己学習の内容等アドバイス 色々な毛糸で編むとオリジナル作品になるので、2年次の＜編＞の授業で使用した 毛糸の残糸があれば、第1回目の授業に持参すること。			

[授業科目名] ファッション商品論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高見 敬二
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ファッション商品に関する幅広い知識の習得及び、ファッション業界における商品の重要性を再認識する。			
授業の概要 アパレルとは「衣服」を意味し、アパレルのほとんどがファッションである。 アパレル商品についての知識は、ファッションのどの分野においても重要なものである。その中でも、売り手側（例えばファッションアドバイザー）にとって特に必要な知識である。この講義では、買い手側、売り手両者にとって生活で役立つ情報を理解する。			
学生に対する評価の方法 課題レポートまたはテスト、授業への取り組みを総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（講義概要説明） 第2回 ファッション業界の現状及び今後の展望 第3回 アパレル商品分類 第4回 ライフスタイルとファッション及び流行アイテムについて 第5回 アイテム、素材の知識 第6回 素材とデザインとの関連 第7回 ファッションマーチャンダイジング 第8回 ファッション流通 第9回 ファッション商品と雑貨との関連 第10回 ファッションプレゼンテーション及び販促活動 第11回 商品知識 ①表示関連 第12回 商品知識 ②洗濯関連 第13回 商品知識 ③クレーム問題と対策 第14回 旧暦はビジネスチャンス 第15回 まとめ、試験日			
使用教科書 担当者作成資料			
自己学習の内容等アドバイス 事前に専門用語の意味等を調べておくこと			

[授業科目名] ブランドマネジメント		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高見 敬二
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ アパレル業界の仕事につくためのより高度な知識の習得に努める。 より実践的に理解できるようにブランドに関する幅広い知識をアパレル経験を基に進める。			
授業の概要 ファッション業界のホールセール、リテール各分野におけるブランドのあり方、マネジメントの基本応用を習得する。			
学生に対する評価の方法 課題レポートまたはテスト、授業態度を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（ブランドマネジメントとは何か？） 第2回 ブランド構築、ブランディング戦略 第3回 アパレル生産システム 第4回 アパレル卸、リテールのシステム 第5回 ブランドライセンス（新規ブランド開発&新規ライセンス開拓） 第6回 ブランドとI・Tとの関連及びEコマース 第7回 知的財産講義（商標権） 第8回 知的財産講義（意匠権） 第9回 知的財産権講義（著作権） 第10回 小売業におけるブランディング 第11回 小売業におけるブランド戦略 ①顧客戦略 第12回 小売業におけるブランド戦略 ②店舗戦略 第13回 小売業におけるブランド戦略 ③販売戦略 第14回 小売業におけるブランド戦略 ④商品戦略 第15回 まとめ、試験日			
使用教科書 図解ブランドマネジメント			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] T A ケーススタディ (含インターンシップ)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 宮本 尚士
[単位数] 2	[開講期] 3 年次後期 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 繊維製品を取り扱うに際して必要不可欠な品質管理について、その基本的な考え方を習得し、不良品の発生を未然に防止する能力を養う。			
授業の概要 TQC と言われている品質管理手法を別の観点から捉え、各種のクレーム事例を参考にその要因分析を行なうと共に再発防止策を考える。 また、繊維製品に関わる法律について、特に物づくりに関係の深い具体的内容を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (10%)、講義終了後に行なうレポート提出による理解度 (90%) などで総合的に評価する。 (レポートの内容は、不良品内容及び調査結果の事例問題から 1 問を選び、その発生要因分析を行い、どの検討課題の対応不足によって生じたものか、再発防止の対応策は何かの記述を求める。)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 品質管理の基本的考え方① (T ⁵ QM-T の 5 乗QM- の思考を取り入れた品質マネジメントによって不良品生産防止の考え方を解説する。) 第 2 回 品質管理の基本的考え方② (T ⁵ QM とは、Together・Time・Try・Think のキーワードの相乗効果による Total 的な組合せによって品質をマネージする考え方で、この基本的概念の解説と、企業で行なっている全員参加の実施事例の紹介を行う。次回以降具体的なクレーム事例を交えながら、各キーワードから導き出される検討課題を解説する。) 第 3 回 Together と Think との関わりを中心にした検討課題 (企画・生産・販売・消費・復元 (クリーニング) の各段階への関わりから生ずるトラブルについて解説する。) 第 4 回 Together と Try との関わりを中心にした検討課題 (PDCA・フィードバック・生産キャパシティー・情報伝達の行動面から生ずるトラブルについて解説する。) 第 5 回 Time と Think との関わりを中心にした検討課題 (時代の変化・使用場面に対応した考え方が取れないために生ずるトラブルと目的に合った品質管理基準の捉え方について解説する。) 第 6 回 Time と Try との関わりを中心にした検討課題 (タイムリーな処理・迅速な処理・ロット管理・納期管理等のタイミングのずれから生ずるトラブルについて解説する。) 第 7 回 繊維製品に関わる法律の説明① (消費者基本法・家表法・景表法・薬事法・有害物質含有・PL 法・JIS の概要を解説する。) 第 8 回 繊維製品に関わる法律の説明② (品質表示、原産国表示、JIS 衣料サイズについて具体的内容を解説する。) 第 9 回 インターンシップ 第 10 回 インターンシップ 第 11 回 インターンシップ 第 12 回 インターンシップ 第 13 回 インターンシップ 第 14 回 インターンシップ 第 15 回 まとめ・インターンシップ報告会			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 各講義で配付される資料に基づき講義内容の復習をし、整理しておくこと。また、繊維製品に付されている品質表示についてその意味等を調べておくこと。			

[授業科目名] 消費生活論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 当講義は、衣料管理士等の資格認定試験を受験する学生は勿論のことではある（主眼）が、それだけにとどまらず、広く消費者問題を体系的に捉えることを複眼とし、安全で豊かな消費生活を確立するために、消費者および企業のあるべき姿、行政のあり方などを理解することが目的である。それに加えて、消費者アドバイザーとしての知識をも習得してもらいたい。			
授業の概要 我々の生活にもっとも密着した消費者問題、それを企業側の論理に立った視点だけではなく、消費者側の視点に立って広く捉える。つまり、企業を取り巻く社会経済環境と消費生活の変化の消費者対応、行政の取組み、消費者教育、環境問題等の歴史・現状・対策である。将来、企業等で働く際の課題対策への一助となるはずである。			
学生に対する評価の方法 毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識（15%）、授業への取組み（15%）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 消費者問題とはなにか 第2回 消費者問題の発生と多様化・複雑化 第3回 消費者を取り巻く社会経済状況と消費生活の変化 第4回 環境問題の深刻化と消費者の権利 第5回 消費者政策の展開（1）消費生活の安全の確保（消費者基本法12条） 第6回 消費者政策の展開（2）計量・規格および広告・表示の適正化（消費者基本法13, 14, 15条） 第7回 企業の消費者対応（苦情処理、消費者対応部門の役割と機能およびその対応・課題） 第8回 消費者教育の発展と歴史 第9回 消費者教育の担い手とその内容・方法 第10回 消費者教育の関連領域および海外動向 第11回 消費生活情報の意義と多様化 第12回 表示・広告情報の真偽（危害、危険、製品事故情報、製品回収情報）、商品テスト情報 第13回 消費生活と環境問題（グリーンコンシューマーの台頭とグリーン購入の取組み） 第14回 衣料品の環境問題 第15回 学期末試験			
使用教科書 新版 消費生活論（社団法人衣料管理士協会）			
自己学習の内容等アドバイス テキストを十分読みこなすために、予習と復習の習慣を身につけること。特に、衣料管理士資格認定試験を受験する学生は受講必須である。			

[授業科目名] テキスタイルケア演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 日下部 信幸
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 講義「テキスタイルケア」で学んだ内容を演習（実験）を通して知識を確実にすることを目標とする。ファッション素材には洗たく、染み抜き、アイロン、保管など各種のテキスタイルケアが必要であり、それらを実際にも実験実習を通して体験できるテーマにしている。			
授業の概要 ファッション素材のテキスタイルケアとして、「生成り布の精練漂白」、「界面活性剤の働き」、「自然界の天然サポニンの活用方法」、「汚れ落としと染み抜き」、「耐熱性とアイロン温度」、「防かび・防虫のための保管方法」などについて、実験実習によって習得し、ファッション素材の取り扱い方を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 各回ごとのレポート（50%）、授業への参画状態（50%）とする。レポートは内容のうち特に考察とまとめを重視する。授業態度は4ない（遅刻しない・無駄話しない・居眠りしない・携帯見ない）態度、4する（質問する・討議する・発表する・すぐにまとめる）態度である。なお、本授業は再評価を行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明と演習（実験実習）の心得。テキスタイルケアのレビュー。 第2回 生成り布の精練漂白と収縮率を測定する。 第3回 セルロース繊維布のマーセル化による凹凸付与と染色効果を調べる。 第4回 スラックマーセル化と伸縮性の付与。オパール化と染色効果を調べる。 第5回 水の硬度と泡立ち。界面活性剤の働き。表面張力と浸透作用を調べる。 第6回 自然界の天然サポニンの泡立ちと洗浄性。プラス重曹効果を調べる。 第7回 汚れ落としの4つの作用を調べる。 第8回 ファッション素材の耐熱性。アイロン温度と適用繊維を調べる。 第9回 ファッション素材の耐洗濯性。洗濯できる素材とできない素材を調べる。 第10回 ファッション素材の染み抜き。水溶性染みと油性染みを除く。 第11回 糊付け、柔軟剤、帯電防止剤などの性能を調べる。 第12回 衣服素材に適した繊維を調べる。身近なもので消臭する。 第13回 ファッション素材の保管方法。かびと虫害の発生条件と防かび・防虫方法を調べる。 第14回 テキスタイルケアの環境問題。界面活性剤、防虫剤、ドライクリーニング剤、防炎加工剤、蛍光剤 第15回 レポートの整理とまとめ、提出。			
使用教科書 「衣生活のもの作りと科学実験」（家政教育社）			
自己学習の内容等アドバイス 実験実習はグループ（4～5名）で行うので、積極的に参加すること。 実生活に直結した内容が多いので、「百聞は一験・一触にしかず」を生かして、進んで実践しよう。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
クリエイティブデザイン演習		演習	豊口 武三・田山 淳朗
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	4年次 (集中)	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
ファッション業界で長年に渡り活躍しているデザイナーの講師から、具体的なデザイン方法、作品に仕上げるための縫製技術等を学び、それらの多くを修得することを到達目標とする。			
授業の概要			
<ul style="list-style-type: none"> ・発想の具体化に造形上必要なシームをより効果的にデザインとして考える方法論 ・人体構造と動きと服の関連 (人間の動きに合ったバランス美を考え服としての造形的美しさを作る方法論) ・立体デザイン (ボディ上で作るデザイン) と平面デザイン (紙面上に描き考える) を通して立体デザインの演習 ・デザイン、シルエット、素材の関連を通し発想と技術の総合美の習得 			
学生に対する評価の方法			
<p>授業への参画態度 (10%)、レポート提出 (50%)、演習作品 (40%) を総合的に判断し評価する。</p> <p>また、この授業は20名以下の受講とし、途中放棄は認めない。</p> <p>多人数希望の場合は1~3年までの全授業のF判定結果を参考にする。</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
1回目	<ul style="list-style-type: none"> ・造形線 (構造上必要な切替え線) を最大に生かしたデザインの発想、解説と演習 ・人間の身体と動きを考えたデザイン 		
2回目	<ul style="list-style-type: none"> ・流行による服作りの変化 (芯無しの服、透ける服、切りっぱなしの服) とその作り ・クリスチャンデオール服作り現場 (カール・ラガーフェルドの世界のビデオ使用) 		
3回目	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれのオリジナル印を考える (自分の個性、特徴を作品に加える) 個性の必要性 		
4回目	<ul style="list-style-type: none"> ・布を人に合わせシルエットを作るその空気の分量から作り出される動き易さの運動量とシルエットと個性について 		
5回目	<ul style="list-style-type: none"> ・立体の上でデザインを考える解説と演習 (袖の構造、運動量) 		
6回目	<ul style="list-style-type: none"> ・ピンワーク演習 ・素材の組み合わせで服に合わせて再加工をしてオリジナル作りの演習 		
7回目	<ul style="list-style-type: none"> ・「売りたい」「売れる」「売る」「作りたい」「作れる」「作る」をデザインとして考える 		
8回目	<ul style="list-style-type: none"> ・デザインのサンプル化及び生産化に伴う作業と必要知識 (仕様書参考) 演習 ・考え方やイメージの造形への変換 (ジャンポール・ゴルチェ〜夢を追う異端児〜ビデオ使用) 		
9回目	<ul style="list-style-type: none"> ・素材とデザインの関係と組合せ 素材の流行、柄の流行 (プリント、ジャガード、絞り) (ボーダー、ジオメトリック、古典、花、植物) (柄の大きさ) 		
10回目	<ul style="list-style-type: none"> 経糸、緯糸の見分け方及び経地の目、緯地の目のデザイン上の効果と使い分け 人間と毛皮、衣服のルーツ (ビデオ) 		
11~15回目	田山淳朗氏による特別講義・演習		
使用教科書			
<p>豊口武三著 「ファッションデザイナー入門」 織研新聞社 ※1年次に使用した教科書</p> <p>[参考図書] パターンマジック 中道友子著 文化出版局</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
1年生から3年生までの応用技術を学ぶ授業であるため、基本的な知識・技術はもちろん、ファッションに対する造詣を深めておくこと。			

[授業科目名] アパレル企画		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山内 睦美
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ アパレルにおける商品企画の初期発想から、企画立案までを、主にマーケット、情報誌等のリサーチから習得することをテーマとし、カラー、素材、デザイン、デザイン構成をブランディングしてプレゼンテーションを実践する。			
授業の概要 マーケットのカテゴリー、リサーチ方法と、情報誌等のカテゴリー、収集方法から、具体的にデザイン企画をすることの重要性を学ぶ講義を行う。ニット素材、布帛素材の特徴を説明し、素材からのデザインと、カラー、スタイリング、ブランディングイメージを連動させるデザイン企画の構成を演習する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（40%）、数回実施するレポート内容と理解度（30%）、最終に実施するプレゼンテーション内容（30%）などで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 アパレル企画を学ぶにあたって (マーケットと情報誌等のカテゴリーの概要) 第2回 マーケットのブランディングと企画 第3回 雑誌、情報誌の見方とデザイン企画 第4回 カラーと素材について 第5回 ニット素材の特徴とデザイン 第6回 布帛素材の特徴とデザイン 第7回 マーケットリサーチからのデザイン企画 第8回 マーケットリサーチからのデザイン構成 第9回 情報誌からのデザイン企画 第10回 情報誌からのデザイン構成 第11回 カラー、素材とデザイン企画 第12回 カラー、素材、イメージとデザイン構成 第13回 ブランディングのプレゼンテーション 第14回 ブランディングのプレゼンテーション 第15回 アパレルの企画とPR（宣伝、販促等）			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 数回のマーケットリサーチを、レポートとするための具体的な内容と表現方法を考察する。			

[授業科目名] アパレル設計・生産		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金森 久宙
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <アパレル=衣服>の生産環境は大きく変化をしている。しかし、「ものづくり」の基本は変わらない。「ものづくり」の基本を含め、近年の社会情勢の変化による品質や消費者、社会的責任に対する考え方、重要性に関しても理解する事を目標とする。			
授業の概要 ファッションプロダクトの中核をなす「アパレルメーカー」。アパレルメーカーにおける生産活動はどのような流れで進められていくのかを、「ものづくり」の観点を中心に学ぶ。将来、アパレル業界にて活躍する為に必要な「工」の知識として、「商品」としての衣服の基本、業界全体の平均的な製品生産加工の流れや、各業務の連携・重要性を理解する。			
学生に対する評価の方法 授業態度（20%）、中間テスト・レポートなど（30%）、期末テスト（50%）などにて、総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 アパレル業界の概要 第2回 企画から商品になるまでの流れ 第3回 「商品」としての衣服 第4回 アパレルメーカーの仕事 第5回 サンプルパターン、工業パターンについて 第6回 アパレルと生産・生産管理 小テスト 第7回 縫製工場について 第8回 縫製工場の各工程について 第9回 生産から流通へ（仕掛品から商品へ） 第10回 衣料品の表示 第11回 製造品質とコストの話 第12回 商品開発と社会情勢 第13回 アパレルメーカーと消費者 第14回 アパレル生産の変動・展開 第15回 まとめ・テスト			
使用教科書 特になし。適宜プリントを配布			
自己学習の内容等アドバイス 講義の中で強調した内容や配布プリントを参考に復習し、さらに各自関心を持った内容については調査・探求して理解を深めてもらいたい。			

[授業科目名] 貿易実務		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 城 隆
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 授業では、わが国の貿易取引の現状を概観したうえで、貿易取引の仕組み、取引慣習、取引のルールといったものを理解してもらおうと思っている。また、取引の交渉や取引を進めるにあたっては文書を使う。いわゆるビジネスレターと呼ばれるものである。読み方の基本を勉強していきたい。			
授業の概要 私たちの身の回りは数多くの外国製品であふれかえっている。衣・食・住のあらゆる面で外国の品物に頼っている。このような外国製品はどのようにして日本へやってくるのだろうか。商品を輸出入するにあたっては、外国の業者と取引の交渉をし、契約を結び、数々の手続きを踏まなければならない。こういった国際的な商品の売買を管理することが「貿易実務」である。			
学生に対する評価の方法 独学というわけにはいかないので、授業に参加して、貿易実務を理解する。授業への参画姿勢50点、評価点50点をそれぞれの満点とし、合計点が60点以上を合格とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 貿易取引とは何か？ 外国との取引はどのように行われているのか？ 国内における取引とはどんなところが違うのか？ 授業ではこういった疑問に答えたい。 第1回 オリエンテーションー貿易実務入門 貿易実務とは何か、国際的な取引に関してはどのような研究方法があるのだろうか。 第2回 「貿易の意義・起源」貿易の意義、いつごろから行われているのかを考えてみよう。 第3回 「わが国の貿易取引の現状 その1」 新聞報道からわが国の貿易取引の現状を見てみたい。 第4回 「わが国の貿易取引の現状 その2」 わが国から外国へ、外国からわが国へ、どんな品物が輸出入されているのであろうか。 第5回 「貿易と経済のグローバル化」経済の発展とともに貿易活動も盛んになる。 第6回 「わが国の経済と貿易」 戦後の日本経済の発展と貿易の関係を見てみよう。 第7回 「ビジネスレター」 貿易取引を進めるにあたって取引当事者間で取り交わされるビジネスレターを見てみよう。 第8回 「貿易取引の交渉」 貿易取引において重要な5つの条件を解説する。 第9回 「貿易取引と契約」 外国の業者と取引を行うためには、契約を結ぶことが一般的である。 第10回 「貿易取引とトラブル」 取引にトラブルは付き物です 起こらないようにするにはどうしたらよいか。 第11回 「貿易取引と海上運送」 わが国は四方を海で囲まれているので、輸出入は主として船舶による運送を利用して行われる。 第12回 「わが国の貿易管理」 自由な取引といっても何から何まで輸出入できるわけではない。 第13回 「貿易取引と決済」 貿易取引における決済の仕組みを紹介する。 第14回 「まとめ」 これまでの授業内容を復習しよう。 第15回 「評価」			
使用教科書 教科書は使わない。適宜、プリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス インターネット隆盛の時代にあつて、ウェブサイトには貿易実務に関する様々な情報が溢れている。これを活用しないで済ますわけにはいかない。お奨めのサイトは、JETRO（日本貿易振興機構）、JFTC（日本貿易会）、財務省貿易統計、税関ホームページ、などである。			

[授業科目名] ディスプレイ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 広石 武雄
[単位数] 1	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 2時間単位の集中で実施
授業の到達目標及びテーマ 伝統の継承 人間学 ディスプレイ論(教師)等を念頭に、授業の中で意識的に専門教育を浸透させる。 生徒が受動的にならないように、教師としての責任(研鑽に勤める努力)を果たしながら、考える能力(作図)あらゆる施設空間に主張できる対応能力、提案力を身に着けることを、到達目標とする。			
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・ 商業空間のディスプレイ基本学習、陳列什器製作図、店舗レイアウト(基本)学習、 ・ 三角図法 2点消失点図法 3点消失点図法 透視図(1点消失点)の書き方 ・ 陳列コーディネーターを目指す(衣 食 住、商品フェース・商業空間プロデュース) ・ ディスプレイ什器の企画、立案の基礎知識&応用技術 ・ 流通業の店舗レイアウト(専門店、量販店、展示会フェア)知識と技術 簡単なディスプレイ技術(システム什器を使用しての実習) 			
学生に対する評価の方法 ① 授業への取り組み ②小テスト(作図&レポート) ③三角図法の作図演習 ④透視図面、期末テスト(①10%②20%③40%④30%)			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回講義 ディスプレイ基本学習 第2回講義 ディスプレイ(陳列)提案型作図とプレゼンを学ぶ 第3回実習 基礎知識(三角法→制作図面)を身につける 第4回実習 2点消失点図法 3点消失点図法を学ぶ 第5回実習 プリントを使つての(2点消失法)を使つた立体図の描き方(透視図の基本)を学ぶ 第6回演習 インターネットを利用して映像で学ぶ 第7回講義 四季を通してのディスプレイ戦略、構想を学ぶ 第8回講義 コーデトネイト理論 第9回演習 ボディツールソー 什器利用しての説明 第10回実習 展示商品のハンガー等の作図制作 第11回実習 システム什器を利用してのディスプレイ技術を学ぶ 第12回 課外実習(近郊の商業施設の見学) 第13回 課外実習(近郊の商業施設の見学) 第14回 期末テスト(時間内にて作図) 第15回 期末テスト(レポート形式)・・・第11回目に配布			
使用教科書 前期(プリント) 後期(プリント) 参考資料「インテリアコーデネイトハンドブック」(インテリア産業協会)			
自己学習の内容等アドバイス 作図法のマスターのため(予習 復習)専門用語を事前に調べておくこと			

[授業科目名] 卒業研究 ―A―		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 文子・内田 和邦・金森 久宙
[単位数] 6	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 4年間で学んだ専門知識、技術を総結集し、決められた枚数以上の内容豊富な論文を書き上げる。 正式な発表会は学内で12月上旬に、さらに展示を含めた発表を1月下旬に学外で発表する。 以上の他に、ファッション学科のショップおよびコンテストにかかわる内容、その他の課題を必ず提出のこと。			
授業の概要 十分に検討したテーマをもとに、文献からの情報ばかりでなく、各自で考え、足を使って調査研究した論文に取り組む。授業時間だけでは内容のあるものは書けないので、授業時間外でも多くの時間を費やしてまとめ、論文は個人で提出しなければならない。			
学生に対する評価の方法 論文の内容での評価を中心に、その他の作品およびレポート提出、発表表現法、受講態度で総合評価する。 テーマ、前期分の論文、後期の最終論文とも、提出時間が学科で決められた日時を過ぎた場合は単位を認めない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 オリエンテーション テーマ決定 第 2～3回 実証調査・研究 第 4～5回 実態調査・研究 第 6～7回 調査研究・中間報告 構想・枠組みの決定 第 8～9回 論文執筆 第10～11回 論文執筆 第12～13回 論文執筆 第14～15回 論文執筆 論文、中間提出および中間発表 第16～17回 論文執筆 第18～19回 論文執筆 第20～21回 論文まとめ 論文提出 第22～23回 パネル制作 展示品制作 第24～25回 パネル制作 展示品制作 教員による口頭発表審査 第26～27回 パネルまとめ 第28～29回 口頭発表準備 学内最終口頭発表会 第 30回 学外研究発表会 パネル展示会			
使用教科書 特に定めていないが指導担当者が指定する場合もある。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間内だけでは時間不足であるので、多くの時間を費やして十分な研究を積み重ねること。			

[授業科目名] 卒業研究 一B一		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 文子・内田 和邦 高間 由美子・木村 佳津子
[単位数] 6	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 前半は、各自1テーマについて論文を完成させる。文章をまとめる能力、プレゼンテーション能力の総仕上げの場とする。後半は、そのテーマに沿って関連づけた作品制作を行い発表する。その他にも課題の提出を義務づけており、卒業まで多くのことにチャレンジする姿勢を維持させる。			
授業の概要 4年間で学んだ専門知識・技術を総結集し、前期は論文、後期は作品を制作する。論文においては、関連事項を調査・研究、試作し、授業以外においても十分に時間をかけて検討してまとめること。 後期は、論文作成過程で得られた知識を生かしてテーマに沿った作品を制作し、外部の大きなステージにおいてショー形式で発表する。前期3回・後期4回の全体オリエンテーションを実施。			
学生に対する評価の方法 論文・卒業制作作品・制作までの試作品・受講態度で評価。 論文テーマ、論文提出や作品審査など、決められた日程が守られない場合は単位を認めない。 また、論文テーマを提出した後、テーマを変更することやデザイン画の変更は認めないので注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 「前期」 第1回 オリエンテーション テーマの確認 第2回 研究テーマについて調査 第3～4回 関連事項調査 第5回 資料収集 論文作成 第6回 関連事項調査と試作・実験 論文作成 第7、8回 論文作成 デザインリサーチ デザイン画作成 第9回 中間審査 第10～13回 論文作成 第14回 論文まとめ(前期分) 第15回 デザイン画審査・決定、論文提出、口頭発表 「後期」 後期は1回分を4時間で明記している 第1回 パターン作成 素材選定 裁断 第2回 作品制作 第3、4回 作品制作 第5～9回 作品制作 第10回 縫製まとめ 作品完成 点検 第11回 作品審査 モデル試着（全担当者とも同日に実施） 第12回 作品修正、付属品の作成 第13回 プレゼンテーションプランの検討・決定 第14回 最終審査 作品についてのプレゼンテーション 第15回 外部における作品発表会 ショー形式で実施			
使用教科書 各担当者作成資料を配布			
自己学習の内容等アドバイス より良い論文・作品制作のためには日々の努力を惜しまないこと。これまで学んだ知識に加えて相当の試行錯誤と、新しいものへの挑戦をすること。			

[授業科目名] コンシューマーサイエンス		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金森 久宙
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 衣料管理士資格取得者必修
授業の到達目標及びテーマ 繊維業界における「生産と品質」の知識修得と共に、「流通・消費」との関わり、重要性を学ぶ。その過程の中で、生産者・消費者 双方の観点から「消費科学の目的」「品質」「繊維業界の動き」を理解することを目標とする。			
授業の概要 衣料管理士の役割、衣料管理士として知っておくべき繊維の製造・品質、消費者、流通などの基本的な知識の修得に加え、近年の業界の動き、社会の変動などに対する認識や感覚を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、課題（10%）、期末試験（70%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 消費科学とは 第2回 品質とは 第3回 品質の評価・品質保証 第4回 品質表示 第5回 繊維製品の安全性・消費者苦情 第6回 消費者行動の特徴・購買行動の要因 第7回 商品・店舗と消費者 第8回 消費者調査 第9回 繊維産業の構造 第10回 繊維・繊維製品の生産 第11回 繊維製品の流通 第12回 繊維製品の消費 第13回 演習問題 第14回 まとめ・T A資格試験対策 第15回 T A資格認定試験			
使用教科書 「新版 衣生活のための消費科学」（予定題名） （日本衣料管理協会）			
自己学習の内容等アドバイス 入学以来学んできた基礎的かつ重要な内容も含むため、授業の進行に合わせてテキスト（過去の学科テキストも含む）を参考に確認しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ファッション環境学		講義	宮本 教雄
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	4年次前期	選択	衣料管理士必修
授業の到達目標及びテーマ 衣服は「第二の皮膚」ともいわれ、衣服によって形成される「衣環境」は、人間を取り巻く自然、人工、社会、情報といった様々な環境と深く関わり、一番身近な個環境と位置づけられる。日常生活において、健康で快適な衣生活を過ごすための衣環境のあり方を、様々な角度から考えることを到達目標とする。			
授業の概要 衣服着装時には、人体生理、温熱環境条件、衣服気候、着衣の人体への影響、保温効果、安全性、社会性など、様々な周囲環境が衣服の着心地を左右する。繊維製品とこれら周囲環境の相互関係を、人間を中心に解説する。消費者の立場から、あるいは生産者の立場から、衣環境に関わる様々な問題点を探るとともにこれらを解決できる能力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の受講態度（評価割合 20%）、講義終了後に実施する試験の成績（評価割合 80%）などで、総合的に評価する。週に1日2回連続の講義のため、1日の欠席は2回の欠席となるので、出席時間数が不足しないように注意する。総合評価の不合格者には再評価を実施する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	科目の概要と講義の進め方の説明		
	Ⅰ 序論 衣環境学	環境とは。人間に最も近い環境・衣服	衣環境の快適性。衣環境の研究方法
第2回			
第3回	Ⅱ 基礎編		
	第1章		
	暑さ寒さの快適性	体温とその調節。体内での熱産生	体内での熱移動と体表面から環境への熱移動
第4回		体温調節システム	
第5回		自律性体温調節反応	
第6回		衣服を通しての熱と水分の移動	
第7回	第2章		
	衣服圧と動きやすさの快適性	人体の形状と運動変形。動きやすい衣服の条件	
第8回		衣服圧と人体生理。着衣の肌触り	
第9回		衣服圧の生体への影響	
第10回	第3章		
	皮膚の衛生と衣服による皮膚障害	皮膚の構造と生理。着衣の肌触り	
第11回		皮膚の汚染と衛生。衣服による皮膚障害	
第12回	Ⅲ 応用編	肌着の快適性と健康	
第13回		履物の快適性と健康	
第14回	試験	記述式、解答時間 90 分、教科書・ノートの持込禁止	
第15回	まとめの講義		
使用教科書 衣環境の科学 田村照子 編著。小柴朋子、平田耕造 共著（建帛社） 【参考図書】基礎被服衛生学 田村照子 著（文化出版局） 新しい被服衛生学 中橋美智子、吉田敬一 共著（南江堂）			
自己学習の内容等アドバイス 講義中は問題意識を持って良く聞き、不明な点は理解できるように質問することが重要。 講義日の前日までに前回の復習を行い、講義内容の流れを把握しておくことも重要。			

[授業科目名] 教職入門		[授業方法] 講義	[授業担当者] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：教職の意義、教師の仕事、必要とされる資質・能力を理解し、教師としての資質・能力を身に付ける。一般社会生活の中にあっても、リーダーとして尊敬される人材であること。 テーマ ：①教員の使命・職務・責任・教育的愛情の理解、②社会人・教員としての対人間関係を理解、③生徒理解と学級経営法理解、④自己の教員としての適性を知る。			
授業の概要 教職の意義は何か、教師とはどんな職業か、自分は教師としての適性や資質があるか、社会人としての教師の在り方は何か。教師になるなら、何をどの時期にどのように身に付けたら良いか等を知る。これらを概念的に捉えたあと、子どもの実態把握から学校の管理・運営にいたるまで、項目別に体系的に掘り下げて教職の意義を理解する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観 (知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度) に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容 (約 30%)、定期考査 (約 70%) で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 子供の生活実態－1 : 教職課程で学ぶ概要、最近の子供の一日の過ごし方、心と体の変化などを把握する。 2回 子供の生活実態－2、教師の仕事－1 : 学校での実態 (授業、部活動、いじめ、など)、学習指導と教育課程の意味 3回 教師の仕事－2 : 教育課程の構成原理、新学習指導要領の特色、学習指導の考え方と方法 (指導法と形態、レディネス、動機付け) 4回 生徒指導・教育相談・進路指導 : 生徒理解、生徒指導 (意義、組織、計画、運営、指導の実例)、教育相談 (意義、基本原理)、進路指導 (意義と計画、進路相談) 5回 学級経営－1 : 学級と学級経営 (経営の基本とあり方、学校経営との係わり)、道徳教育 (目標と内容、実践の仕方)、学級経営と特別活動 (目標と内容)、学級担任の心構え 6回 教師に求められる資質と能力－1 : 戦前・戦後における教師像、現在の教師に求められるもの (中教審答申・教育職員養成審議会答申の求めるもの) 7回 教師に求められる資質と能力－2 教員の養成と採用－1 : 学ぶものの姿勢、教えるものの姿勢、戦前・戦後における教員養成制度の比較 8回 中間考査を実施する 9回 教員の養成と採用－2 : 教職課程の仕組みと内容 (教育職員免許法、教職課程で学ぶ科目と単位数、免許状の種類)、教員の選考と採用 10回 教員の養成と採用－3 教員の地位と身分－1 : 教員の採用 (教職員定数、教職員の構成、教員採用選考の変遷、私立学校での採用)、教員の地位と身分 (身分とは、国・公立学校教員の身分、私立学校教員の身分、教職の専門性) 11回 教員の地位と身分－2 : 待遇と勤務条件 (給与、勤務、人事、福利厚生)、研修 (初任者研修、校内研修、長期・短期研修) 12回 学校の管理・運営－1 : 学校制度 (1 条校、専修および各種学校等、文部科学省所管外の学校、わが国の学校制度の変遷) 13回 学校の管理・運営－2 : 管理・運営体制 (教育課程、教職員、生徒、施設・設備)、経営と組織 (職員会議、学校評議員)、管理職の役割 14回 学校の管理・運営－3 : 校務分掌 (分掌とは、校務の範囲、編成上の配慮、分掌組織図と分掌業務の概要、公立学校の学校経営案の構成) 15回 最終考査を実施する			
使用教科書 教職入門 (教師への道)「2009年改訂版」 吉田 辰雄、大森 正 編著 図書文化			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを理解することである。理解のためには予習 3 割・復習 7 割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 教育原論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 「教育とは」「学校とは」「教師とは」「生徒指導とは」等、教育の本質、学校の歴史、社会教育、教育改革の現状など、今日の教育課題について学習し、実践的な課題解決能力・指導力を養うことを目的とする。			
授業の概要 本授業は、教職を志す学生にとって必要な教育に関する基礎的・基本的事項を学習することを通して、少子高齢化の進行、価値観の多様化など、急激に変貌する社会の中にあつて、教育に関する新たな課題を家庭や地域社会との連携のもとで解決していくために必要な知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、教育推進の基本的方向 教職課程の意義、生涯学習のねらいと概念規定、自己実現力の育成 2回 人間の発達と教育 人間の発達と環境の関係、人間の成長と発達環境、家庭の教育機能の充実に向けて 3回 教育方法の基礎 教育の方法原理、授業の言語と準備、学習の形態、その他の教育手法 4回 教育課程 1 わが国の教育課程編成の基本的視点、教育課程編成の基礎としての学習指導要領 5回 教育課程 2 学文における教育課程編成の過程、教育課程改訂の動向 6回 進路指導と生徒指導 進路指導の基本的とらえ方、生徒指導の基本的とらえ方、進路指導と生徒指導の推進体制 7回 特別活動 特別活動の目標、特別活動の内容とその基本的性格、特別活動の指導画と評価 8回 教師の職務と責任 教師としての職業、教師の養成、教師教育、教師の採用と構成 9回 学級運営 学級運営と学文、学級運営の組織、学級運営の過程、学文の危機管理・安全管理 10回 学文制度とその特色 学文制度の形成と教育学会の発展、初等学文制度とその動向、中等学文制度とその動向 11回 社会教育 社会教育とは、生涯期の社会教育、現代社会教育とその充実 12回 教育政 1 憲法、教育基本法、教育政の基本原理、国の教育政制度 13回 教育政 2 全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）、地方教育政制度 14回 新しい教育課題 選択と学文、環境の重視、保護される情報、「ゆとり教育」の見直し 15回 定期試験			
使用教科書 「新しい教育の原理」 田代直人・佐々木司 編著（ミネルヴァ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 橘 春菜
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的な学習過程、発達過程を理解し、児童生徒（障がいのある児童生徒を含む）の心身発達に応じた教育のあり方について考えを深める。			
授業の概要 効果的に学習を促すには、学習者の発達における心理的特性を理解し、発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では、発達、学習、人格などの観点から人間の基本的な理解を深めたうえで、学級集団の指導、子どもたちへの心理教育的援助、教育評価などについて学ぶ。受講者は授業を通じてこれからの学校教育のあり方に関して積極的に考え、自分の意見を持つように心がけてほしい。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度および授業中の提出物（50%）、最終に実施する試験（50%）により総合的に評価する。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要、履修上の注意）・教育心理学とは 第2回 学習理論 学習成立のメカニズム 第3回 学習過程の理解 知識獲得と学習の転移 第4回 学習意欲 動機づけと原因帰属 第5回 授業における教授・学習過程 第6回 発達過程の理解1 人格の形成 第7回 発達過程の理解2 子どもの思考の発達 第8回 発達過程の理解3 対人関係の発達 第9回 発達過程の理解4 教育と発達 第10回 学級集団 教師と児童生徒関係 第11回 適応と障害1 学校臨床 第12回 適応と障害2 障がいのある児童生徒への理解 第13回 知能と学力 知的発達と学力の測定 第14回 教育評価 教育評価の機能、方法、解釈 第15回 まとめと筆記試験			
使用教科書 必要な資料をその都度配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 事後学習により、講義内容をよく理解し、自分の考えを整理しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 教育行政学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 文部科学省行政、教育委員会制度など21世紀の初等中等教育行政及び社会教育行政等を全般にわたって学習し、教育行政の意義と目的、基本原理等を具体的に理解することを目的とする。			
授業の概要 教育行政とは、教育を対象として、教育政策の実現、教育のための条件整備、憲法・教育基本法に示されている学習権の実現を図るための行政である。本授業では、わが国の公教育制度、教育行政の概念等を学習し、教職に携わる者に必要な教育行政に関する知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、わが国の公教育制度 1 教職課程を学ぶ意義、公教育の概念とその制度的原理 2回 わが国の公教育制度 2 わが国の学校体系 3回 わが国の公教育制度 3 現代の学校制度の課題 4回 教育法制の構造と機能 1 教育法規の体系、教育権の構造 5回 教育法制の構造と機能 2 憲法、教育基本法 6回 教育行政の概念と基本理念 1 教育行政の成立と展開、教育行政の概念 7回 教育行政の概念と基本理念 2 教育行政の構造と一般原則、今後の課題 8回 教育行政の構造と機能 文部科学省、教育委員会制度 9回 教育行政の諸領域 1 学校経営 10回 教育行政の諸領域 2 教育課程行政、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト） 11回 教育行政の諸領域 3 教職員の職務と人事考課 12回 教育行政の諸領域 4 社会教育行政、教育財政 13回 諸外国の教育行政制度 アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア など 14回 わが国教育行政の課題 学校評議員制度、学校運営協議会制度、学校評価制度、教員人事評価制度、「民間人校長」登用 15回 まとめと定期試験			
使用教科書 教育行政学 河野和清 編著（ミネレガ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育課程		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 学習指導要領に基づく各教科・教科外の教育課程編成法及び特質が理解できること。「評価の観点」に配慮した授業計画、学習指導案が書けること。基本的学習指導法にしたがった授業実践ができること。 テーマ： 教育課程及び指導法に関する学修。教育課程の基礎理論の理解。教育基本法等の法律やこれに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた指導法の習得。			
授業の概要 教育課程の基礎理論とその類型を学ぶ。教育の法治主義に基づく教育基本法をはじめとする法律や、これに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた教育課程の編成及び教育の内容・方法に関連する事項を系統的・体系的に学ぶ。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1、2回 教育課程論 ― 教育課程の基本原則 教育課程の概念、カリキュラムの類型、カリキュラムと教育課程の包含関係 3回 学習指導要領 教育課程に関する法規、学習指導要領の性格、歴史的変遷、新学習指導要領の特質 4回 教育課程と学習内容 人間形成と教育内容の関わり、教材の役割、教科書の教材化、生きる力と個性伸長の関連 5回 学習指導要領が定める学校教育活動の構成 各教科と特別活動・道徳教育の関連、道徳教育・特別活動の意義 6回 教育方法論 ― 学習指導の原理 問題解決学習と系統学習、発見学習と動機付け、初等・中等教育時代の自己の体験発表と協議 7回 学習指導案の役割： 学習指導から学習支援への推移、授業の三角形と教材・発問、授業計画と学習指導案の作成、マルチメディアの活用 8回 中間考査を実施 9回 道徳教育の理念と実践： 道徳教育の理念、道徳教育の指導法、実践例の研究と協議 10回 特別活動の指導法 学級活動（ホームルーム活動）の指導法、児童会（生徒会）活動の指導法、学校行事の指導法 11回 教育評価 学力論の変遷、新学力観、観点別評価、指導と評価の一体化、指導要録の内容、通知票の意義と内容 12回 教育実践論 ― 授業実践の例示 問題解決学習型の例、系統学習型の例、例について研究と討議 13回 総合的な学習の時間について 創設の意義、学習の内容、実践例の研究と協議、学習指導案の課題提示 14回 教育実践 観点別評価に配慮した学習指導案の作成、研究と討議 グループ別に研究と討議をした後、全体発表 15回 まとめと最終考査を実施			
使用教科書 実践に活かす 教育課程論・教育方法論 山口 満、唐澤 勇 監修 学事出版			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを常に考えることである。理解のためには予習3割・復習7割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
美術科教育法 I		講義	西脇 正倫
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択(教職必修・美術)	
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育は人間教育 到達目標：発達各段階における造形の意味の理解 ① 発達段階によって表現が異なることの意味の理解 ② 各発達段階における表現の特徴と課題の理解 ③ 発達段階ごとにおける教育の方針の理解			
授業の概要 美術科教育は、芸術家育成教育ではなく、幼児期から生涯を通じて、一貫して持続されていく人間教育の重要な教育領域であることを、幼児期から思春期にかけての造形発達を事例を確認しながら理解する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回：「講義のオリエンテーション」 美術科教育 I～IVの概要説明 講師紹介、受講生アンケート等 第2回：「幼児の造形体験」 幼児画を模写することによって、幼児の造形について体験的にアプローチする。 第3回：「発達ということ①」 人間成長を発達という視点から捉え、発達の概念を理解する 第4回：「発達ということ②」 造形における発達を「美術による教育(ピクター・ローエンフェルト)」などの著作を資料として概説する 第5回：「造形発達① 幼児期の平面造形1」 幼児期の造形についての説明 幼児期全体の位置づけ 第6回：「造形発達② 幼児期の平面造形2」 幼児期の造形についての説明 幼児期における描画の特徴説明(発達段階的、環境的に特徴のある幼児の描画を教材に、描画の特徴を理解する) 第7回：「造形発達③ 幼児期の立体造形」 幼児期の立体表現の事例を通して、造形的認識を理解する。 第8回：「造形発達④ 児童期の造形1」 児童期(小学生)の造形の特徴についての説明 幼児期における描画との違いを、両段階の描画を比較対照することによって明確化する 第9回：「造形発達⑤ 児童期の造形2」 児童期における全体的発達に関する知見をもとに、児童期における造形の意義と課題を示す。 第10回：「造形発達⑥ 児童期の造形3」 児童期における造形教育のあり方について、基本方針と手法を理解する。 第11回：「思春期の造形1」 思春期(中学生)の造形の特徴についての説明 前、二段階の描画等との違いを、それぞれの描画等の特徴差から理解する。 第12回：「思春期の造形2」 思春期の発達課題についての概説から、思春期における描画と発達の関係を理解する。 第13回：「思春期の造形3」 思春期における美術教育の意義とそのあり方についての基本概念を理解する。 第14回：「造形発達と美術教育1」 前講までの内容をまとめ、造形の発達についての全体理解を確認する。 第15回：「造形発達と美術教育2」 全員参加の討議によって美術教育と造形発達の関係について理解を深めるとともに、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と教育方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の法的理解 ③ 関連法律（日本国憲法、教育基本法、学校教育法）の概要理解 ④ 美術科教育の領域、工芸・デザインの理解 ③ 学習指導要領の理解			
授業の概要 前講（Ⅰ）における美術科教育の目的理解を前提に、美術教育を構成する各領域における目的と教育内容について理解する。			
学生に対する評価の方法 5. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度（20%） 6. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度（20%） 7. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度（20%） 8. 試験における成績（40%） ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「法律と美術科教育①」 日本国憲法・教育基本法と美術科教育の関係理解。 第2回：「法律と美術科教育②」 学校教育法、学習指導要領と美術科教育の関係理解。学習指導要領については、美術科教育の構成を理解。 第3回：「法律と美術科教育③」 学習指導要領の詳細理解。 第4回：「美術科教育の領域①」 工芸・デザイン、立体・平面の違いについてのディスカッションと領域設定内容の理解。 第5回：「美術科教育の領域②」 鑑賞領域の意義 鑑賞の視点と価値共有の意義 第6回：「美術科教育の領域③」 デザインの歴史的理解と今日的意義の理解（消費者視点からの教育） 第7回：「美術科教育の領域④」 デザイン教育と学習指導要領 第8回：「美術科教育の領域⑤」 デザイン領域の基礎知識演習 学習すべき内容の概説と、知識の確認 第9回：「美術科教育の領域⑥」 デザイン領域の基礎知識演習 回転落下体作成によるプロセスの確認。 第10回：「美術科教育の領域⑦」 工芸領域の歴史的理解 第11回：「美術科教育の領域⑧」 工芸領域と環境問題との関連から工芸領域の今日的意義を理解。 第12回：「美術科教育の領域⑨」 工芸領域と学習指導要領。 第13回：「美術科教育の領域⑩」 工芸領域の基礎知識演習 工芸領域教育で必要となる基礎知識の概説。 第14回：「美術科教育法Ⅱのまとめ」 美術科教育法Ⅱの内容を整理し、学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題について討論。 第15回：「美術科教育法Ⅱのまとめと確認」 学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題についてとりまとめを行い、本講の学習成果の確認（「択一問題」「論述問題」による達成度確認）を行う。（試験会場への資料ノートの持込は禁止する）			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と学習指導方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の基本的手法の理解 ⑤ 美術科教育の領域、平面・立体の理解 ⑥ 授業計画手法の理解 ③ 評価の意義と手法の理解			
授業の概要 前講(Ⅱ)に引き続き、領域別学習を行うとともに、学校教育で広く用いられている「授業計画」の手法を示し、その作成の基礎を学ぶ。また、美術教育における評価の意義について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 9. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 1 0. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 1 1. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 1 2. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回：「美術科教育の領域①」 平面領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第2回：「美術科教育の領域②」 平面領域と学習指導要領の理解。 第3回：「美術科教育の領域③」 平面領域の基礎知識演習。 第4回：「美術科教育の領域④」 立体領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第5回：「美術科教育の領域⑤」 立体領域と学習指導要領の理解。 第6回：「美術科教育の領域⑥」 立体領域の基礎知識演習 第7回：「授業計画①」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第8回：「授業計画②」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第9回：「授業計画策定の目的と方法」 教育成果を上げるための手法としての計画作成の意義と、計画作成の手法について理解。 第10回：「授業計画③」 授業計画基礎演習 授業計画を簡略化して作成し、策定のポイントを理解する。 第11回：「美術科教育の評価①」 教育における評価の対象、目的について理解する。 第12回：「美術科教育の評価②」 教育における評価の手法について理解する。 第13回：「美術科教育の評価③」 美術科教育の特殊性に配慮した評価の方法について基本的な理解を得る。 第14回：「美術科教育の領域と評価のまとめ」 前講の内容も含め、領域の意味と評価のあり方について内容を整理する。 第15回：試験による本講の学習成果の確認 今年度の講義全体のとりまとめを行い、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅳ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術科教育の方法と目的 到達目標：人間教育としての美術科教育の重要性を認識し、自らの問題意識に立脚した目的概念をもつ ⑦ 美術科教育の人間教育としての重要性認識の共有 ⑧ 授業計画手法の基本的作成能力の獲得 ③ 自らの視点からの美術科教育観の確立			
授業の概要 学習指導計画の策定を通して、美術科教育法Ⅰ～Ⅲの内容を学生諸子の中で再構築するとともに、美術科教育の目的についての合意形成と個別の認識深化を行う。			
学生に対する評価の方法 1 3. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 1 4. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 1 5. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 1 6. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「学習指導計画立案①」 年間計画の確認、学習指導計画の再確認 グループ編成 第2回：「学習指導計画立案②」 学習指導計画のテーマ設定 対象生徒のシチュエーションづくり。 第3回：「学習指導計画立案③」 目標および全体計画の策定の情報収集 第4回：「学習指導計画立案④」 全体計画策定チェック① 第5回：「学習指導計画立案⑤」 全体計画策定情報収集 第6回：「学習指導計画立案⑥」 全体計画策定チェック② 第7回：「学習指導計画立案⑦」 全体計画の発表① 第8回：「学習指導計画立案⑧」 全体計画の発表② 第9回：「学習指導計画立案⑨」 本時の計画の策定方法 第10回：「学習指導計画立案⑩」 本時の計画の策定チェック① 第11回：「学習指導計画立案⑪」 本時の計画の策定 第12回：「学習指導計画立案⑫」 本字の計画の策定チェック② 第13回：「学習指導計画立案⑬」 本字の計画の発表① 第14回：「学習指導計画立案⑭」 本時の計画の発表② 第15回：学習指導計画策定をテーマにした小論文(評価テスト) および学習指導計画案の製本・提出。			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 指導案作成に当たっては、インターネット情報等を含め、周辺関連情報の収集を十分に行うこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報科教育法 I		講義	黒澤 宣輝
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3 年次前期	選択 (教職必修・情報)	
授業の到達目標及びテーマ 到達目標：高等学校の教科「情報」で使用する教科書の内容を確実に消化し、生徒の力に応じた授業法を学ぶ。 また、生涯にわたり社会教育等においても情報科教育を推進する指導者としての素養を身につける テーマ：教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 情報のデジタル化及び情報通信ネットワークの特性を高校生にどのように理解させるか。その特性を活かした表現法やコミュニケーションはどのように教えたら高校生に定着させられるか。 情報化が社会に及ぼす光と影をどのように教えるか。情報社会に参加する態度はどのようなものでなければならないか。その理由を考えさせる授業法は何か。			
学生に対する評価の方法 P I S A 型学力観 (知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度) に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容 (約 30%)、定期考査 (約 70%) で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1 回 教科「情報」の構成：教科「情報」新設の経緯と趣旨、普通教科「情報」が扱う内容、 2 回 専門教科「情報」が扱う内容、高校での情報教育について 3 回 情報のデジタル化の仕組み：文字、数値、画像、音などのデジタル化について 4 回 情報機器の種類と特性：家庭、学校、企業、社会で扱う情報機器について 5 回 多種の情報機器を活用した表現方法 多様な形態の情報を統合する情報機器による表現 6 回 情報通信ネットワークの仕組み：仕組みとセキュリティ確保について 7 回 情報通信の効率的な方法：通信速度や容量、正確な伝達法について 8 回 コミュニケーションにおける情報通信ネットワークの活用 電子メールや電子会議などの効果的な活用法について 9 回 情報の公開・保護と個人の責任 情報の保護の必要性、収集・発信に伴う問題と個人の責任について 1 0 回 情報通信ネットワークを活用した情報の収集・発信 情報を適切に収集・分析・発信する方法について 1 1 回 社会で利用されている情報システム 種類と特性、システムの信頼性向上について 1 2 回 情報化が社会に及ぼす影響：多面的に影響を認識し、望ましい情報社会の在り方を考える 1 3 回 観点別評価の内容と指導と評価の一体化について 1 4 回 1 3 回の考えを基礎とした学習指導案の作成 指導計画の例、学習指導案の例を提示し、作成上の留意点を説明し 5 0 分授業の学習指導案を作る。 この指導案を使って、別講座「教育実習指導」で 5 0 分の模擬授業を行う。 1 5 回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書 (情報 c)。 参考資料：高等学校学習指導要領 (情報)			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 情報科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・情報)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 「基本情報技術者」国家試験問題レベルの学習を行い、教科書の内容をより深く理解できる力をつける。学校における情報システム全般につき、ある程度維持・管理に携われる力をつける。 テーマ： 教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 2進数を中心とした情報の基礎理論。コンピュータの動作原理と論理回路、主記憶装置や補助記憶装置、ICなどハードウェアの構成。 OSやプログラム言語などのソフトウェアについて。ネットワークシステムの原理とメンテナンスについて。システム開発法について。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観(知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度)に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容(約30%)、定期考査(約70%)で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 情報の基礎理論—1 : 奇数変換、2進数の加減算、固定小数点と浮動小数点 2回 情報の基礎理論—2 精度と誤差、10進数と2進数表現、文字データの2進コード化 3回 ハードウェア—1 : コンピュータの動作原理、プログラムの構成とアドレス指定方式、高速化技術 4回 ハードウェア—2 論理演算と論理回路、加算回路と順序回路、半導体素子と集積回路 5回 ハードウェア—3 : 主記憶装置と補助記憶装置の種類・特性 6回 ソフトウェア—1 : オペレーティングシステム、ジョブ管理とタスク管理 7回 ソフトウェア—2 プログラム言語、言語処理プログラム、流れ図の書き方とBASICによるプログラミング練習 8回 ファイルとデータベース : ファイル構造、ディレクトリ構造、データベース 9回 通信の仕組み : 通信機器と通信回線、データ伝送の仕組み、回線接続方式と通信方式、誤り制御 10回 ネットワークシステム—1 ネットワークアーキテクチャ、LANの構成と接続方式、LANの標準化 11回 ネットワークシステム—2 LANのアクセス制御方式、インターネットの機能と応用利用 12回 システム開発—1 システム開発手順、プログラム設計、プログラミング、プログラムテスト 13回 システム開発—2 : 保守と作業管理 14回 情報システムと社会 セキュリティと標準化、企業の情報化と経営、流通システム、品質管理法、経営分析法 15回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書(情報C) 参考書 : 基本情報技術者試験問題解説書			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 道徳教育の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育の果たす大きな役割は人格教育であり、道徳教育はその中核をなすものである。良き社会人、市民を育成するために、道徳教育の充実を目指して実践的指導法を身に付けることを到達目標とする。さらに、指導者としての道徳的な資質を高めることも目標とする。			
授業の概要 この講座では、学校・家庭・社会が協働して道徳教育を充実させるために、学習指導要領や具体的な実践事例などをもとに研究を進める。特に、児童生徒や青少年および大人の現状や実態を把握し、自己統制力と規範意識の育成にもふれながら、具体的な実践事例を多く取り入れた授業を行う。また、具体的な指導方法についてのプレゼンテーション・ロールプレイを行い、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲(約20%)、課題・発表(約30%)、試験の結果(50%)などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 ガイダンス(授業の進め方、青少年の規範意識と道徳観、教育改革) 2回 家庭における道徳教育 家庭環境の変化と課題、家庭教育の機能 3回 学校における道徳教育 生徒のモラル意識、日米比較でみる道徳教育の現状 4回 社会における道徳教育 学校再生のための道徳教育、社会における道徳、学校と地域社会との協働 5回 教育の概念と道徳教育(道徳とは、道徳律と道徳性、道徳的価値) 6回 道徳性の発達 道徳的価値、道徳的实践力、道徳性発達理論と道徳教育の今日的課題 7回 道徳性の一般的な発達段階 乳幼児期、幼児期、児童期、思春期、青年期 8回 戦後日本の道徳教育のあゆみ 先人に学ぶ道徳、道徳教育年表 9回 「学習指導要領」のなかの道徳教育 学習指導要領の改訂と特設「道徳の時間」 10回 道徳教育の指導法の具体的な考察 道徳の時間、総合的な学習の時間等 11回 「道徳の時間」の学習指導案の作成 主題・授業資料の選定、内容の学校・学年段階の設定 12回 「道徳指導」の実践のための研究① 13回 「道徳指導」の実践のための研究② 14回 「道徳教育の研究」のまとめとテスト 15回 道徳教育の研究及び授業実践の課題とまとめ			
使用教科書 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 東洋館出版社			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 特別活動の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育においては、児童・生徒の個性の伸長と心豊かな人間性ならびに在り方生き方の育成が重要な課題である。そのため、これらの課題に応える基礎的な知識・技能の修得をテーマとし、それに基づき各自の教育に対する考え方、あるいは生徒指導上の諸問題を主体的に考え、判断し、解決する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 「特別活動の意義」、「学級会活動（ホームルーム活動）」、「児童会活動（生徒会活動）」、「学校行事」を中心に実践例を挙げながら講義を進める。また、各自の体験発表、討論等を通して理論と実践の深化を図るとともに、生徒指導上の諸課題を解決する力や実践力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業の内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校教育と特別活動の意義（今後の学校教育の目標、特別活動の役割、児童・生徒の生活実態、人間としての生き方教育） 第2回 特別活動の変遷（戦前の課外活動、戦後の特別活動、昭和期における特別活動、平成期に入ってから特別活動） 第3回 特別活動の特質と目標・内容（学習指導要領のうたう目標、特質と指導法、内容と特質、生徒指導、総合的学習との関連） 第4回 指導計画・指導案の作成（学校の教育計画との調和、3領域ごとの指導計画と指導法、指導案の役割と指導案の作り方） 第5回 学級（ホームルーム）活動（目標と性格及び問題点、活動の内容、指導計画の作成と指導方法） 第6回 児童会（生徒会）活動（目標と性格及び問題点、活動内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第7回 クラブ活動・部活動の指導①（目標と教育的意義、実態と指導及び課題） 第8回 クラブ活動・部活動の指導②（指導計画の作成と評価）・中間試験日 第9回 学校行事の指導（目標と性格及び問題点、内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第10回 特別活動の評価（意義と観点、評価の方法と事例、人間としての在り方生き方教育） 第11回 特別活動と学級・学年・学校経営（特別活動の組織・運営、特別活動と学校事故、学級経営の内容、学級・学年・学校経営との関連） 第12回 完全学校週5日制時代の学校・家庭・地域の関わり（学校・家庭での対応上の留意点、地域の教育力への期待、学校・家庭・地域の協力、地域での特別活動） 第13回 これからの特別活動の展望と課題（在り方についての組織図、社会教育との関連、教育課題との関連、国・地方教育団体との関係） 第14回 試験日 第15回 事例研究：県立学校経営案に見る特別活動の位置づけと活動内容（事例を見て研究協議をする）			
使用教科書 現代の特別活動 ―理論と実践― <第2版> 中野目直明・小川一郎編 酒井書店・育英堂			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育実践学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校における教育活動は、各学校において工夫をこらし計画的に組織されている。内容は、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等である。それらを教授するのは教師であり、学習するのは児童生徒である。 本講座では、実際の教育活動に活かす指導方法について研究し、具体的な学習指導方法を学び、教師に必要とされる実践力の基礎を身に付けることを到達目標とする。また、研究成果の実戦への還元を確認する。			
授業の概要 この講座では、内容プリントを配布し授業を進める。学習指導の実際については実習的な内容で授業を行う。学習指導要領が目指す人間像・学力観・教育方法観を概観しながら教育の方法・技術を通して教育活動を構築する。教授メディアの効果的な活用も図る。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・発表（約30%）、試験の結果（50%）などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・教育実践学を学ぶ意義・教育実践学に必要な理論) 第2回 教育実践学の構造（学習指導要領との関連・教育実践学の領域及びその内容と方法） 第3回 教育実践学と学習指導要領（幼稚園教育要領）の理念との関連（趣旨の実現のための実践・要領の変遷・生涯学習の理念と施策） 第4回 教育における理論と実践との関わり（実践体験による教育実践学の構築） 第5回 授業設計の方法論(体験活動等の活動を中心とした学習指導形態) 第6回 授業設計の方法論(一斉・小人数・習熟度・グループ活動等の学習指導形態) 第7回 教科教育実践方法の具体例の研究（教材研究と教材開発・補助教材づくりの教育実践事例研究） 第8回 教科外教育実践方法の具体例の研究（特別教育活動・道徳・総合的な学習の時間の教育実践事例研究） 第9回 教育実践の学習方法（情報機器及び教材の活用・マルチメディアと授業構成・シミュレーション・ディベート等と授業構成） 第10回 教育方法と教育評価（指導と評価の一体化・相対評価と絶対評価）・P-D-C-Aサイクル) 第11回 観点別評価・学習指導案・評価（考査）問題の作成法 第12回 観点別評価の内容と模擬授業（観点別評価を組み込んだ学習指導案・補助教材・考査問題づくり） 第13回 学習する立場と教授する立場のロールプレイング（模擬授業の実践） 第14回 教育実践学のまとめ及びテスト（理論・資質能力・実践力の評価） 第15回 教育実践学の課題とまとめ			
使用教科書 必要に応じてそのつどレジュメを配付する。(参考書 実践に活かす「教育課程論・教育方法論」学事出版)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 生徒及び進路指導		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 生徒指導及び進路指導は特定の教師のみが行うのではなく、すべての教師が学校教育全体を通じて行うものである。そのため、生徒指導及び進路指導について教育的な概念や教育方法について、基礎的な知識・基本的な理論、技能の修得をテーマとし、児童・生徒が学校を含めた社会の中で自己を生かした活動ができるよう成長するのを援助する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 生徒指導では、「生徒指導の意義」、「学業指導」、「適応指導」、「社会性の指導」、「自己を生かす指導」を中心に事例を挙げながら講義を進める。また、進路指導では、生徒が主体的に進路選択や社会に適応するための能力の伸長を図るよう教育する方法を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生徒指導・進路指導の意義と課題（生徒指導とは、生徒指導の実践原理と課題） 第2回 生徒指導の原理と理論（生徒指導・実践の原理、生徒指導と領域） 第3回 児童・生徒理解の進め方（児童・生徒理解の意義と目的、理解の方法、支援・指導につなぐ児童・生徒理解、児童・生徒理解を左右する教師の見方） 第4回 学級経営の進め方（生徒指導からみた学級経営の意味、学級集団の力学、学級経営の方法） 第5回 教科指導と生徒指導（生徒指導と教科指導の関係、実践例の研究、生徒指導からみた教科指導の課題と解決策） 第6回 生徒指導実践における教師像と研修（生徒指導の実践上必要となる教師の資質と技能、生徒指導の実践力を育成するための研修のあり方） 第7回 学校の指導体制と家庭・地域との連携①（学校の生徒指導実践における課題・指導体制の確立） 第8回 学校の指導体制と家庭・地域との連携②（生徒指導における学校・家庭・地域社会の連携） 中間試験日 第9回 進路指導の意義と課題（進路指導の教育的意義と目的、課題、進路指導理論） 第10回 自己発見と自我同一性の確立（自己の発達、同一性の確立、自己理解と進路指導） 第11回 就労観・職業観の形成と変容（現代青年の就労観・職業観、就労観・職業観の形成と変容、就労観・職業観の形成を促す進路指導のあり方） 第12回 進路指導実践の学校体制（学校教育における新指導の位置づけ、体制づくり） 第13回 学校教育における進路指導の実践展開（「学校の教育活動全体を通じて」の進路指導、進路指導における「ガイダンス機能の充実」） 第14回 試験日 第15回 現実の高校における進路指導の手引きの研究・協議（事例を見て研究・協議をする）			
使用教科書 生徒指導・進路指導 高橋 超・石井眞治・熊谷信順 編著 ミネルブア書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育相談とカウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。			
授業の概要 不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況（15%）、レポート（20%）、試験の結果（65%）等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割 第4回 コンサルテーション 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 不登校 第9回 いじめ 第10回 ノイローゼ等病的事例 第11回 特別支援教育 第12回 クライシスセオリー 第13回 思春期の理解 第14回 教育相談を行うときの注意事項 第15回 まとめと試験			
使用教科書 『親面接のポイント』 加藤純一著 ほんの森出版 [参考図書] 『学校教育相談学 ハンドブック』ほんの森出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。			

[授業科目名] 総合演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 立川 義政・小笠原 昭夫
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 DVDを活用
授業の到達目標及びテーマ 二つのテーマ、「国際理解教育」及び「生活環境」について、前半・後半に分かれて実施する。 「国際理解教育」の目標は、総合的な学習の時間（国際理解教育）の具体的な学習活動を、どのように教科・道徳・特別活動等との関連を図りながら構成していくか、そして、いくつかの実践事例をもとに、学習活動をどのように計画し、実践化、評価していくかという一連の手順について学生相互に論じ合うとともに、学習活動案を作成し、それを発表するという授業を通して、学習活動を設定していくための基礎的な能力を養うこととする。 また、「生活環境」については、テーマとして生活環境問題から何か一つを取り上げ、そのテーマに沿って調査・研究を深めた上、いかにまとめ解りやすく発表するか、その手腕の向上を目標とする。			
授業の概要 「国際理解教育」の主たるねらいは、子供たちに、地球上に暮らす様々な文化的背景を有する人々と平和で友好的な関係を形成し、発展させる資質と能力を育成していくことである。そこで、それらを育むための教育活動を設定するには、子どもたちの発達段階を踏まえ、国際比較という観点に立って、どのように教材を構成し、学習活動を構築していくという一連の方法を身につけることが、本授業の概要である。 また、「生活環境」は、環境の時代と言われながら、ともすれば授業の主題から遠ざけられがちな生活環境を身近で切実な問題と捉え、それらを具体的に追及することにより、より健全な人間社会を構築するきっかけを作る。予め小学校低学年・中学生など対象者を設定し、対象者により深く理解してもらうにはどうすればよいか、発表・説明の方法を工夫し実践する。			
学生に対する評価の方法 「国際理解教育」では、授業への態度(30%)、数回実施する小レポート(30%)、国際理解教育に関する学習活動計画案(40%)等で総合的に評価する。 「生活環境」では、授業への参加の積極性(20%)テーマの掘り下げ方と発表にあたっての創意工夫(40%)、発表の成果(30%)小レポート(10%)などで総合的に評価する。本授業は、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教職総合演習として国際理解教育を学ぶにあたっての目的と講義内容、授業の進め方について 第2回 総合学習の歴史、現行学習指導要領に示された総合的な学習の時間と国際理解教育とは・・・ 第3回 国際化への流れと理念・国際理解のための基本姿勢、国際理解教育の実践の目標と内容及び学習方法、国際比較研究（課題研究）について 第4回～5回 国際理解教育の具体的に実践化する手順とは・・・ 国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）別に実践例をもとに研究 ①人間理解のための学習 ②生活や文化に着目した学習 ③世界の現実理解のための学習 第6回～7回 個々に設定した国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）に関し、教育的意義や発達段階を踏まえて発表し、意見交換する。 第8回 個々に設定したテーマ（課題）を具体化した実践活動（総合的な学習）について評価方法を踏まえて発表する。			

ここから「生活環境」

第9回 生活環境に関する話題提供(1)及びグループ分け。

第10回 生活環境に関する話題提供(2)及び研究・発表のテーマ設定並びに良い話し方のヒント。

第11回～14回 グループ発表(毎回2～3グループずつ)。

第15回 全員による反省と討論。小レポート。

使用教科書

参考図書「国際理解教育」(多田孝志著、東洋出版社)

(国際理解教育に関する理論や具体的な実践例等について、資料を配布して授業を進める)

「生活環境」では教科書は使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

「国際理解教育」の授業に臨むにあたり、現在、日本や世界で論点や争点になっていることに関し、日頃から興味関心を持ち、メディアや関連する書物等から情報を得よう努力しておくこと。

「生活環境」の授業については、日頃から新聞・テレビなどで報道される環境問題に注意し、人類を含めた私物の生活環境として、現在の地球がどのような状態にあるのかを考え、勉強する習慣を身につけておく。併せて、アナウンサーや落語家の話し方に注意し、話術の向上を志す。

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2012年前期まで継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 教育実習の効果を上げるための留意点を身につける。生徒を引きつける授業が出来ること。観点別評価・指導と評価の一体化について理解した授業が出来ること。教師としての基本的な生活態度定着化。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を身に付けさせる。			
授業の概要 教育実習全体の概要、教育実習の意義、実習効果を上げるための留意点を知る。観点別評価・指導と評価の一体化について理解し、これに基づいた学習指導案を作成する。この指導案をもとに全員が交代で50分の模擬授業を行い、研究協議する。また、受け入れ校の教職員や生徒に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について協議する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と模擬授業発表者に対する評価の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <3年次後期> 1回 教育実習の意義と課題、教育実習の範囲と実習内容 教員養成課程と教育実習、教育実習の意義、課題および実習生としての自覚 学習指導、学級経営、校務分掌、部活動指導 2回 全般的留意事項、実習過程での留意点 勤務・服務などについて、実習前（事前指導、実習校の決め、実習校との打ち合わせ） 実習中（観察、参加、研究授業）、実習後（反省会への準備、実習校との関連事務、大学との関連事務） 3回 良い授業のための工夫 生徒理解、自作教材、授業参観、教材研究、板書の工夫。観点別評価・指導と評価の一体化。 4回 以降 観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。 各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 この模擬授業は4年生の前期、教育実習に出る直前まで継続して行う。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 全員が交替で発表し研究協議した模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成することを心掛ける。自己の模擬授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2010年度から継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 単元計画から日案作成までを体系化し教育実習直前の総仕上げが出来ること。実習先との綿密な事前打ち合わせが出来ること。実習校での実践結果をまとめ上げ実践の自信を確実にする。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を確かなものにする。			
授業の概要 4年次の前期は、3年次の後期に学んだ内容を教育実習で実践し、教師として理論と実践の融合に必要な力量を磨く。教育実習終了後、実習校の研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして実践結果を発表しあい、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究する。			
学生に対する評価の方法 実習直前の指導、実習校での評価、事後指導結果を総合し、PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <4年次前期> 1回～5回（4月～5月） 3年次後期に引き続いて観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 6回 教育実習に出る直前の指導 3年次後期、1～3回で指導した内容の再確認と総仕上げ。特に勤務・服務、実習生としての心構えを重視。 （6月第1～3週、教育実習） 7回以降 教育実習を終えた後、実習中全日の行動を簡潔にまとめた報告書の作成、この報告書と研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして体験を発表しあい、自己評価、相互評価を通して、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究協議する。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 実習校の指導教官と綿密な打ち合わせを行い、大学での模擬授業学んだ内容を踏まえて、生徒を引きつける自作教材を作る。板書計画と授業のし易い学習指導案を作成する。実習校での研究授業の前に何度も自作教材と指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習 I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ ：教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話 (オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について)、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施 (実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する)、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみる事。			

[授業科目名] 教育実習Ⅱ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 中学免許も希望する時、実習Ⅰに続けて履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ： 教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			